鬪士

30

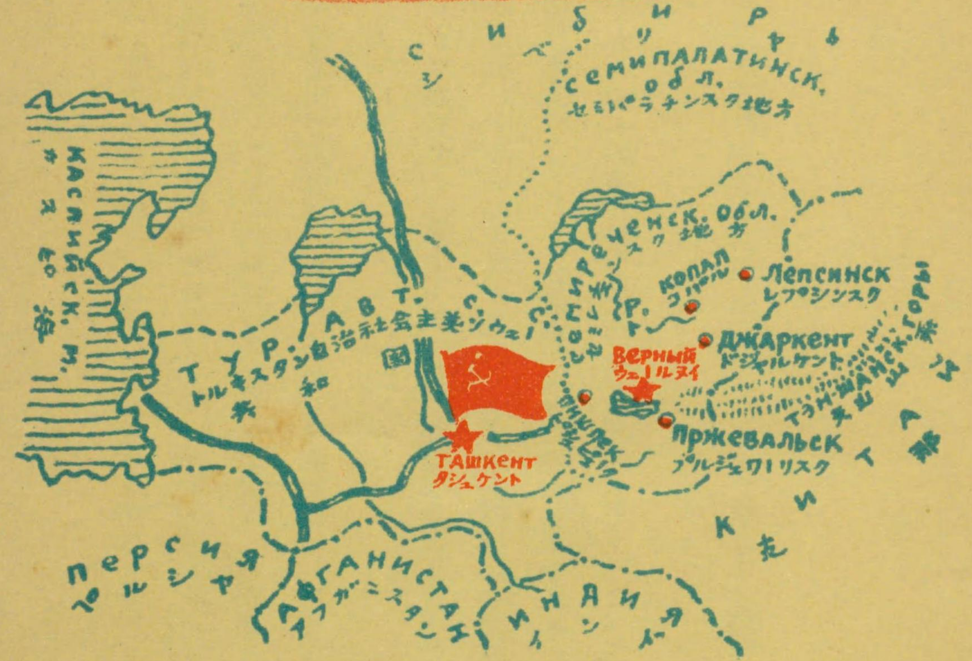
★マルクス作
★小林明敏訳

東京
マルクス書房版

596-46
1200501527731
596
46

叛亂

フルマノフ作
小宮山明敏訳



東京
マルクス書房版
★
1930

昭和五年・内務省・図書

596-46

序

フルマーノフの『叛亂』と日本プロレタリヤ文學の現段階

ドミートリー・フルマーノフの『叛亂』（一九二六年、モスクワ＝レニングラード、國立出版所發行）は、トルキスタン自治社會主義ソウェート共和國（但し、一九二五年三月、その民族分布の狀態に應じて、トルコメニスタン及び、ウズベキスタン兩ソウェート共和國に改組分割せられた）確立への過程におけるセミレチェンスク地方ウェールヌイ市、及びこれを中心とする隣接諸町村の暴動を題材としてゐる。

トルキスタン地方は、十九世紀中葉帝制ロシヤの獲得した殖民地で、同地方キルギス人は移住ロシヤ人、及び本國政府の殘虐な壓迫のもとに、被搾取被抑壓殖民地民族としてのあらゆる迫害を受けた。たまたまその不平不滿が決死の××となつてあらはれるや、本國政府の×隊出動による徹底的彈壓によつて、被搾取キルギス人は更にその土地——山林、牧畜場をも掠奪され、その上に、大規模の計畫

的な大××が行はれた。そして移住ロシヤ人はそのタ×した土地によつて富農階級を形成した。

しかし、一九一八年以來、ソウエート●トルキスタン樹立の組織的軍事行動が開始され、ついで政治經濟的建設事業がやうやく進まうとして、この時に到つて初めてその解放運動に成功しようとしてゐるかつての被搾取被抑壓殖民地民族だつたキルギス人は、今やソウエート政權の最も强力にして執拗なる擁護者となつてゐるに反して、かつての移住ロシヤ人である富農階級は今やその奪取されてゆくあらゆる特權のためにソウエート政權に對して生命的な憎惡と呪詛とを抱き、殊にその食糧配給制度、徵發、無賴漢銃殺、赤色國民皆兵に反對して、ソウエート政權轉覆の機を待つやうになつた。

この富農階級出の赤衛兵を中心とした富農、未組織農民、無賴漢の大群が、一九二〇年六月中旬、約一週間にわたつてセミレチェンスク地方ウェールヌイ市要塞に籠城×動を起した。そのとき、『叛亂』の作者フルマーノフはウェールヌイ市所在トルキスタン第三師團軍事會議長であつたが、同時に、對暴動臨時作戰本部幹部として、タシュケント所在トルキスタン戰線革命會議を驚嘆せしめたほどの絶倫の精力と巧妙にして執拗果敢なる戰術とによつてこの暴動を鎭壓した。

そのときの血の記錄がこの小說『叛亂』である。

『叛亂』は、フルマーノフの代表作であるだけでなく、中央『黨員』の活躍を描いたものとしてソウ

エート同盟文學史においてもモニュメンタルなものとされてゐるが、文學形式としては未だ「記錄小說」の域を脫してゐない。しかし、記錄小說には、數學的にまで正確な、直接的な解り易いプチ的要素と、過去の鬪爭の正確な記錄としての獨自な價値をもつてゐる。

——だが、それだけに、その獨自の價値を生かすためには、殊に極めて正確な正統的な觀點と、極めて十分な調査とをもたなければならない。

現在、日本における小林、德永、岩藤、鹿地、その他の數多くの記錄小說と、この『叛亂』がその形式においてまで相似してゐることは非常な興味である。內容の把握、取扱方においては、「爭議」と「內亂」との差、及び政權把持者が逆であるとの二つを除けば、おほよそ同樣である。從つて、『叛亂』の譯出は、單なる先進ソウエートの代表的作品の紹介であるに止まらないで、日本のプロレタリヤ文學の現段階に對して殆んど對等的位置において適確な交涉をもち、相當程度の影響、刺戟をあたへるものであると信ずる。

そして、『叛亂』は如何なる點において日本プロレタリヤ文學の現段階を刺戟するか？　前に擧げた記錄小說としての二つの條件に關してと、それに更に重要なる交涉點二三について次に列述する。——

(1)……正確な觀點の把持について。

わが小林、德永、その他の小說においても、勿論、相當の高度にまで正確な唯物史觀的觀點の把持をみる、殊に小林の『暴風雨警戒報』（一九三〇年二月）はその最高である。しかしながら、この意味においては、當然のことではあるが、先進ソウェートのコムミュニスト・作家には實に甚しく遠く及ばない。もとよりそれはわが作家が最も尖銳なるものにして、なほことごとく黨支持團體、または黨同情者群であるに止まるものとみられるに反して、彼等は作家であると同時に黨員であるといふ事實にもよるであらう。殊に、その代表的なものは、『コムミサール』（黑田辰男譯、マルクス書房版）におけるリベヂンスキーと、この『叛亂』におけるフルマーノフである。フルマーノフはその題材となつてゐる暴動勃發の當時、師團軍事會議長の要職にゐたほどであるから勿論のことであるが、前記の場合におけるリベヂンスキーにおいても、新經濟政策實施後の諸現象に對する解釋において、共に黨幹部派の把持する正統的な觀點に立つてゐる、――確實に立つてゐる。この正確なる觀點に立つことによつて、最も確實な現實の把握に成功してゐるのであるが、この點は、『叛亂』が現在の日本プロレタリヤ作家にあたへる刺戟の最も大きいもの〻一つでなければならない。

(2)……十分な調査。殊に地理的特殊性、民族的特種性の十分なる描出について。

これも或る程度までは日本の作家にも努力の跡がみえるが、全部がこの作におけるほどではない。

平凡な會話式によつてゞはあるが、キルギスの歷史を述べ、またペルシヤにおける××主義的××に觸れて、トルキスタン・ソウェートの特殊な重要使命を語つてゐるなどは、注目すべきである。被搾取殖民地民族と本國移住富農階級、及びこの兩者とソウェート權力との交渉、――これがこの作の重心を成してゐるものであるが、その重心把握表現の確實さは實に壓倒的である。

(3)……形式について。

形式については、この作から特に學ぶべきものはない。この點については、現在の日本プロレタリヤ作家の代表的數名は明らかにフルマーノフと比肩しうる。その一二の代表作は明らかに『叛亂』を凌駕してゐる。たゞ、こゝに注意すべきは、日本の作家にあまりに小細工を弄するきらひのあるものゝあることである、その語句の簡潔、場面の急轉換等の傾向は、それが方に獲得せらるべき表現上の力學性、綜合性の代用、またはそれへの過程としてのみ、――即ちかく批判的にのみ許されることであつて、無條件にこれを肯定すべきものでない。この批判を忘却した亂用は、島國的こせこせしさ、小市民的焦燥性、またはアナーキー性を部分的にもせよ想はせるものがある。この意味からいへば、『叛亂』のこせこせしない鋼鐵的鬪爭性は、なほ、わが作家にとつて一つの刺戟たりうるであらう。

更に、題材そのものについて特に注目すべきことは、――

(4)……被搾取殖民地民族の運命について語つてゐること。

日本のプロレタリヤ作品には、殖民地を題材としたものが驚くべく少ない。もし準殖民地のやうな場所を取扱つたとしても、移住本國人のことに關してゞあつて、殖民地民族にふれることが稀だ。過去の段階における觀點から描いたものはないとしないが、現段階の前衛の觀點からこれを主題として描いた力作のないことは非常にもの足りない。殊に、日本においては、この被搾取殖民地民族の解放運動は極めて重大な關係がもたれてゐるではないか。日本の前衛作家にとつて最も重大な主題の一つがこゝによこたわつてゐるのをみるのである。

(5)……地理的特殊重要性

これは日本のプロレタリヤ作品と比較していふのではなく、單に『叛亂』の題材それ自身についていふのであるが、(2)においてすでにふれたやうに、ソウエート・トルキスタンはペルシヤ、アフガニスタン、インド、支那西端に境を接し、今後、極めて機微な、重大な位置に立たうとしてゐる。我々はソウエート・トルキスタンへ向つて興味をもつであらう。

表紙の赤衞兵はMeguro氏の作を參考した。扉はソウエート・トルキスタンの略圖である。但し、『叛亂』において問題となつてゐるセミレチェンスク地方はやゝ明細にかいた。

一九三〇年三月、世田ケ谷にて

小宮山明敏

叛亂

★

千九百二十年。五月。タシュケントの並樹路は——あのからりとした東方の早春に輝かしい。なまあたゝかい空氣には——眠むさうな、ものうい靜けさだ。ちつぽけな店のあたりでは、ごてごてした色彩の服をきたサルト人たちが汁のおほいたね無しぶどうをぺちやぺちやしやぶつてゐる。珍らしいお客だ、街角の向うから毛皮の普段着をきたのがとび出してくる、綠色のカバンをもつたのがさつと滑るやうにゆく、遠くでは自働車の音がする——誰かゞ革命會議へ急いでゐるのだ。皆、あそこへ——あの大きい石造の家へ、……そこでは生活がおそろしい力で煮えくり返つてゐる、そこは文字どほり不眠不休だ、……頭の大きい飾りピンや羽毛をつけた小旗やいろいろの色をした星などでかざられた壁いつぱいの大地圖の上を絶えず誰かの指さきが熱病にでもをかされたやうに急がしさうに動いてゐる。

眠むさうな、ものうい、をし默つた靜けさだ。死の町の通りには死の和やかさだ。だが、あの石造りの家では——大テーブルをかこみ、壁にかゝつた大地圖を前に、小机のかたわらで、絶えず何かぺ

ちやくちやしやべつてゐる、――不思議な名前だ、――

イルガシュ、マダミン、ハル・ハードジャ、クルシィルマート……

苦難のフェルガン地方は、絶えずゴロツキどもに惱まされてゐるのだ。他の地方でも、遠くセミレチェンスク戰線では、コパル附近で白軍は降服したが、――その狂暴な敗殘の白軍がアンネンコフやシチェルバコフといつしよに支那方面へなだれこんでゐるのだ。……その道を絶ち、追擊し、またとかうしたひどい戰禍のおこらぬやうにたゝきつけてしまはなければならんのだ。革命會議は一瞬のたゆみもないおそろしい注意をはらつてゐる。こゝへは、トルキスタンの春の太陽の金色(こんじき)の光りもとゞかない。こゝの連中は別人種だ、――夢心地で並樹路から並樹路へとさまようてゐるのとはちがふ、がつしりとした體を太いベルトでしめてゐる、皮のチョッキにはピストルをさしてゐる。ひきしまつたいかつい黃色い顏だ、きびきびしたはつきりとした言葉だ。のんきさうにたね無しぶどうをしやぶつてゐるごてごてした色彩の服をきた連中は、ふと彼等をみると、おどろいた眼付きでのろまさうに彼等のあとを見おくるのだ。

革命會議を守るのも――今日限りだ。明日は、早朝、タシュケントを去るのだ。セミレチェンスク戰線、ウェールヌイ地方へゆくのだ。興味ある未知の仕事なのだ。例のワシーリー・ワシーリッチが

非常に長い指令書に樺色の判を押してくれた。私は一度ならず思はず微笑んだ、こゝに百項から成る全プログラムがある、軍令だ、おれの信仰の全象徵だ、――もし、――と私は考へた、――この指令にかいてあることが全部實現されるには、――少くとも二百年はかゝる。これが指令者なのだ、その彼とゝもに水にも溺れることなく、火にも燒けることなく。……見ると――ワシーリー・ワシーリッチ自身も微笑んでゐる。だが、こゝは冗談をいふべき場所ぢやない。彼はむつちりとして眞面目くさつた顏をしてゐる、それが義務なのだ。彼は後では吹き出すだらう、が、今はすまして指令書へ判を押してさへゐればいゝのだ。黑いひげの下の唇を固く閉ぢてゐる、そして嚴寒に杯を傾けたあとのやうに荒々しい口をきいてゐる。

これは革命會議のことだ。その突きあたりには――戰線政治部。こゝが、また、大へんだ。遠方へでかけてゆくなどいふのは――ウソだらうか、どの位の期間なのか、どういふ事件なのか、どんな危險があるのか、知つてるのは――責任ある幹部連だ。我々は、こゝでは、政治部では、みんな一家族のやうに親密だ。多くのものが過去の戰鬪のために固く結びつけられてるのだ。マフノーフスク暴徒の追擊、コルチャック軍とのウフィムスク交戰、ウラルの大ステップ、ドンの荒原、――デニキン、クラスノフ、カリェーヂン、ボクローフスキー。經驗は――各人各樣。多くのものに――共通性。

――かくて我々は――同一者なのだ。

この一家族はしつかりと結びついてゐる――仕事が好きだ。昨日は、晩になると、我々は最後の會をやつた、そして深更までいつしよにこしかけてゐた、それは友情にみちた別離の言葉だつた。みんな別々のことを思ひ出した――或るものは紀念すべきことを、或るものは大事なことを。だが、いちやうに、快活なざわめきだつた。――

――だが、若いの、別れるのはつらいぞ！　慣れるといふことば――小さな事ぢやない。殊に、かうした若い連中にとつて、仕事に慣れるといふことは――全く大事件だ。

こちらは親友の一團だ、――

寡言默行のニキートチェンコ、不撓不屈のルバンチィク、みんなに好かれてるはしやぎ屋のアリョーシヤ・コロソーフ、煙草のみでふさぎ屋のポレョース、かわいゝ小娘のリーダ・オトマルシュタイン、未來の女大臣たるべきトウルケスターナ、考へ深い老ボリシェウイーク――カペリニーツキー、クロンスタット戰の砲丸に輝かしい生涯を終つた忘れられないパヴルーシャ・ウォイティェーク、今はフェルガンの野に屍をさらしてゐる無髯の青年ガルフンケリ。

特に親しい友人の一團だつた。

最後に――おたがひに別れの言葉をかはした。

押しつけられるやうないたましさと胸騒ぎとを感じながら明方になつて別れた。

その夜が過ぎた。朝になると、これといふ用事はないのだが、我々は教治部へ集まつた。強ひていそがしさうにしさへした、――我々は行かねばならん、が、彼等は我々を――指導しなければならんのだ。かうした我々のおたがひの氣忙しさをみんな氣付いてゐた、理解してゐた、そして少しは恥しい氣さへするのだつた。

――何をしてるんだ、出發ぢやないか、もつとてきぱきとやれ。

みんなかうした考へをもつてゐたのだ。そこで特にいそいで身分證明書を用意しだした（こゝでも入るのだつた）、食糧などもいそいでつめ込み、いろいろ、佩嚢だの、トランクだの、バスケットだのといふものをしばり上げた。……最後の手紙をかいた――どうして書かないでをられよう、――ウェールヌイ地方へゆくには、山を越え、谷を渡り、大平原を横ぎり、馬上六〇〇露里以上の行軍ではないか。

ウェールヌイ地方のことについては我々はあまり知らなかつた。勿論、何よりもまづ、數年前、といつても全く最近のことだ、――一九一一年か一九一二年かに、ウェールヌイ地方では地震があつた

さうだといふことを、不思議さうなおどろき顔で次から次へといひつたへた。……

——それが……どうも大した奴だつたさうだ！

かういつて相手の顔をのぞきこむと、やつこさん大いにおどろいてゐる。このニュースは、彼自身もよくは知つてゐなささうなのだ。だが、さうしたとき我々はいつも子供らしいいたづらがやりたかつたのだ。

さういふ地獄のやうなところへやつてゆくのが——それが英雄ぢやないか？

だが、この『ニュース』は出發の二三日前にもう五六ぺんどほりもおたがひに云ひ傳へたので、流石のニュースもだんだん効き目がなくなつてきた。それから、我々は、また、恐ろしく悪い道路の話をきかされた。老人どもは、山間の急流や、地滑りや陷沒のために道などいふものは全くめちやめちやになつてゐる、橋などは洪水のためにさらはれてしまつてゐるだらう、なぞといつた。

しかし我々はおもしろかつた。かうした噂やニュースをきかされた今、出かけてゆくといふことは——何だか冒險な、ファンタスティックな事件におもはれるのだ。さうだ、急げ、急げ！

それにかうしたときにありがちなやうに——おれにはどうもこんなふうに思はれる、おれはこんなふうだと想ふんだが、なぞとやたらに我々にうそをつくのだつた。だが、我々はおめでたい顔をして

熱心に耳をかたむけてきゝ、そして人のいふことは何でも信じこんで心からお禮をいつたものだ。

とうとう——その時だ、何もかもよくきいた、荷物もできた、署名もした、キツスもした、——さらば、タシュケントよ！

小さなベルをつけた馬はかけだした。こゝでは何を語らう、——我々は馬上の人となつて旅立つたのだ。

★

タシュケントからウェールヌイまで——八〇〇露里以上だ。鐵道ではその頃はブールナヤ驛までしかゆけない、それからさきは—六〇〇露里—驛傳馬、トロイカ。汽車はのそりのそりと、退屈な限りだ、我々には分らない原因のためにまたしては停車する、長いあひだ動かない、とうとう、どこかでほんとうに立往生してしまふ、——前方にあたつてひどい積雪でもあるらしいのだ。あの陽氣なトルキスタンの春だといふに！ だが、我々はこの難行軍については少しも腹を立てない、——タシュケントであんなにいろいろと噂をきいた遠い神祕なセミレチェンスク戰線のことでいつぱいだつたのだ。すきまだらけの冷たい車體の中で、或るものは棚の上に、或るものは床の上に、輪座して、我々は熱

心に現在の政治上その他の仕事の方法について論じ合つた。全く新しい方法、いま〻でになかつた條件、都市プロレタリアートの不在、方言を知らぬこと、――これらは我々が頭を惱まし、考へ、語るべきことだつた。そして我々は熱心に話し合つた、默るといふことなしに、熱し切つて、ひどく興奮して。といふのもこの長い道中を論爭でもするよりほかどうしてい〻か誰も知らなかつたからだ。

我々は――全七百露里の行程中、いろいろの仕事をやりながらゆかうと決心した。たとへば、土着貧民や地方農民の大會を組織公開したり、委員會を召集したりするのだ。そしてその地方視察に資する。彼等にとつて重要な、またはあまり重要ではない必需品を知り、新踏査によつて各村落に何が必要であるか、何を援助すべきかを考察する。我々の知るところを語り合ふ。タシュケントでは何が行はれてゐるか、その他の諸地方、殊に――遠い首都のクレムリンでは何が行はれてゐるか……彼等に話してきかせる。彼等は瞳を凝らし呼吸をころして一言一句をきゝのがすまいとする。

我々は途中、かういふふうに仕事をしてゆかうと決心した。そしてさういふふうにやつた、かうした二週間の仕事によつて我々は全セミレチェンスクの情勢に目鼻をつけることができた、我々は豐富な材料を獲得した、今後の困難な重大な仕事に對する準備ができた。だが、このことはあとで、あとで……

★

かうして、また我々は冷たいよごれた車體の中の人となつた、火のやうになつて當面の仕事の是非を論じた。

談論風發、途中の小驛をどんどん過ぎて、最終驛――ブールナヤに近づいてきたのも知らなかつた。タシュケントの果樹園も、溫かい太陽も、透明な青空も、サルト人のあのごてごてした色彩の服も、もう遠く後方へおきざりになつた。この地方の道路の惡い季節は――かたい防水帽をきても間にあはない霙や、毛皮の外套でも駄目な雨などの降る時、――山おろしの吹雪や夜明方の冷氣の襲ふ時だ。

見よ――遠く、遠く、曠野の果に、天山山系の雪が太陽の光線にまぶしく輝やいてゐるではないか。近いやうでもあり、遠いやうでもある。だが、これから先、――まだまだひどい沼地や、荒れ狂ふやうな山間の奔流や、壞れた橋、斷崖などが我々を待ち伏せてゐることだらう。高地へゆけば一度ならず名殘りの嚴寒に襲はれることだらう、吹き荒ぶ山おろしは名殘りの吹雪を捲き起すことだらう――地方の物知りの豫言するところなのだ。

タシュケントを遠ざかるにつれて、道はだんだん高くなつてゆく。そして豪然たる巨岩がだんだん

道の兩側へ迫つてくる。

平地では雪はほとんど溶けてしまつてゐた、麓から高く――山へかけて殘つてゐたゞけだつた。

山を襲ふ深い霧やおほひかぶさる暗雲をとほして、ほんのときどきちよつと太陽が顏を出す。あんたんとしてゐる。寒い。靜かだ。植物もない。たゞ、キルギス地方の村落や、あちこちに張つてゐる淋しい灰色のテントの群のあたりに、――名も知らないいぢけた灌木が淋しさうに黑ずんでゐるのがみえるだけだ。サルト人はこゝにはみあたらない――キルギス人が棲息してゐるだけだ。この山間の空地の傾斜面で――キルギス人は牧蓄をやつてゐる。驛の附近には移住民が住んでゐる。主としてロシヤ人だ、――沿線の町に特に多い。

我々はブールナヤに到着した。

やつとのことで百姓の荷車を手に入れて、それにいろいろの荷物を載せて、がたがたぴしぴしと――遠い道をゆれながらゆくのだつた。私と話し合つた百姓は新移住者――最近到着していまだにうまくいつてゐない農民たちのことをみづから進んで詳しく話してくれた。昔からの住民――富有な村民たちのことを話してくれた。山で牧蓄をやるだけで農業のできないキリギス人のことを話してくれた。土着キルギス人と農民――以前帝政時代に容赦なくキルギス人を搾取した富農階級との間の昔からの

かくしつについて話してくれた。

非常に重大で興味のあることをたくさん話してくれたのだつた。後になつて數ケ月にわたる困難な仕事の最中、またしては思ひ出されるやうなことを知らせてくれたのだつた。言はば、――中々悧口な物識りの百姓に落ち合つたわけだつたのだ。

かうして――村から村へ、郵便局から郵便局へと――長い旅をつゞけていつた。所によると、長いあひだ滯在して、豫定の計畫を實行するやうなこともあるし、また、所によると――休むひまもなくどんどんと前進していつた。局員と極論することもあり、セミレチェンスク中部でタシュケントへ向けてゆく同志と落ち合つて話しあふこともある。

さうした同志の一人、キルギス人のチュルベコフは、淋しい山間の局で、キルギス人種のおそろしい悲劇、一九一六年の生々(なまなま)しい悲劇――大虐殺のことを物語るのだつた。

――この大虐殺のことを理解するためには、――と、彼は初めるのだつた。――一九一六年以前にさかのぼらなければならないんだがね。ツァールの政府は、政策上、この流血の慘は到底避けることのできないものだとしてゐたんだね。實際の話が、見てみたまへ、――政府は、拓務省の手を經て、この未開のセミレチェンスクへ農民大衆を追ひ立てたものなんだ。すると、その結果として、その農

民はどうなつたと思ふね？　農村成金となりすましちまつたわけなんだ。我々はそれだからといつてやつらを責めるわけにはゆかんぢやないか？　この地方の環境がひとたびその意識を決定した以上、どうも仕様がないぢやないか。ちよつと、考へてもみたまへ、――新移住民は土地を與へられる、生計を立てるについて援助も與へられる、大財産を作ることさへもできるやうになつてる、といふ調子なんだ。事實、だんだん富有になつてきて、地主にもなるといふわけだ。コサックにしても全くこれと同様なんだよ。ところで、一方――迫害され、嫌惡される土着民はどうかといふとだね。援助が與へられないといふだけぢやないんだよ、――年々ますます奥地の方へ追ひ立てられ、だんだん高地の方へ追ひやられる、とうとう良い畑からも水からも遠ざけられてしまつたわけなんだよ。そこで、キリギス人としては、かうなつた以上、牧畜でもやるより他しようがないぢやないか、――ところで、今日までそれをやつてきてるんだが、全く、どうも、……あゝ！……

さういつてチュルベコフは手を振つた。

――うまくゆかんかね？

彼にたづねた

――うまくゆく筈がないよ、わるくなる一方だ、それも仕方がないや、――かんじんの家畜も全部

で二〇パーセントから三〇パーセント位までしか殘つてない始末なんだからな。……キルギス人は、いまは、もう、全く文字通り素手になつちやつたね。尤も、――家畜も豐富で、土地も自由だつたころには、そりやあ、こゝにだつて何の不足もなかつたさ。一言つけ加へなきやあならないことは、この地方には、いまだにタラント族やドゥンガン族が住んでゐつてことなんだ、もつともさう多數に上るわけぢやないけれどね。耕作もやれば、ちつとばかし手工業もやる、馬子も雲つつてわけでね……これが、また、中々馬鹿にならんので、山も大ぶ占領してるつてわけなんだよ。全體からいへば、なるほど百五十萬の住民中、キルギス人は七九五パーセントに近い、即ち四分の三だね。……ところがその四分の三の連中にいつたい生きる意義があるのかね？　皆無なんだよ。全く皆無なんだよ――それつきりのことさ。ちよつと、君、考へてみたつてかわいさうになるだらう、――こゝには例の農村成金もをれば、町の官吏もゐる、ところどころには郵便局などいふものも建つてゐる。それから、お次に、商人風の奴がやつてきて、さて、牧畜業に手を出し、いろいろと荒しまわりやがるんだ――ところで權力のあるところには、必ず醜聞があるときてゐる――それやこれやで不幸な何萬といふ大衆が全くの骨と皮ばかりになつちやつたのも無理はないわけなんだよ。ところで、中央政府や地方官廳の連中ときたらキルギス人のことゝいへば犬みたいにしか思つてないんだからね。ぶち斬らうが、突

きのめさうが、やつつけつちまはうが――全く當り前のことゝしきやあ思つてないんだからね、要するに――何の責任も持たねえつてことなんだ。それで、君、誰に向つて苦情がいへると思ふ？　周圍はまるでかこひだらけだ、こゝへはキルギスの野郎もゐてもいゝ、こゝへはゐてはいかん、――こゝでは打つ倒す、こゝでは打ちのめす、こゝでは、おつと、撃ち殺してしまふぞ、……つてな工合なんだ。不幸なキルギス人は非常な惱みに落ち入つたわけなんだが、自分の反抗をどう現はしていゝのかこの重い鐵鎖をどうして切り離したものなのか、ちつとも知らなかつたんだ。さうしてるうちにだ、とうとう一九一六年となつたんだ。その時までに、游牧の民キルギス人は一度も軍隊に動員されたことはなかつたんだが、そのときは、突然、急電につぐに急電さ。――何萬といふキルギス人を大砲の食餌にしようてんだ。ところが、どうだ、キルギス人はとうとう勘忍袋の緒を切つた――結束して立つて反抗の火の手をあげた、ツァールの軍隊には參加しねえつてんだよ。このおどろくべき不滿の波は全セミレチェンスクにおしひろがり、から山山へとつたはつて、とうとうキルギス人はおほつぴらに鬪爭を開始したんだよ。ツァールの政府は電光のやうな速さで憲兵分隊を派遣する、武器を輸送して富農階級の連中に供給する……そして、とうとう、例の大虐殺さ。この流血の鬪爭も仕方はないや、段違ひさ。――一方は、武裝した憲兵と猛り立つた農村成金の連中だ、ところで一方は、ほとんど武

裝してない土民なんだからね、たゞ絶望と孤立とのためにおどろくべき勇氣と忍耐とをもつに到つたつていふだけのことなんだからね。尤も、偶然にたゞの農民や油斷してた分隊にぶつかつたキルギス人は中々頑强に抵抗しはしたが、結局、長つゞきはしなかつたさ、そして到るところで慘敗し、だんだん追ひつめられて、自分たちの住んでたところから追ひやられてしまつたんだ、――恐怖におびえた五萬人ほどのものはいち早く國境を越えて支那方面へ落ちのびてしまつたが、……この地方では到るところで、テロリズムだ、――母親の眼の前で子供を突き殺す、赤ん坊の小さなかわいゝ二本の脚をわしづかみにして、その頭を棒ぐひで打ち割る、するとわつはつはと笑ひこけてる下手人どもへ腦味噌が飛びかゝる、捕虜になつた連中を整列させといて――初めの奴から順々に頭を打ち割り、腹をつき裂いて、臟腑をひきづり出す、女房や娘連の强姦勝手放題、火事のために牧場はめちやめちや……不幸なキルギス人はもう駄目だと思つてしまつたことだつたんだ。これが、――あの忘れることのできない、何か歴史的な贖罪だとでも思はなければならなかつた言語に絶した恐ろしい年の出來事なんだよ。……

チュルベコフは言葉を切つて、頭髪をなであげながら、その智的なもの悲しさうな瞳でじつと私をみすえるのだつた。

——ところが、君、——と、私はいつた、——いま、歴史的な償ひがやつてきたぢやないか、革命がさ！……革命は受難の貧しいキルギス人には貴く、農村成金の奴には憎らしいものだつたぢやないか、君。……

——さうだよ、おれたちもそんなふうに考へてもゐるし、話し合つてもゐるさ、だが、たゞ……

彼は言葉に窮したやうだつた——話がとぎれた。だが、私は、彼の考へにくちばしを入れようとはしなかつた、默つたまゝ、彼の話のつゞきを待つてゐた。

——闇といはうか、……無智といはうか——全く、それは恐ろしいもんだよ。それさへなければ、これまでとても彼等はこんなに束縛されたり困窮したりはしなかつたんだがなあ。あゝあ、とても何時までたつたつて！

——そのうちにどうにかなるよ、——と、私はいつた、するとこの何でもない言葉のために何だかぎこちない氣持になつた。

——どうにかなるつてこたあ、このおれだつて知つてるさ、——と彼は、私の言葉には別にこれといふ意味もなく何でもないものだつたことに氣付かなかつたのか、かう答へていつた。——だが「そのうち」といふのが何時のことだかね。手つとり早くはゆかないよ。知つてるかね、君、——と、彼

は急に活氣づいていつた、——死のやうな恐怖のために支那の方へ逃げていつた例の五萬ばかりのキルギス人がだね、——あの連中が歸つてくるんだよ。トルキスタン中央執行委員會は、彼等に歸つてくるやうに、そしてあらゆる援助をあたへようつて通牒を發したんだよ、——それにね、そのための特別委員會までこしらへたんだよ、首席はドジィナザコフらしいが。……その委員會がこの地方へやつてくる筈なんだよ、たゞまだ來てないだけの話なんだ。……だが、全く並大抵のことぢやないよ——全く大へんなことだよ、あゝあゝ、全く大へんなことだよ！……

——と、いふと？

——かうなんだよ、——その逃げた連中はだね、四年のあひだ全くひどい苦しい目にあつてだ、飢え死にしたものもたくさんある、家具なんてものも煤けこわれて、どこへもつてつたつて役にも何にも立ちやしないんだよ。それで、その苦しみぬいた、飢えきつた、文字通り無一物のやつこさんたちが——こゝへ歸つてくるつてんだらう。ところが、それで、いつたい、こゝに何があるつてんだ？牧場の燒跡か、もうとつくの昔に農村成金の奴にとられてしまつてる土地と建物か、どつちかぢやないか。その成金奴を追つぽり出さうつてことになると、そりや、また、——新しい戰爭だ。……新しい××だ。たゞ、それが今度は成金の連中のだつていふだけの話さ、——キリギス人から奪つた

土地を守らうつてんだ、自分の權利、自分の財産を守らうつてんだ。……何しろかういふ狀態なんだよ。トルキスタン中央執行委員會はどえらい權力をもつてるつて話だが。そりやあ、全く、さうにちがひないよ。さうでなくちやあ、こんな仕事にとりかゝれるわけのもんぢやないからね。……だが、おれは心配でならないんだよ、これはどうしてもたゞではすまないよ、こんな問題はちよつとやそつとのことでは解決しやしないよ。……

私は、そのときは、チュルベコフの心配してることがまだはつきりとは理解できなかつた、――私は後になつてやつと理解もし尤もなことだつたとも思つたのだつたが、いまはたゞ單に話をきいて言葉通りにそれを信じたのだ。彼の單純な卒直な話し振りは不思議に人を說得する力をもつてゐた。

我々の小さな燈火はもうとつくに燃えきつて消えてしまつてゐた。部屋の中は眞暗だつた。思ふ存分話し合つてから、固い固い握手をした。そして私は次の部屋へはひつていつた。そこでは同志はもうみんな床の上に眠りこけてゐた。チュルベコフはそこに止まつて長椅子の上に寢た。

★

我々は、すでにこゝへやつてくる途中で、セミレチェンスク地方の內亂のことは知つてゐた。

それは一九一八年に初まつたことだつた。白系コサックに對抗して、セミレチェンスクの農民が蹶起したのだ。農民とコサックとが衝突したのだ――セミレチェンスクの富を完全に支配しようとするものと、未開な土着民大衆を搾取しようとするものとがだ。この主として金持から成る、ところによると單なる農村成金的農民から成るセミレチェンスク「赤」軍、――この軍隊は長いあひだ中央政府やその役人の一人たるシャーヴロフの意志を少しも認めようとしなかつた――秩序も何もなくつひに壞滅してしまつたのだ。この悲劇の後、セミレチェンスクと中央との關係は特に密接なものとなつた、そして今は、セミレチェンスク戰線が本質的に淸算された一九二〇年の春、――今はすでにセミレチェンスクの軍隊も、以前のやうに無秩序でもなく出鱈目でもないが、總司令には經驗の深いビェーロフがなつてゐる。ビェーロフの名は全トルキスタンに響きわたつてゐる。セミレチェンスク僻遠の重要地コパルに、白軍一部が殘つてゐる――捕虜が七千もヴェールヌイ地方へ落ちのびてゐる。將官連とコパルから支那へ逃走したのはたゞいちばん亂暴な連中だけだ。だが、支那邊にも一萬からゐるらしいとのことだ。かうしたことはみんな道中で知つてきてゐたのだ。

ウェールヌイ地方へ。――最終の小驛よ、さようなら、さあ、來い、未知の――ウェールヌイ。

だんだん注意深くあたりをみまわし、聽き耳を立て、努めてあらゆるものを理解し心に刻みこまう

とし、早くあらゆるものをよく聞きよく知らうとしながら――我々は新しい仕事にとりかゝつていつた。そして、もう、早くもその中心へと近づいていつた。新しい同志とも深い知り合ひとなつた――といつてもこゝでは全く小人數だつたが。――

パンフィールイッチ・ビェーロフ。彼とゝもにコムミサールのボチャーロフ。地方革命委員會議長ユスーポフ。裁判委員ポズドヌイシェフ。ドジャンドソフ、マメリューク、シェガブートヂノフ、コンドウ/ーシュキン。特別部長――クーシイン。……

我々は十五人――二十人一組となつて仕事にとりかゝつた。このグループは、すでに、到るところへでかけた。夕に革命委員會へ出席してゐたとおもへば、地方黨委員會で深更まで働き、翌日は早朝どこかで革命會議の權限を委任された者と軍事的會見を、また、その後では軍事會議へ。

それからそれへと全く仕事の山だ、――春の穀類もいそいで蒔かねばならない。家畜を保護する、阿芙蓉蒔きにとりかゝる、隣接支那地方から入るだけ買つてくる。コムミュニストを軍隊に動員して軍事部署につかしめる。軍隊を勞働部署へ移す。同志をトルキスタン諸大會――黨またはソウェートのそれへ送つて、それぞれの大會を指導する。戰爭で荒廢したコバル、レプシンスク地方の救濟に着手する。中央から派遣されたドジィナザコフ主席の委員會が支那から歸還してくる例の五萬人のキル

ギズ避難民を非常に冷遇した――といふのも彼が後にすぐ我々の敵の方へ向つていつたからだつたが――といふことも考慮した。一刻も猶豫することのできない無數の緊急事項だ。我々は全く席のあたゝまるひまもなく働いた――仕事の山は休息をあたへてくれない。

かうして、――數日、數週、數ケ月……

四月がすぎた、五月もすぎた。

その地方は不穩になつた、死の熱病に慄えた。家に近づくこともできず、その上に――フェルガン地方へ移動してゆかなければならない軍隊の怒りに燃えた。投機禁止と徵發とを呪ふ富農階級が×動を起した。壓服されてゐるコサックが動搖した。武裝しない土着貧民層は悲劇的事件を豫想して生きた心地もしない。

全地方が死のやうな怒りの熱病に慄えた。

何かおそろしいことが近づいてくるのだ。

我々はその燃えるやうな呼吸を感じた。これまでに切迫した空氣をおだやかに解決することはできない。さうだ、我々はそれを知つてゐたのだ。そして、できるだけ會戰の準備をした。

セミレチェンスクは、そのころ、――噴火山上に危機を待つてゐたのだ。物凄い地鳴りがきこえて

くる、物狂ほしい凶兆な唸り聲がびゞく――凄惨な恐ろしいことが近づいてくるのだ。刻一刻、迫つてくるのだ、――今に大地は石の大口を開くのだ、赤熱の咽喉を更にひろくあくのだ、そしてその中から恐ろしくもの狂ほしい力で焔の海を吐くのだ、――あらゆるものを焼きつくし、押し流し、死の道へ溺らせながら、呻く火の恐怖は奔馬のやうに走るのだ。このもの狂ほしい溶岩を誰が止めることができるのだ？　それをさへぎる力がどこにあるのだ？

さうした力はどこにもない、このもの狂ほしい火はあらゆるものを焼きつくしてしまふだらう、稔る沃野を、石の都を、人の子戯れ家畜肥えて果實香る鐵の村を、盲目的な暴風のやうに荒れ狂ふことだらう、――あらゆるものは死にもの狂ひの火の波にさらはれ、生命の漲つてゐた大地は、一隣にして、沈默の墓となるだらう。生命は葬られるのだ、だが、その上を――更に更に新しい波はおそろしい唸り聲を立てゝ襲ひ、あらゆる獲物を焼きつくすだらう。何人もこれを靜めることはできないだらう、あらゆるものが焼きつくされ、押し流され、打ち倒されたとき、巨人――噴火山の胸疲れ果てたとき、その偉大なる力を消耗しつくし、弱り果てゝみづから力つきた大地の中に凝縮していつたとき――暴風みづからが靜まつてゆくだけのことだ。

富農階級はソウェート獨裁を呪つてゐた、飢饉地方へ徴發によつて食糧を送ることに反對した、食糧

委員を呪つて放逐する、更に怒つて慘殺する、ソウェート當局の命令を鼻であしらふ、それに武裝はしてゐるしするので危險もなく大丈夫だとおもつてゐるのだ。自分の――セミレチェンスク軍が戰線から解放されてからは、――更に鐵砲をもつて、『百姓を抑壓しろ！』といふ勝手な要求を確認しようとした。

土着キルギス人は靜まりかへつた。恐ろしいものゝ迫るのを待つてうち沈んだ。新しい民族的虐殺の時が近づいてくるのではないか？　今は――それを理解し、また、心から感づいてゐたのだ――重大な危機だ。今、農民とその勝ちほこれる軍隊とが時を逸するやうなことはないだらう、そして復讐するだらう、――おゝ、あの紀念すべき一九一七年の復讐を試みるだらう。……その最初の信號はすでにあそこでもこゝでも氣味わるくも鳴いてゐるのだ――

『農民は土着民兵を武裝解除せしめた』……

『農民はキルギス人の家畜を放逐した』……

キルギスの獸は、どうもうな齒をきしらせ、鋭い爪をむきだし、その力を試すのだ。敵の無力を感ずると、――よろこびのために荒々しくいきづきながら敵の殘骸の上に勝利の舞踏をするのだ！

農民には――軍隊、武器……

土民には――何もない、たゞ支那の曠野から故郷へ歸つてきた例の一萬の飢民が加はつただけの話だ。だが、こちらには、更に、ドジィナザコフ委員會があつて、宣傳・煽動し、キルギス人をして、一人一人の農民、一人一人のコサックに對して、それを最惡の敵として對抗せしめた。

コサック村はおそろしさのために鳴りを靜めた、――彼等にはあの恐ろしい一九一七年の出來事が忘れられないのだ。コサック軍は壞滅してゐる――今は農民が全セミレチェンスクの巨人だ。巨人――彼は何をしだすだらうか？　どこへその力を向けてゆくだらうか？　コサック村をも侵略するだらうか？

農民、土民、コサック――それぞれ別やうに何ものかを待ち、何ものかのために準備した。コサック村、農村、牧場、――それぞれ戰鬪準備をして氣味わるく對峙した。

隊長と〻もに支那國境をこえて逃走したコサック軍のどうもうな殘部隊、セミレチェンスクの上に暗雲がたゞようた。

いち早くもソウェートによつて配置された多數の士官と〻もに七千の白軍捕虜は我々の鐵鎖となり脅威となつて、非常な重荷だ。

勝者――セミレチェンスク赤軍も不滿な氣持だつた。正直なところをいへば――今にも家へ歸りた

いのだつた。もし支那からコサック軍の脅威がなく、何か『土地の危險』に對して絶えず準備してゐなければならないといふことがなかつたら、そして、結局、この勝手な『行爲』のために何者か嚴肅な運命の手によつて早かれおそかれ罰せられるだらうといふぼんやりしてはゐるが致命的な考へがなかつたら、一人殘らず遁走してしまつただらう。かういふわけで何といふことなく――敵對者、ゴロツキ、脅喝者などと〻もに――この軍隊は、またしては、內心、怒りに燃えるのだつた。

軍隊はいろいろな不滿をもつてゐた。――ソウェート當局は徵發をしたり、いろいろの命令や負擔を制定したりしながら『自分では』何にも出さなければ何にもしない。それでゐて聯隊には當局を責める意志がない。最近『聯隊幹部』は特別部や裁判委員會につかまつてしまふ。

――兄弟、何てこゝたい、おいらの大將がやつつけられてもいゝのか？

――特別部だの、裁判委員會だの、非常委員會だのつて、何でえ！　中央からやつてきやがつたいろんな奴が、――きやつら追つぱらつちやえゝ！　おれたちやあ、おれたちでやらうぢやねえか！

セミレチェンスクにキルギス旅團の出來たことや、長いあひだ煙草も被服もわたらないことや、捕虜のコサック士官がやつつけられないばかりか、――考へてもみろ！――いろいろの『カメサリヤート』の椅子にありついてやがる、などいふことも軍隊の反抗心をあほりたてた。

不平不滿に限りがなかつた。だが、今のうちはまだ表面へは出ない、その準備をしてゐたのだ。堰のくづれる原因が必要だつたのだ、そのときは、……おゝ！——そのときは『國民的憤怒』は大津浪となつて重いガンを一擧にかたづけてしまふのだらう。

原因は出來た。軍隊はセミレチェンスクからフェルガンへ移動を命ぜられたのだ。

——何だと、——軍隊はいつた。——セミレチェンスクからは——一歩も動かねえぞ。無理につてのなら、——××でこい！

だから、我々も、移動命令をうけたとき　つぶやいたことだ。——

——困つたことだ。こりやあ、たゞぢあすまないぞ。

暴力をもつて暴力に對抗しなければならないかも知れないといふ不幸なときに、我々は、いつたい誰に訴へたらいゝのだ？　しつかりした聯隊は一つもないのだ。たゞ、どこか、百露里ばかしはなれたところに、騎兵第四聯隊がゐるだけだ——その聯隊は十個國以上の人間から成つてゐる、ドイツ人マヂヤール人、キルギス人、支那人、テキン族……。

『前へ進め……伏せえ……撃つ！』などいふ言葉の他は——一度でみんなに解るといふことはむづかしい。その聯隊では出來るだけ言葉で話すのだが、全く出來るだけだ、その他は……眼で話すのだ。

ほんの最近のことだが、師團司令部で我々は國際中隊を組織したが、これは——まだ新しいもので、實際には試したことがない。何に適してゐるか、試してみよう。我々軍部コムミュニストは——同じ悲しみだ。軍部コムミサールも同じ悲しみだ。きやつらは我々に最後通牒を發したのだ。

——家へ歸してくれ、くれなきやあ、勝手に歸つてゆくぜ！

重大な危機に臨んで、こんな手合をどうしたらいゝのか？

軍隊の中でほんとうにしつかりしてゐるのは全く少數の青年だけだつた。ほかの奴は——全くたよりにならない、何をしでかすかわからない。

市黨部オーガニゼーションをみるのは——涙だ。後に被告の席について、解散され、きれいに一掃されたのだ。周圍には誰もゐない。全く誰もゐない。

さわぎは大きくなつた。危機は近づいてきた。

フェルガンへ向つて行軍せよとの中央からの命令は手にしてゐた。そのことは、もう、聯隊中に知れ渡つてゐた。道いつぱいに——大した行軍だ——戰鬪部隊がほこりを立てゝさうざうしく進む、武裝解除された捕虜の一團がつゞく、すき腹をかゝへた浮浪の徒がうろついてゐる。いつたい、どこへ逃げたらいゝのだ？　勿論、ウェールヌイだ。テント連、骨と皮ばかりの馬に乘つた連中、歩いて逃

げる連中、みな無中になつて前へ出ようとして道をふさいでしまふのだ。十字路はころげたほれたものでいつぱいだ。避難民は怒りと復讐とに燃えてゐる。彼等は絶望の極に達してゐるのだ、あらゆるものに罪を着せ、あらゆるものを呪つてゐるのだ、何故ならもう何もかも失つてしまつた、殘るものはたゞこの不幸な飢えの生活をくりかへすといふことだけなのだ。彼等は火藥の粉だ——ちよつとした焔で直ぐ燃えるのだ。彼等は不幸のどん底にをり、悲しみのために氣ちがひになり、絶望してゐるのだ、——それだけまた彼等は危險を成してゐたわけなのだ。何故なら悲しみのために幸福にあこがれてゐたからだ。誰でもいゝ、彼等にその幸福を約束してさへやれば、その者は直ぐ注意をひいて、彼等を思ふやうにすることができるからだ。

暗雲は四方からおしよせてきた。雷鳴が近づいた。最初の遠雷が氣味わるく哄笑した。近づく暴風の息づまる豫感に呼吸もたえだえだ。

五月末、ウェールヌイ守備隊に何者かの手で宣傳ビラがまかれた。その中の一つ、——

『中央コムミュニストは我等に何をあたへたか、その回答は實に次の如くだ、——特別部と裁判委員會、死刑と牢獄。

『同志——赤衛兵諸君！　諸君は誰のために二年間も虐待されたのだ？　今は特別部にあつて諸君

の父兄を銃殺しつゝある彼の囚徒たちのためではなかつたか？

『見よ、セミレチェンスクは誰の手にありや。——曰く、フルマン、曰くシイガブートジノフ、曰く、リンデンバウーム、これらユダヤ人、キルギス人、マヂャール人の手に歸してゐるではないか。しかも我等勞働農民は再び——奴隷の運命だ。

『すでにモハメツト教徒の動員命令も下された——これは何を意味するか？

『これは、諸君、同志——赤衛兵諸君の土地、衣服、家畜を强奪してキルギス人へ與へんとすることなのだ。

『同志諸君！　今こそ自覺すべきときだ、我等の敵に對して最後の決定的なる鬪爭を試みるべきときだ。然らずんば、時すでにおそし。今や、復讐の時は近づいた。用意しろ。記憶せよ、全は個のために個は全のためにあるのだ。

更にある宣傳ビラには『山鷲隊』なるものが次のやうに絶叫してゐる、——

『中央委員は諸君の後頸をひきつかまんとしてゐる。周圍には——抑壓と反革命だ。特別部にはプロレタリヤートのために機關銃を備へ付ける。奇怪なる役人が町を横行して、反革命的コサツクと鬪爭したものをとらへてゐる。決死の革命の時が近づいてゐる。我が山鷲隊は武器を用意した、而して

山中には八百の光榮ある闘士が集合した。

『慄え上るべし、吸血鬼――コミサールと刑事團！』……（註1）

（註1）此の宣傳ビラのテキストは、一九二一年トルキスタン戦線革命軍事會議政治部の記録に集録せられたるエム・ステパーノフの「富農階級の暴動」に依つた。

かうしたドキューメントは暴動準備の進行してゐたことを非常に雄辯に物語るものだ。軍隊と農村との間にしきりに手紙のやりとりがおこなはれた、――これらの手紙によると農村と軍隊とが非常に密接な關係にあり、『ユダヤ人コミサール』攻撃に對する完全なる協同行動の準備がおこなはれてゐたことがわかる。或る手紙には次のやうにかいてある（これは軍隊から農村へ宛てゝ出したものらしい。フルマーノフ記す。）、――

『……給與の勘定など――心配することはない。こんなことはみな、ユダヤ・モハメツト・マヂヤール――コミサールのトリツクなんだ。それよりも、きやつらが農村でどんなアヂをやつてゐるかに氣をつけてもらひたい。本當の革命は一ケ月の後に迫つてゐる。かつてアンネンコフやシチェルバコフを擊退した光榮ある勇士、我が山鷲隊は、ユダヤ・モハメツト・マヂヤール――コミサールをやつつけることができるとおもふ。』……（註2）

（註2）同上

その頃、在支那のシチェルバコフ將軍に白系コサツクへの召喚狀が手交された、それは私とボーイコが書いたものだ。すると、將軍は、その召喚狀に接して、非常に立腹して次のやうな決心をするに到つた。――

『……ユダヤ人に服從することは斷じてできん、ロシヤ人となら協力もするが、ユダヤ人に對しては徹底的な打擊を加へねばならん。』

かういふことを書き添へてその召喚狀はウェールヌイへ突き返してきた、そして將軍はこの決心についてしきりに地方新聞へ訴へるやうになつた。しかし事實は事實だ、――『山鷲隊』なるものとシチェルバコフは『ユダヤ・キルギス同盟』に對して協同行動をとつたものなのだ。……

このことを見逃がしてはならないのだ。

暴動準備の糸をたぐれば、無論、文那へ亡命してゐる連中と關係があつたのだ。ドジャルケント國境附近では、すでに、六月四、五日頃、即ち暴動勃發前一週間の頃、ウェールヌイ地方では暴動が起つたさうだ、といふ噂がもつぱらだつた、このことは、その地方の勢力も組織動員されたといふことを物語つてゐる。……（註3）

（註3）このことは、後になつて、當時ドジャルケントで活動してゐた貿易人民委員會全權同志レヴイタスがこの事件に關する報告を成したところに依る。

當地、ウェールヌイでは、――裁判委員會と特別部へ宛てゝ匿名の手紙がしきりに舞ひとんだ、それには、まづ、この兩機關によつて爲されたといふ無數の罪惡が並べたてゝある、その同人は『囚徒……惡漢……馬鹿野郎』などといふいろいろの愛稱を奉られてゐる。そして、そのさきには、きまつて次のやうな要求があらはれてくる、――一時間毎、否、殆んど一秒毎に行はれる國民的指導者の銃殺を直ちに中止しろ……（註4）、『もし中止しないときは、――どつちにしても同じことだ、てめえらのやうなゴロツキどもは、どつちみちやつつけちまはなきやあならないんだ。……慄へ上るな！　おぢけつくな!!　待つてろ!!』

全部、かうした調子だ。裁判委員會と特別部はおたがひにその手紙を見せ合つた。その結果、これらの宣傳ビラも手紙も、皆、同じ手できまり文句をならべたてたものと解つた――同じ一團の連中の手に成つたものなのだ。

しかし、その實體をつきとめることには成功しなかつた。

（註4）特別部は、暴動までのウェールヌイ滯在全期間を通じて、――一度も銃殺は行つてゐないといふことは注意すべきである。（マサールスキーの報告に依る。）

六月上旬、この地方へ武器引渡命令が下つた（早くもタシュケントは我々に同じ命令を下してきた）。この命令についても例の匿名の手紙はせゝら笑つてきた、――『廣く門戸を開放しろ、おれたちは自分たちの馬車を驅つて乘り込むだらう』。そのとき、我々は、特別部とロシヤ東方商業會議所にとつて特に有利な位置を占めてゐる民家を引拂つた。

魔の手はこのことについても直ぐ脅迫してきた、――『覺えてをれ――どこへ隱れこまうが、結局、同じことなんだ、草の根をわけても探しだしてみせるぞ。』いはゞ、我々の一擧一動は何者かによつて絶えず注意され、突き止められてゐるのだ。

當局者は特別部へ集合して、當局ならびに各自によつて集錄された出來るだけのドキューメントと種々の材料とによつて調査をすゝめ、一般的方針を決しようとした。

機は熟してゐる、それは誰にもわかつてゐた。しかしどうしたらいゝのか？　こんな特殊な條件のもとにあつて何をすることができよう？

我々がその力を完全に合理的に利用することさへできたなら、事件は全く異つた性質のものだつたのだ。全く簡單なものにすぎなかつたのだ。しかし、問題はその力だ、どこに力があるのだ？　何で

抵抗し、何で防禦し攻撃したらいゝのだ？

深淵の底に落ちたやうなものだ、このうつろな間に落ちて我々の考へは一つだ、——

力が無い！

どう思案してみたところで、——指一本からも生きた力は出てきやしない。

中央へは一度ならず話した。泣き付いた。懇願した。あらゆる危險を訴へた。『文字通り』耐へ忍んだ——ところが、どうだつた？　中央は、いつたい、どうしてるのだらう？　そこにゐる後備軍はどうしたのか？　ひよつとしたら、いま全軍フェルガン地方へ出動してゐるのかも知れない。

かういふわけで我々には援軍に對する望みもなかつたのだ、だが、危機は今だ、正に今だ。事實、シベリヤからブラジェウィーチュ師團がセミレチェンスクへきたことはきたが、それはまだずつと先のことだ。……

それよりも、今、すでに、急に何か起りはしないか？　各支隊の移動をだ、今、今、完了させねばならんのだ。……だが、ともかく、爲すべきことは爲さねばならん。

脅威——脅威——脅威……

おゝ、何といふ重苦しく鋭い脅威なのだ。……一日一日、時々刻々、盛り上り、濃くなり、迫つて

くる。我々はそれをいきづいてゐるのだ。我々はそのなかにいきづまる思ひだ、ちようど氣味わるい眞黑なトンネルの中を深く深くはひつてゆくやうな感じだ。呼吸が迫り、頭がづきづき痛み、胸が抑へつけられるやうだ。道もなく、凶兆な濃霧につゝまれて進みかねる。そこだ、その眞黑な空虛の奥に——最後のキャタストロフィーが、……いま、爆發する……

近づいてくる——刻々と近づいてくる、あの慘忍な不幸が。……熱苦しい空氣がたちこめてゐる。だが、何時、どこからやつてくるのだ？　たちこめた濃霧の中だ、何も見えない、何も分らない、たゞ、何か恐ろしい敵意あるものがあたりから迫つてくるのを感ずるだけだ、——それは荒々しく耳もさけよと咆哮し、叫び、唸る、恐ろしい鐵鎖をつないで……

師團は出動中だつた。先づ、ドジャルケントから第二十七聯隊の歩兵一箇大隊がウェールヌイ地方へ到着した。砲兵聯隊では第二十五及び第二十六聯隊が移動命令を受けた、騎兵聯隊では——第一、及び第二聯隊。ドジャルケント大隊は、同じくウェールヌイへ向つて行軍中の第二十六聯隊へ編入された。我々の計算によれば、第二十六聯隊のウェールヌイ到着は六月十八日の筈であつた、その頃にはドジャルケント大隊はもう遠くタシュケント街道にあるだらう。ところが、第二十六聯隊は豫想外の速力で、十一日にはすでにウェールヌイを去る七十五露里の地點、イリースキー部落に到着した、

——この調子なら、十二日か十三日には當地へ到着することができたわけだ。この聯隊は超速力で行軍をいそいだのだ。何故？　どこからこんな努力が出てきたのだ？　我々は、イリースキーに止まるやうに——そして特別命令があるまで一歩も前進してはならぬ、といふ指令を發した。一方、その頃、騎兵第四聯隊は——『ともかく』遠くから同じ進路をとつてきてゐた。ドジャルケント大隊は質がわるかつた、どんな命令もきかないし、どんな上官も認めないし、何かといつては集會を催して、挑戰的態度に出た。……

同行四人、ビェーロフ、ボヂャロフ、クラウチューク、それに私——我々は、當地の情勢、また如何なる策戰をとるのが有利であるか實地に説明しようと出かけたのだつた。兵舍へ到着した。兵舍の中は例の通りだ、よごれかへつてゐる、ぷんぷん臭いにほひのする靴下がかはかしてある、洗はないまゝのスプーンがころがつてゐる。あぶらがこげついたまゝの釜、泥まみれのぼろ靴、寢臺の頭の方には——よれよれになつた外套、漆ぬりのひさしのついたぼろぼろの帽子、あたりには煙草の吸殻がちらばつてゐる、床の上には兵卒が唾をべつべつと吐いてゐる、隅つこの方には銃劍にまぢつて旋條銃が立てかけてある。赤衛兵は——二人、三人と一組になつて——何もしないでごろごろと寢臺の上にころがつてゐる。亂雜な恰好だ。だが、たゞじつところがつてゐるだけではないらしい、——何か

と言ひたいことをしやべりあつてるらしい。——急に我々がはひつてゆくと、こやつ、何しにきやがつた、といふやうな視線を浴びせかけられた。だが、誰一人として動かうともしない、ねころんだまゝだ、それに——何しにきたんだ、とたづねもしない。たゞ、敵意にみちた鋭い視線を浴びせながら我々の一擧一動をうさんくさゝうにみつめてゐるのだ。我々はあたりをみまはした、——不吉な情景だ。少しもいゝと思へることがない。視線には——怒りに燃えた根強い僻(ひが)みだ。何時間ゐても——これでは中々仕事ができさうにない。

しばらく氣味わるくじろじろとみつめた後、——今度は鋭い野次と嘲笑だ。……

——説諭をあそばしにおいでなすつたぞ……演説をおやりになるんだぞ……

——紳士、上官殿、……コムミュニストでゐらせらるゝぞ……

——大雄辯を拜聽とでかけるかな……こ……こ……こ……こん蓄生……

まるで茶椀や箸を手あたり次第になげつけるやうに——寢臺からかうした毒々しい野次がとんできた。……

我々は直ぐ大隊長を見つけ出した。この兵舍に赤衛兵を集合させて、大隊と仕事の打合せをしたいと報告してくれと頼んだ。だが、目的は、——

「大隊はどんな調子か、また我々はどうすればいゝか？」

と、いふことを知れば足りたのだ。

怠儀さうに、ぐづぐづしながら長い間かゝつて、やつと集合した。——

——どうするんだね……こちとらあ怠儀だい……演説なんてきかねえだつて分つてらあね……

——演説なんてやらねえで、ちつたあ、うめえもんでも食はせてみろい……

しかし、大隊長は、一生懸命になつて集合させようとした。こんなふうに説明してゐるのがきこえてきた、——

——ともかく、司令官なんだから……師團のだ……軍事會議は……

——だつて、おらの知つたこつちやあねえやな！　何も、おらあ、きやつらに……

——だが、ともかく……

と、大隊長は寢臺の上にがんばつてゐる赤衛兵たちに辯解してゐた。

そのうちに、ともかく、大隊は承知した、——大部分はねころんだまゝだ、遠くの方からきいてゐた。

最初にパンフイールイッチ・ビエーロフが口を切つた。

例の通りだ、——はつきりと、何もかもぶちまけて、鋭く。

彼には少しの無駄もユーモアもなかつた、——

——一度、移動命令が下るや——實行せんけりやならん、やりたくないの、どうだのと文句をいふことならん。命令は現在こそ必要なんで、機會が去つちまへば——何の役にも立たん。諸君の仕事は何か、——着物がないだの、食物がわるいだの、マッチがないだの、煙草が手に入らないだのいふが……どこにそんなものがあるとおもつてるか?!　どこにあるんだ、おれにやあわからん。ウランゲルやポーランド戰線の聯隊にはあるとでもおもつてるのか、あん？　あのあたりは何千倍もわるいんだぞ、それでもタバコが手に入らないからといつて——命令に叛くやうなことはあるまい。……

パンフイールイッチは、問題は何も煙草にだけあるのではないといふことはよく解つてゐたのだらうが、重要なことについてはわざと默つてゐた。彼等自身をして氣付かしめ語らしめるのだ。

ビエーロフのあとで私が話した。それからラウチュークがボチャロフをつれて登壇した。辯士は樽の上から我々に答へた。矢つぎ早やに我鳴り立てた。だが、それよりももつと熱してもつと無遠慮に、意地わるい毒舌が寢臺の方から飛んできた、——

——何だつて、ドジャルケントで、おいらの鐵砲をとりあげやがつたんだい？　鐵砲がなくて兵隊

がつとまるかい？

——ばあゝか野郎……こ、こ、こん畜生……

四方八方から悪罵次だ。

——言ふもおろかなことだが——我々は答へた、——諸君のうちに、赤衛軍兵卒のうちに、第二十七聯隊から出發するとき、軍規によつてそこへ武器を置いて來なければならんといふことを知らないものが果してあらうか……

——ぢやあ、おいらあ、羊かね？

——何だつて羊だ？　——この大隊は第二十六聯隊へ編入される筈なんだが、そこで諸君は武裝することになつてるんだ……

——ぢやあ、タシュケントまで杖でも持つてけつてのかね！途中で何者かにでくわしたら——大隊は全滅だぞ?!……

四方からひどい毒舌がくりかへされる。

——同志諸君、何物かにでくわすなんて、馬鹿らしいことをいふもんだね、——タシュケントまでは全く危險なことはありやしない。……それなのにそんな愚痴をいふのは……全く馬鹿々々しいこ

つた。それに、ともかく、——こゝに用心のために、——九十二挺の旋條銃があるぢやないか。……全大隊は——全體は——そこで武裝する筈なんだ。……

——そこでなんていはねえで、こゝで渡してくれろい。

——こゝで——そんな權利は我々にはないんだ。……

——てめえらにやあるめえが、おいらにやあるんだい。……

うしろの方の列から怒鳴り立てた。

彼等に共通してゐるらしいこの心からの叫びは——瞬間、上せあがつた瞳に、焔のやうに、輝やいた。兵卒の群は神經質にうごめいた、急にいらいらとざわめきだした、散彈のやうなわめき聲で建物は割れるやうだ——突如、激流が兵舎を襲うて突きあたり、震憾させたやうだ。——

——あは……は……は。……ほ—ほ。……ほんとうだ。……きまつてらあ。……そつだけでいゝ！　もう何もいらねえ！　畜生！……

——同志諸君、諸君がたとへ望んでゐるとしても——我々は諸君をどうして武裝させることができよう？　武器はもう一つもないのだ……

——探してみせるぞ！……

豪慢にも確信ありげな叫びだ。……

——どうして探す——どこにあるんだ？

我々は竦然として問ひ返した。

——かうして探す、どこにあるかちやんと知つてらあね。……

この答へはおそろしかつた。武器は極秘だが我々のところにあつたのだつた、——だがそれはどうしてもこの大隊に渡すわけにはゆかない、他の所屬なのだ。その後、コパルから輸送された——そこには白軍捕虜の武器があつたのだ。だが、供給班の報告によれば、その輸送は極めて遲々たるものでその頃はまだコパルを去ること幾何もないとのことなのだ。……

——おいらあ鐵砲がなくちやあいけねえ、何といつてもいけねえ……

血の出るやうな聲だ。

——同志諸君、みんなに聞えるやうにこゝへ出て話してはどうだ。

我々は提議した。

——そんなことをするこたあねえ、こゝで結構だい、——みんな聞えてるぢやねえか……

あたりのものは如何にも賛成だとばかり大笑ひした。我々は頰つぺたを打たれたやうな氣がした。

喧々ごうごう。……

——おいらあ何だつても鐵砲がなくちやあいけねえ、——改めてさつきの聲が叫んだ、——何だつてキルギスの野郎に鐵砲をやりだしたんだね……キルギスの兵隊をいゝ工合にしてやつて、おいらあこつから、セミレチェンスクから……

群集は更に激昂した、雷のやうな叫喚、攻撃。

——セミレチェンスクから追つぱらはうつてのかい？　この土地から？　片つ方の奴にやあ鐵砲をやつて片つ方の奴あ——追つぱらふか？　いや、一寸待て……待て……承知できねえ……も少し見てよう……いや、兄弟……

我々は、何故キルギス軍を組織するか、——説明した。だが、彼等の冷やかな險しい顏には明らかに疑ひの色がみえた。

よし、勝手なことをしやべつてろい、ところがおいらあちやんとわかつてんだからな。

兵舎の騷ぎは四時間近くもつゞいた。

たゞもう何を相談してるのやら、何をたづねてるのやら、何を要求してるのやら、——

全キルギス人を直ちに武裝解除してこの地方から追放せよ、如何なる結成も——許さない。

軍隊に休暇をあたへて一個月間歸省せしめよ。
現在種々の職務についてゐる士官級の捕虜からその職務を奪ひ、「分相應」に扱へ。
農民のパン略奪（パン給與のことを彼等はかう呼んでゐるのだ）を中止し、この地方へ役人を派遣するな。
『裁判委員會』は無垢の良民銃殺を嚴禁せよ。……
無數の要求だ。我々は、それが如何に愚問であり亂暴なものであつても、いまにも口から出ようとする惡罵や怒聲を我慢して、いちいち簡單に眞面目に答辯に努めた。
呪ひの聲、罵りの聲、頭を大鴉にでもひつつかまれたやうな氣ちがひ聲、もう問ふこともなくなつてしまつて同じことをわいわいくり返してばかしゐるので――我々はこんな辱づべき馬鹿々々しいことは早く打ち切つてしまはうとおもつた。
――とにかく、命令に從つて速かにタシュケントへ向つて出發するんだ！
我々はかういつて歸らうとした。
――どこへだつて行きやしねえぞ……
――どうして行かないんだ、――命令を知らないとでもいふのかね？

――おいらみんなに鐵砲をくんろ、くんねえとなると一と月でも二た月でも動かねえぞ、ウェールヌイからは一歩も出ねえぞ……直ぐ鐵砲をくんろい！
――我々は諸君に說明したぢやないか、同志諸君……
――說明なんかするこたあちつともねえ、――いやといふほど努めたのだが、――終りまでいはせなかつたのだ。――二十六聯隊がやつてきたら、そのときやあこつちから何もかも說明してやるよ、もうてめらに訊くなんてえこともあるめえよ……
――第二十六聯隊はまだ中々來ないよ、諸君のあとから行軍してゆくことになるだらう……
――おいらのあとから來るなんてえこたあねえ……おいらあこゝで待つてんだ……
こゝへ急いでやつてきてゐる第二十六聯隊とはもう聯絡がとれてるのだ、それでおれたちはきやつらを今か今かと待つてるのだ、といふ話なのだ。
これ以上こんなところでつまらないことをしやべるのは御免だ、――我々は馬にとび乘つてゆつくりと兵舍を出てゆくと、こんなくだらない汚れたところからは一刻も早く拔け出さうと全速力だ。
だが、歩いてゆくことになると――いろいろと相談した。
大隊の空氣は不隱らしい。

我々にとつて最も簡單で且つ緊急なことは、――ゴロツキどもを武裝解除し、首魁連を召喚逮捕し、殘餘の者は速かにタシュケントへ追放することだとおもへた。今の場合、こんな兄弟に何の遠慮があるものか？

だが、ことはさう簡單にはゆかない。何よりも先づ――大隊のタシュケント入りの日がまだ來てゐないのだ、それとも我々はひとまづ『命令に叛いた』かどを以て大隊の武裝解除を實行しようか――

――どうかお宥しなすつて、――といふことだらう、――あの時、文句をいつた奴は極く少くねんでして、それに、もう、何でもねえことだつたんで。大隊はその日にはきつと出發いたします。何だつてそんなに、……鐵砲を取り上げたり、罰を加へたり……

そしてこゝとはますます面倒となるばかりだらう。

それにしても、いま、九十二挺の施條銃を沒收することに何の意味があるか？

そんなことはどつちだつていゝぢやないか、この九十二挺のためにどうといふこともまさかあるまい。そんなことは重要なことぢやないのだ。

武裝解除をしたとなると、――おゝ、大隊の空氣は更に嶮惡となることであらう！　それに、ウェルヌイには、同じく嶮惡な空氣の第二十五聯隊の一部隊がゐる、こゝの歩哨大隊はドジャルケント隊

と完全に聯絡してゐる。……いや、いや、馬鹿な眞似をしてはいかん。我々は歩きながらいろいろと相談した結果、しばらく大隊はこのまゝでおかうといふことに決した。

時に、六月十一日午后五時。

その夜、暴動が勃發した。

★

『プラーヴダ』セミレチェンスク地方版に次のやうな社說が出てゐる、――

『革命的鬪爭の第一段階――即ち、流血的戰線における破壞的鬪爭を終へて、無流血戰線――即ち經濟的混亂及び大衆的無智とに對する鬪爭へ移らんとするとき、社會のあらゆる勞働層をこの無流血勞働戰線の鬪士の列へ參加せしめなければならないといふ問題がをのづから表面へ現はれて來る。

『或る仕事を速かに實現または開始せんがためには、先づ、該地方のあらゆる勞働勢力を一致せしめ、而して彼等の內にその仕事開始に對する意識的なる、從つてまた自發的なる關心を喚起せしめなければならない、といふことは、過去の經驗によつて斷言することができる。

『仕事に對する意識的にして自發的なる關心を喚起せしめることは、たゞ、その仕事の基礎を成し

而してその先行的原因を特質づけ、またかくしてその當然の結果を明示するところのプリンシプルを熟知せしめることによつてのみ可能であること、勿論である。

『このプリンシプルはすでにロシヤ共産黨員の熟知するところである、而して彼等は大いなる歡喜をもつてあらゆる仕事を完成してゆくのである。然るに、今まで能動的社會的建設運動から遠ざかつて居り、更に多くの場合ソウェート政權に對して關心をもたなかつた非黨員大衆は如何にすべきか、關係大會における意見交換の方法によつて社會組織建設運動へ能動的に參加せしめるやうに誘導するために、そのプリンシプル及び黨としての建設事業に關して彼等にまづよく告示するところがなければならない。

『軍隊をして勞働部署に就かしめ、經濟的混亂に對する、及び社會主義的初期段階における新生活建設のための鬪爭に非黨員赤衛兵大衆をして意識的能動的に參加せしめんとする目的をもつて、ウェールヌイ守備隊の非黨員赤衛兵同盟大會が一九二〇年六月一〇日、召集された。

『豫定の時刻にその同盟大會は開會され、『インターナショナル』の合唱をもつて當面の問題の討議が開始された。

『討議事項として次の如き七個の重大問題が擧げられてゐる、——

1。現在の情勢。
2。ソウェート當局の經濟政策。
3。民族問題、及び民族政策。
4。ソウェート當局の軍事政策(特に、軍事專問家)。
5。ソウェート當局の事業、及びトルキスタンにおけるソウェート的建設(特に、中農に關して)。
6。土地問題。
7。當面の仕事。

『大會には一六五人の代議員が出席した。かゝる多數代議員の出席をみた大會の決議が廣汎なる大衆の意志を反映し、また、セミレチェンスク地方民一般に重大な影響をあたへるであらうことは明らかである』。

地方民及び赤衛兵に對してこの大會は如何なる影響をも斷じてあたへることはできなかつたのだ。むしろ、その反對だ、——

彼等はその大會にほんの小さな『影響』を示したゞけだ、反抗の態度だ、——强制的に完全に壓迫したのだつた。

大會は十日に開催された。幸にも私はその大會の司會者となつた。第一、第二の問題は聽衆には大して興味がなかつた、――さういふ問題は明らかに全然自分たちに緣のないものだと思つてゐるのだ彼等には今はポーランドやウランゲルのこと、また『工業化』のことなどは、ちつとも問題ではないのだ、――もつと手近な、自分たちのことこそ興味ある問題なのだ、――

このセミレチェンスクの問題!!

民族問題は非常なセンセーションをまきおこした、だがいふところは同じことなのだ、――

――何だつてキルギス人を武裝させるんだ? 何だつてキルギス旅團を組織するんだ?

やつとのことでこの問題の討議を終ることができた、――だが、それぞれに何か自分勝手のことを考へ出してはやたらにわめき立てるのだつた。

第四の問題には、一般の要求に押され氣味で、議事日程に追加しなければならなくなつたのだ――

『特に、軍事專門家』

そこでこの『特殊』事項一つにこだはつて、大へんなさわぎだつた。

第五の問題にも、また、追加しなければならない破目に落入つた。彼等はわめき立てた、――

――『富農階級、富農階級』つて皆いふが、いつたい、どんな富農がゐるつてんだ? この地方全體

に一つの中流階級があるだけのことなんだ、――かう書き込むんだぞ、――

『中農に關して』つていふんだぞ。

書き込んだ。この問題については、食糧給與のことに言及したとき、まるで蜂の巣をつゝいたやうなさわぎになつた。この大會でどんな收獲があつたか――嘆息することのみだ。

★

ドジャルケント大隊の集會がすむと、私は、夜の同盟大會の方へ出かけていつた。六時開會、十一時半閉會。明日は大へんなことになると思つた、――代議員連が選擧民から注文されてきた議題を上程することになるだらうから。その議題といふのはもう我々にも知れてゐた――白色テロだ、――

全部追放武裝解除せよ、『ソウェート當局の暴壓』を甘受するな。頑强なる百姓の武裝せる手のもとに――この地方は彼等のものになるのだ。

かうした要求にはどんなに熱したことだつたらう。だが、まだ公表するまでには到つてゐなかつたのだ、まだ最後の決意をするまでには到つてゐなかつたのだ、――

その夜、暴動が勃發したのだ。

同盟大會閉會後——我々はみんな何だか粘々(ねば〳〵)した澁いやうなきたないものでも飲みこんだときのやうに胸がむかむかして今にも吐きだしさうな氣持だつた。實際——我々の演說、說明、確信、要求——これらのものはいつたい誰に向つてなされたものなのだ？　誰をどう助けることができたといふのだ、誰を說き伏せることができたといふのだ？　まるで底なしの深い桶の中に吹き込まれて、それが出てくるときには勝ち誇つた惡魔の歡びの哄笑の反響となつてゐたやうなものだ。この上、何の甲斐もないのにつゞけてゆく價値があらうか、次のやうなお定まり文句で蜂の巢をつゝいたやうになつてしまふ討議に時を費さなければならないだらうか、——

——百姓のパンを盜むな！

——給與なんてよしちやえ、よしちやえ、よしちやえ……

——マホメットの連中を卽時武裝解除しろ！

——この地方の兵力を動搖させるな！

一つ一つの問題に對して——きまつて反對と要求ばかしだ、——現在の情勢に對する理解は少しもないのだ——ないのだ、まるでないのだ、そして自分以外のものに對して力を借さうなどといふことは考へてもみないのだ。

だが、さうしたものでもない、——と、我々はみづから慰めてみるのだ、——それは單にさう見えるだけのことなのだ、大會は全く無効果だつたやうだ。我々の演說や說明は無默だつたやうだ。……だが、永遠にさうだとは限らない、——必要な偉大なる言葉はいつかはその必要な場所をみつけだすだらう　十人、二十人の頭を素通りしても、——その代り二十一人目の頭に浸みこんで、今まで手をつけることのできなかつた仕事にとりかゝつて、その頭を全く別なものに轉換させるだらう、そして晩かれ早かれこの頭の轉換は自覺をうながすことだらう。他の十人、二十人の者のためにもこれと同じことをしなければならぬ、——かうした仕事は、まるで雲をつかむやうな事だが、いつかはその効の現はれるときがあらう！

我々の大會もこんなふうに考へなければならないものなのだらう。だが、あの兵舍の恥辱的な馬鹿さわぎのことを思ふと、——我々は重苦しい暗い氣持になるのだつた。

額をあつめてその日の出來事についていろいろと協議した、現在の情勢について討議した。後、別れて自分の部屋に歸つた。

もう夜も更けた。十一時前のことだ。急にあはたゞしくムラトフがかけこんできた、例によつて汗ばんだ鼻眼鏡をはづして、役に立たなくなつた眼をぱちぱちやつてゐる、——

——大へんなことになつたぞ……

——どこが？

——町の方が物騒なんだよ……赤衛兵がごたづいてるんだ。何だか妙な用意をしてるんだよ。……

——どこからわかつた？

——マサールスキーからきいたんだ、——あそこには特別部から若いのがいつてるだらう——それが言つてきてくれたんだ。……たつたいま馳け付けてきたばかしだ。……

特別部のマサールスキーを呼ばう、——

——來てくれ、至急話したいことがあるんだ。……

ムラトフが出てゆくと、すぐビェーロフがやつてきた、彼のうしろには暗號部の同志が一人ついてきてゐる、——名前はいまはおぼえてゐないが、師團司令部で相當の地位にゐるしつかりした青年だつたことはおぼえてゐる。

——おい、ちよつと聽いてくれんか、これが話すんだが、——暗號部員の方を顎でしやくりながらパンフィールィッチは早口にいひだした、ところが氣がせいてゐるので自分で話しだした、——

——司令部へ誰だか知らない奴が二人かけこんできてね……

——何時？

——いや、今なんだ……ほんの一寸さつきなんだ。……それが言つてたんだが、夜、合圖の鐵砲が二つ鳴ると……赤衛兵が全部立つつてんだ……

——立つ？

——さうなんだ。そして押しかけるつてんだ。

——いつ押しかける？

——分らん。……誰も何んにも知らないんだ、だが合圖のあり次第押しかけるつてんだよ。……

——何だつてその二人の奴を引きとめなかつたんだ？

——どうする間もなかつたんだよ。……やつて來たかとおもふと、——直ぐ馳け出しちやつたんだ。それに夜だろ、こんなに——眞暗なもんだから……

窓の向うは眞黑な靜かな深夜だ。

我々はそれからちよつと本部の命令について話し合つた——その時の氣持として、本部から何を期待することができるかといふことにどんなに氣を引かれたことだらう。相手がさう正確にいふことができる筈がない、だがあて推量をしてまごつきたくなかつた、我々はその話はよした。

ビェーロフはそこでまた新しい不愉快なことを報告した、——

——サマルカンドから輸送してきてゐた武器も赤衛兵のために掠奪されたさうだ……

——直ちに點檢しなきやならん……

——勿論。……おれは一寸調査部までひと走りいつてくる。……すぐひきかへしてくる。……

——おれはマサールスキーを待つてることにする——あいつにきけば兵舍の方のことは直ぐわかるだらう……

マサールスキーは馬に乘つてかけつけた、例の調子でせわしさうにたゝみかけるやうにしやべつた、——

——兵舍に下らんことが起つたんだよ。……おれは、今、更に新しい代表を派遣したんだがね。……だがそんな連中はゐなくつたつて分つてんだよ——直ぐ集合して何かやらなくちや……

さうしてゐるうちに、ナーヤは、即時こゝへ集合するやうにと方々へ電話をかけてくれた、電話で呼び出すことの困難な同志たちは、信頼すべき同志メドヴェーデッチがわが愛すべき『デューチュカ』を馳つて呼び出しにいつた。……

しばらくすると皆集合した、——ボズドヌイシェス、クラヴチューク、シェガブートヂノフ、ルバ

ーンチック、ヴェルメニーチェス、マメリューク、ニキートチェンコ、アリトシュールレル、コロソーフ——十人か、十二人位だつた。(註5) さうかうしてゐるうちに、ニキートチェンコが、こゝへやつてくる連中で兵營の方向にあたつて二發の鐵砲が鳴つたのをきいた、と報告した。……部屋の中はざわついてゐたので聞えなかつたのだ。……

かうした斷片的な情報によつてはつきりした事情を知ることのできる筈がない、たゞ兵舍の方が不穩で何かたくらんでゐるらしい、といふだけのことだ。……

(註5) コンドルーシュキンはそのころ地方巡視のためビシュビエークにゐた。クーシインはドジイナザコフ事件以來タシュケントへいつてゐた。ポリヨースもそこへ派遣されてゐたのだ。

だが、いつたい、どうしてこの勃發しようとする騒擾を未然に防止したらよからうか? 事件は刻々に進捗しつゝあるのだ。

——同志諸君、一刻も猶豫できぬ情勢だ。……我々はあらゆる準備にとりかゝらなきやならん。危險に對して組織的にぶつつからなきやならん。直ちに各自の部署を決定しよう。先づ——本部を設置しよう……三人だ。かゝる情勢にあつて一人ではいかん!

三人が指命された。マメリューク、フルマーノフ、ムラトフ。……數分間、——ビェーロフがひき

かへしてきた。マメリュークの代りに作戰本部へ採用された。武器輸送の件は――悲しむべき事實だつた、――掠奪されたのだ、今はもう武器は全部奪取された。……おゝ、何てこつた！

――本部は直ちに現有勢力を調査總動員しなきやならん。……各方面の情報によつて指令を下さなきやならん。……作戰的方面の實權を握らなきやならん。(註6) 特別部、裁判委員會、黨立學校、黨委員會、國際中隊と聯絡をとらなきやならん。すべて歩調をそろへて確立しなきやならん。いま兵舍の方へ派遣された特別部の新しい代表の報告次第によつてはこの計畫を放棄せねばならん。

(註6) 次のことをいつておく必要がある、即ち、軍事會議は存在してはゐたのだが、そのときはまだ理論以上には――實際には仕事をしてゐなかつたのだ。我々は、習慣によつて、全權を存續してきてゐたのだが、その場合には、全權だらうが長官だらうが一人では全組織機關の名において採配を振ふことは出來なかつた。作戰本部が必要だつたのだ。

ドーアをたゝく音、――ドンスキッフ――ドジャルケント大隊長があはたゞしくはいつてきた。顏は蒼白だ、眼は燃えてゐる、呼吸はせわしい。いきせき切つて、……

――私のとこの大隊が烽起したんです。團結したんです……どこかへ出かけました――きつと、要塞だとおもひますが。誰も何もいはないんです、私はおいてけぼりをくつたんです。……捕縛しよう

と思ふと――逃亡しちまつたんです。……兵舍附近の群衆も皆武裝してしまひました――どこで武器を手に入れたものか少しもわからないんです。……まるで見たこともない連中がたくさん交つてゐました。……

我々は興奮をおさへて注意深く彼のいふことをきいたが、不審の點がある。――

『大隊長が、その大隊におこつてゐることをまるで知らなかつたなどといふことがあり得ようか――こゝに何かトリックがあるんぢやないか？』

だが、我々は彼の報告を感謝していつた、――

――しばらく待つてゝくれ、――隣室でね、どこへも行かないで、ドーアのところには警手をおくから。我々は、この報告をいま調査する……

各方面との聯絡は既についた、裁判委員會と特別部からは偵察隊が派遣された、不審な者は直ちに捕縛して護送するやうに命令した。……

――シェガブートヂノフ、君は歩哨大隊を指揮してくれ、情勢を說明してやつてくれ、電話でもいゝから、おれたちのやつてること、何をしなきやならないか、話してやつてくれんか。……

ルンデンバウームは――國際中隊へ、ニキートチェンコは――裁判委員會へ！ パンフィールイッ

チは師團司令部の命令としていつた。

飛電、……

——行きやがつた……行きやがつた……

——誰が？　どこへ？

——兵舎から……要塞の方へゆきやがつた……

——多勢かい？

——見たところ四、五十人だ……

直ちに道を塞がなきやならん！　誰を遣らう？　國際中隊から二十八人を派遣した、——要塞の近道をとほつて。指令、——

——要塞へ侵入させるな。武裝解除せしめよ。非常以外には發砲するな。直ちに談判にとりかゝれ。銃を組めえ、を要求せよ。

國際中隊は我々の指令よりももつと簡單にやつてのけた。——暴徒といつしよになつて要塞へ入つてしまつたのだ。要塞では——發砲しなかつた。要塞守備隊は抵抗しなかつたのだ。そこには、例の「我が」セミレチェンスク隊がゐたのだ。開城して、——

——どうぞ御勝手に。

派遣隊が裏切つて暴徒に加はつたことを知つたとき、——我々の魂は凍つた。

あの中隊こそ我々が最も信頼してゐる部隊ではないか。今となつてはもう誰を信頼していゝのか？

尤も、裏切つたのはその一部だつたのではあるが、殘りのものが全部裏切ることがないと誰が保障できよう？

歩哨大隊からシチェガブートヂノフの電話だ、——

——こゝの大隊は暴徒支持だ、要塞へ出かけていつた、……

——全部いつたか？

——いや、モハメツト教徒が五十人殘つてゐる——直ちに君んところへ派遣する。

——さうだ、即時。だが、こゝへぢやない。おれたちは作戰本部といつもに師團司令部へ移動するから——あつちへ送つてくれ！

暗い階段を下りて、闇につゝまれた危機をはらむ通りを手探りするやうにしてあるいていつた。

急いだ、誰も話し出すものがない、つまづいたりよろめいたりしながら、早足で師團司令部へと急いだ。

——アリョーシャ——コロソフに指令だ、——君は黨立學校へいつて武裝したのをこつちへつれてきてくれ。

アリョーシャは——直ちに指令に從つて。

ヴェルメニーチェフは、地方黨委員會の一員として、我々全體の贊成を經て、地方黨委員會の名の下に、接續町村委員會へ、直ちに黨員を召集、武裝して——師團司令部へ集合するやうに指令を發した。

しばらくすると支那人。(註7) マサーンチ指揮のもとに步哨大隊——シチェガブートヂノフによつて派遣された部隊が到着した。五十四名。——我々は師團司令部の廣場へ入れた。

(註7) 或る者は、マサーンチは——ドウンガン族で、支那人ではないと報告してゐる。

廣場は大さわぎだ。人影が前へ後へ。赤衞兵が忙しさうに方々へ何か運んでゆく。玄關では誰かゞきびきびした調子で言葉短かに誰かに指令を下してゐる——きれぎれな言葉がきこえてくるだけだ。門の方へ機關銃を運んでゆく。垣のところでは馬が隣りの奴へかみついた、そいつがとび上つた、——側に立つてゐた赤衞兵が銃床でつゝいて分けた。師團司令部の玄關では眞黑な人影が右往左往してゐる、——廣場はざわめいてゐる、興奮と不安との渦卷だ。……我々は司令部のうす暗い大廣間の樫

の木の大テーブルを圍んで、我々の勢力を調査した。我々の勢力は次の如くだ、——

裁判委員會	六〇名
特別部	七五
國際中隊	一〇〇
黨立學校	四〇
師團司令部附共產中隊	六〇
步哨大隊殘部隊	五四
市黨部	三〇 (註8)

これが——現有勢力だ。總計——約四百。小さくない。然り、小さくない、頼もしい、これは有望だぞ。……

(註8) 調査に依ると、市黨部の武裝黨員はたつた二十名だつた。

——シツ……シツ……シツ……ありや何だ?

我々はきゝ耳を立てた、——遠くから軍歌がきこえてくる、だんだん近づいてくる、——

我等はすべて民衆の

勞働の民の家族の子……

誰だらう？　本當にやつてきてるのか知ら？　だが、我々は、それとは全く別の方向、辻公園の方から攻撃されるものと思つてゐたのではないか。あの方面には到るところに我々の斥候と檢察隊とがゐる筈だ。いつたい、誰が軍歌をうたつてやつてくるのだらう？

ゴリャーチェフの妻、クラヴチュークの妻、ナーヤ、アントニーナ・コンドヴルーシュキナ――彼女等はいつも我々と行動をともにした、いまは師團司令部へいつしよにきてゐる。運命をともにしようとしてゐるのだ。彼女等はいまは特に、偵察任務へ！

――ぢやあ、これから、偵察にゆかう……

彼女等は窓際からはなれて、見えなくなつたかとおもふと、直ぐ、よろこばしい情報をもたらせた。

――黨立學校がやつてきてるわよ。……

彼等は一團となつて小路を通つてやつてきたのだ、それは我々が思つてゐたよりもずつと左寄りの道だつたのだ。

司令部へ到着すると、直ちに、廣場に陣取つて、混亂の渦卷の中へ投じた。

何かで武裝してゐるものだけが抵抗できるのだ、我々は刻々最後を待つのみだ。もはや、交戰準備

は成つた、――司令部をとりかこむ廣場へ縱隊陣形、黑光りのする機關銃がその尖鋭な銃口をうす氣味わるく開いてゐる、歩兵銃と施條銃とがときどきかちやかちやと音を立てる。

我々は辻公園の方角から一刻も眼をはなさない。

武裝には武裝をもつて對抗しなければならぬ。だが、それが最後の解決ではないことは、先刻承知だ、それは不可避だ、だがそのことによつて問題が解決されるのではない。敏速に情勢を觀取し、謀議しよう。

みよ、情勢は實に複雜だ、事件は――一時に各方面から觀察しなければならん、――

支那との關係。……アンネンコフ・シチェルバコフの脅威。……再度の民族的大虐殺の脅威。……

七千の白軍捕虜。……

我々の前には恐るべき叛亂の光景が生々しくひろがつてゐる、しかも勝利は暴徒の方に歸するやうにみえるのだ、――私刑、無智な獸性と殘忍な復讐、掠奪、牧場の燒討、……原始的な血腥いバツカス祭……このテラーの中を――白軍總帥は馬上豐かに。……

さうだ、これは幻想ではないのだ、これは非常に、非常に現實的光景なのだ。

いいかうならないでは決してすまなかつたのだ、當時のセミレチェンスク地方の複雜な內情と四方面の

切迫し錯雜した全情勢を理解しさへしたなら……

だが、どうして未然に防止したらいゝのか？　我々のもつてるやうな、こんな勢力でどうしたらいゝのか？　おゝ、勿論、それは眞に有望な信頼すべき闘士ではある——暴徒の全計畫を一擊のもとに粉碎することができたかも知れない。四百人といへば——一つの力だ。だが、これは我々の力ではないのだ——我々が仕事に取りかゝつてゆくその力ではないのだ。

我々は、すでに、要塞には千挺以上の歩兵銃があり、赤衛兵は續々として我々の命令を裏切つて要塞をさしてなだれこんでゆく、隣接コサック村からも村民がかけつけていつてゐるのを知つてゐる、——彼等は一瞬にしてあらゆる事情を知つたのだ。或ひは前から知つてゐたのかも知れない。

要塞では、もうとつくに倉庫は破壞された、そしてその倉庫から武器をとりだして入城者へ與へてゐる。……あそこには大砲三門——我々には一つもない。あそこには——機關銃十臺——我々には三臺。……

この地方全體が暴徒に同情してゐる。それは、たゞ、徵發者、いま軍隊をフェルガン地方へ移動させてマホメット教徒を武裝させようとたくらんでゐるあの惡魔ボリシェウィーキの追放されるときを待つてるだけなのだ。……セミレチェンスク農民も暴徒側に加勢するだらう。……市も我々の味方では

ない、コサック村も味方ではない、キルギス土着民——この無武裝の貧民が武裝軍隊に對して何ができよう？　タシュケントは——山の彼方七百露里、しかもその全行程——鐵道未設。そこから援軍がくるとしても——長いあひだ待たねばならない。ブラジェウィッチはシベリヤから——いつかはやつてくることだらうが、……早速の援軍はどこからも絶望だ。自分の力……その方はいつたいどんなものなのだ！

だが、叛亂は燃えに燃えるだらう。異常な速さで深く廣く。我々の積極的行動がおくれゝばおくれるほど、成功の望みはますます少く、仕事はますます困難となるだらう。即時、何かしなければならんのだ、最初の瞬間、今直ちに、ひと思ひに、何かたゞ一線の行動を選擇し、實踐し、實現しなければならんのだ——如何なることがあらうとも、最後まで、鐵の意志をもつて。

電光のやうに閃く思索。流れ出るプランを次から次へと報告する。

1。攻勢に出るな、自衛手段として止むを得ざる場合にのみ應戰すること。

2。最初の一發——それは民族的虐殺の合圖であり、挑戰の意味となつて自由行動を取らせるに到るものだといふことを記憶せよ。

3。努めて氣長に交渉すること。

4。最大の讓歩を成すこと、それは――一時的のものだといふことを記憶して。
5。一方、タシュケントへ援軍を乞ふこと。
6。多少なりとも信頼できる騎兵第四聯隊をヴェールヌイへ近づけること、同聯隊は當地を去る二百露里の地點に達してゐるが、必要なくしてはこの事件の渦中へ卷込ませぬこと。
7。他のあらゆる部隊と即時聯絡を取り、冷靜な態度をもつて今回の突發事件の内容を或る程度まで報告すること、但し事件の内容全部を知らせぬこと。
8。宣傳ビラをまくこと。
9。暴動をして――一地方のものとして終らしむること、即ち、ウェールヌイ地方のみにて防止し、隣接諸地方へ擴大せしめぬこと。
10。我々の方が劣勢だといふことを何人にもまた如何なる形式においても最後まで感付かしめざること、さもなければ一般住民は直ちに暴徒の支援に走るだらう。
11。各自の行動計畫を報告しあつて、相互聯絡支持に努めること。
我々は我々の行動計畫をかく考察し、かく取り急ぎ作成した。
但し、策戰上臨機應變の處置をとらなければならぬ。最後まで我々の爪はかくさなければならぬ、

だが鋭く磨ぎ、軍使、外交官、辯士、司令官、兵卒、あらゆる役割に堪えるやうにしておかねばならぬ。
あらゆる準備をしなければならぬ。
だが、最後の瞬間までこゝに頑張つて、こゝに恐ろしいキャタストロフィーの脅威をもつて臨んでゐるものゝ眼から一刻もはなれてはならぬ。無論、いま、二つの逃れ口がある、その一つは非常に簡單なことだ、――
和議を申込むのだ、相方の勢力に格段の差があつて、しかも衝突は目捷の間に迫つてゐるといふ場合――和議を申込むのだ、馬に乘つて山を登りビシュピェークへゆくのだ。
これは最も簡單な危險のないやり方だ。目前に迫る死から救はれゝば――それでよい。もし目前に迫る死から逃れたとして誰が非難しよう?
だが、それからどうなる? 實權は暴徒の手に歸すだらう、それから先はまるで闇だ、――恐ろしい眞暗な夜だ、だが、その奥には血にぬれた眞赤な舌が動めいてゐる。
もう一つの逃れ口は、どんなに馬がものの狂ほしく突進しようとも、手綱をはなさないことだ、幾つもの山や河に疲れ、倒れようとも最後まで信ずるのだ、途中、もし、いくらかでも手綱を支へること

ができさへすれば、その通らねばならぬ道に倒れて馬の兩唇は裂けようとも、——おゝ、なほ、信ぜよ、……狂へる馬は靜まり、生き殘り、馬も主人も助かるだらう！

一刻も躊躇しなかつた、——こゝを死守しようと決心した、どうにでもなるやうになれ！

★

朝の四時にタシュケントへ直通電信がかゝつた。當時のトルキスタン軍總司令官フィヨードロ●フイヨードロウイッチ●ノウィーツキーの代理フルンゼが電信機に向つた。ノウィーツキーに全經過を說明するのだ。（註9）一つには、我々の行動計畫に關する總司令部の意見をきゝ、——一つにはタシュケントから武裝援兵派遣問題を提議してみるためなのだ。我々が何を話したか、はつきりはおぼえてないが、たゞ、フルンゼとともいそぎ電信で商議した結果、ノウィーツキーは、裝甲分隊と步兵中隊とを派遣しよう、といつてくれたことをおぼえてゐる。私は飛行機のことをちよつといつてみたが、——向ふからは、承知したともしないとも返事がなかつた。結局、我々は、——現在の情勢からみて非常手段として、——戰時獨裁制を布告せよとの指令を受けたのだつた。

（註9）このときの會話の記錄は私の手許には殘つてゐない。いろいろ文獻をあさつたがみつからない。

おゝ、しかし、今の場合、獨裁を宣言することは非常に危險だ。實際、獨裁は非常時に宣言されるべきものだ、だが、それを實施するためにはともかく何等か有望な勢力を獲得しなければならない、さうでないと——いつたい獨裁とはどんなことになる？　今の場合は威赫したゞけではいけないのではないか、それよりも言つたことは直ちに斷乎として實行しなければならないのではないか。そしてもしも約束したことを一二度實行することができなかつたり、威赫だけしておいてさてそのことを實施することができなかつたりしたら——獨裁も自滅だ、誰も眞面目にとりあつてくれるものがない、吹けば飛ぶやうなものになつてしまふ。我々には獨裁制實施の力がないのだ。いま我々の味方になつてゐるのも——いつ我々を裏切るかわからないのだ、勝手なときに我々をおいてけぼりにするかも知れないのだ。獨裁の方法は常に峻嚴でなければならない、そしてその實施にあたつては自信あり確固たる勢力があつて初めて有利となるものなのだ。……

ところがこれは？　我々の勢力は？　否、否、考へられもしないことだ、——たゞ要塞の連中を怒らせて、直ちに決然たる行動をとらせるに到るだけの話だ。これに對して、いま、我々は全く正反對の方法をとらなければならなくなつてるのだ、熱情を靜め、いま高頂に達してゐる暴徒の憤怒をやはらげ、焰を鎭め、その爆發を未然に防止しなければならないやうになつてるのだ。……その目的の

ために我々はいま黨立學校を要塞へ急派して祕密なアヂをやらうとしてるのだ。そのためには我々は最後の勢力を割かなければならなかつたのだ。だが、止むをえない。要塞の連中は興奮のあまり入城者をあまり吟味しないで何でもかでも歡迎し、よろこんで同志の中に加へ、武器さへあれば直ちに武裝させてゐたので、我々はそこへ入城してゆく我々の派遣隊にも氣が付かないで歡迎して入れるだらうと信じてゐた。

その通りだつた。彼等は要塞の中へまぎれこんで破壞的任務に就いた。ともかく、我々は活潑なニュースを手にした。だが、それもつかのまだ。ウェールヌイ諸部隊からくらがへした連中が早くもそれと氣付いたので、黨立學校の連中も脫走してこなければならないやうになつた。

驚くべきことには、要塞と電話が通じた、そして時には用のない話まで交すやうになつたのだ。我々は大體の樣子がわかつた。例へば双方から代表を送つて種々談判を試みた方が有利だらうとか——何か妥協點がみいだされるかも知れぬ、全體としてもつと良好な空氣がかもされるかも知れぬなどと話し合つた。

要塞側のいふところによると、この提議についてどうしたらよいかと躊躇、考慮中だが、結局、拒絶しはしまいといふことだつた。果して、賛成した、——

——先づおれたちの方へ、要塞の方へ數人の代表者を送れ、こつちで談判しよう。

さあ、どうしたものだ、危險なことだが、この提議は承諾しなければならない、——二三人ではどつち道難局を切り拔けることはできまい。だが、何も試しだ、何か出てくるかも知れないではないか初めるだけでも、——すでにそのこと自身が一つのことだ。我々は代表を用意した、——シェガブートヂノフ、ムラトフ、及び師團附屬調達部次長エフィーモフ。更に、要塞でアギドゥールリンが加はるらしい、アギドゥールリンといふのはシェガブートヂノフの親友でかつ助手をしてゐる男なのだが、その後、シェガブートヂノフが危險な大役を果さなければならないことになつたとき、たえず彼と我々の聯絡に努めてくれた。

代表は出發した。我々は神經を尖らしてその結果を待つた。良い結果を期待するものもあれば、期待しないものもあつた。要塞からきこえてくる物音にきゝ耳を立てた。あるものは好感をもつて會見したゞらうと信じた。あるものは、一と目みると直ちにやつつけてしまつたゞらうといつた。城門で武裝解除せしめて要塞の奥深く連行し、銃殺したゞらうと信ずるものもある。遂に、黨立學校の連中が三四人脫走してきて、確報をもたらした、——要塞の奴は代表とはあまり口をきかなかつた、粗暴を極め、威嚇的な態度だつた、直ちに捕縛して要塞監獄へ投じたといふのだ。要塞では騷ぎが大きく

なつた。——きつと、何か斷然たる方法に出ようとしてるのだ。

だが、こちらでは何か新らしいことがあるか——我々は何もしないで刻一刻と迫る攻撃を待つてるだけだ。

代表捕縛のニュースは直ちに漏れて、市から隣接町村、牧場の方へと傳はつていつた。

あらゆるニュースと流言飛語は當時おどろくべき速力をもつて擴がつていつた。文字通り一瞬にして廣汎にわたる地域へ知れわたつた——それには電話や傳令も役立つたらうが、何よりも第一に要塞騎兵隊の仕業だ。

代表としてシェガブートヂノフが捕縛された。このことは土民連を異常に刺戟した。最後の飛電だ、——最後通牒を發せよ、既に火蓋は切られた、我々の代表が捕縛され、投獄されたのだ。戰鬪準備をしろ。もつと活潑に、もつと活潑に、もつと活潑に、もつと活潑に蹶起せよ!!

マサーンチは師團司令部へあはたゞしく報告した、——

——今、キルギス人の一團が馳けつけたばかしなんだ。彼等はシェガブートヂノフ解放のために要塞へ出かけるからとおれに武器を要求したんだ。……山へ馳け上つて牧場の連中を蜂起させようつてんだ。全軍直ちに蹶起するものと信じてたんだ。だが、おれには武器がない、彼等は素手でかへつち

まつたんだ。……モハメット教徒の連中も極度に人心恟々としてる。多くのものがひつそりと身をかくして虐殺を恐れてる……多くのものは山へ上つてどうしたらいゝかと祈つてる始末なんだ。……

我々はマサーンチに直ちに近くの若者を通じて、何も別に大したことが起つたのではない、非常な危險に迫つてゐるといふ噂は誇張されてゐるものなので大部分は嘘なのだ、シェガブートヂノフが要塞で捕縛されたなどいふことは絶對に無い、たゞ交渉のために殘つてるのだ、といふことを土民に傳へるやうにと命令した。

そのとき、十二人の要塞側の代表が師團司令部の門前にやつてきて我々と交渉したいといつてゐるといふ知らせだ。彼等を入れた。ひつきりなしに我が軍事會議が召集開會されてゐる司令部の大廣間へ通した。

——我々、要塞軍代表は、——と、彼等は我々に說明した、——種々重大問題について協議するために來たのであります。

我々は、勿論、即座に我々の投獄された同志のことをいつた、何故投獄したのか、今はどこにゐるか、釋放してくれるか、何時?

要塞側は、我々の同志はすでに釋放された、いまこゝにやつてくるだらう、だが『彼等は誤まつて

捕縛されたので誰がしたのか不明である』、と釋明した。

何をぼざいてやがるんだ、だが、我々は興奮してはならん、冷靜な態度を持して。

彼等の一擧一動を注意深くみてゐると、どうにかしてちりぢりになつてこゝそこをのぞきこんで、我々の準備がどの程度のものか、如何なる方法と勢力によつて應急處置をとらうとしてゐるかを嗅ぎ出さうとしてゐるのだといふことが、よくわかるのだ。だが、我々は、何くはぬ顏をして次から次へとドーアを閉め切つてしまつた、こゝから出してやつてたまるか、この空つぽの部屋の中で愚にもつかぬ話をつゞけてゐよう。代表のいやに謙遜な應答振りからみても、彼等と話をしたつても何にもなりやしない、彼等はたゞこつちの樣子を嗅ぎに來たので彼等の言質も保證もみな一文の値打もないものだ、といふことは直ぐわかるのだ。

——だが、ともかくだね、いつたい、どういふわけで我々の代表を留置してるんだか？

——知らないんであります、——と、彼等はお辭儀をするのだ、——我々はそのことは知らないんであります。我々はその事項については何等全權を委任されてをりませんので……

何かあぶなつかしいことを言つてやしないだらうかと、おたがひに顏みあはせながらいふのだ。

——我々は、たゞ、要塞は非常に平和を愛好致してをりますので……（『平和を愛好致して……

平和を愛好致して』……——三四人がいつしよになつて口を添へた）そしてまた決してこちらのやうに流血の慘を欲してゐるものではないといふことを報告するために派遣されたものなのであります。こちらの代表方はそのことを要塞で我々にいはれましたので、そこで、我々は全く平和を愛好致してをるものだといふこと（『平和を……平和を』……——と、また、口添へをした）を信じて頂きに參りましたので……

——では、諸君、いつたいどうしたといふんだね？　何のために、特にあゝして守備隊が籠城するんだね、どういふ問題が惹起したといふんだね——聽かうぢやないか。

——いや、我々はそれはできませんので……

——さうなのです、できないのです、全くできないのです……どうしてもできないのです、——要塞側は口をそろへて加勢した。

——いつたい、どういふわけで、できないんだね？　そいぢやあ、たゞ單に豫備交渉としてゞも……

——その豫備交渉もできませんので、我々はその事項については何等全權を委任されてをりませんので、我々は全く正直のところ司令部側を鎭撫するためにきたのであります。……

——だが、諸君は、どういふわけで要塞から守備兵を引出して我々と眞面目な正式交渉を開始しな

いのだね……

——それは、その、第二十六聯隊が到着しました上で……

——第二十六聯隊がどうしたといふんだね？

——この聯隊が到着しました上で、交渉に移りませう……あれが來ないでは我々は何もいへませんので、一時に何もかもまとめて説明しなければなりませんので……

かういふ調子で三十分間ばかしまごまごしてゐた。

我々はこの「會見」から何か議定書を作成して共同聲明の形式で調印したかつた。しかし、要塞側は斷乎として拒絶したばかりでなく、自分の名前を名乘らうともしなかつた。

全くの小田原會議だ。きやつらは何とかかとかいつて言葉を濁してしまふ、これといふことは一つもいはないで、……

——我々はたゞ鎭撫しに……我々はたゞ司令部側を鎭撫しに參つたのであります。……

の一點張りだ。

いや、もう、この『鎭撫』とかはありがたい限りだが、部屋の壁の向うに——そこには何が隱してあるのか、と、うの目たかの目なのはおそれ入る。

おたがひに猜疑しあつてゐるものが向ひ合つて座り、おたがひの言葉尻をとらへて腹の探り合ひだ、何か弱點をつきとめなくては。

要塞側に捕縛されたウェールヌイ要塞司令官サラーエフも要塞側代表についてきてゐたが、今まで長い間どこか後の方へかくすやうにしておいたのを、とうとう、利用しようと決心した彼等は——

——もし寢返り打たないと、——と、彼にいつた、——ムラトフとシェガブートヂノフの首はないものと思つてろ！

私はサラーエフと二人だけで語り合ひたくて仕方がなかつた、要塞でやつてゐることを彼からきゝたかつたのだ、だがそれはどうにもできなかつた、我々は皆の前にいつしよに座つてゐるのだ、それに要塞側の連中はいやといふほどサラーエフを監視してるのだ。我々はたゞ眼と眼で話し合ふだけだ、

——私は彼の眞劍な緊張した視線によつて、事件はたゞではすまんぞ、といふ意味をよみとるのだ。彼は私のもの問ひたげな視線に答へて、たゞゆつくりと大きく頭を縱に振つてみせるのだ、——

——良くない、非常に良くない……

だが、話し合ふことはできない。

我々が對座して會議してゐるうちに——要塞の方から電話がかゝつて、全『赤衞兵問題』を至急討議

するために新しい全權を派遣してほしいといつてきた。

どうすることもできぬ、派遣せねばならん、派遣するとすれば、要塞側代表がこゝにゐる今の内だ、我々の代表が歸還しないうちは要塞側代表を歸すまい。……

四人を選んで派遣した、――副官クラヴチューク、パーヴェル・ベレスネフ、コプイロフ、シエードゥイッフ、彼等の任務は――まるで言つてしまつてはいけない、たゞ樣子を嗅ぎさへすればよい、要塞の空氣がわかりさへすればよい、首魁をつきとめ、要塞の兵力を推定すること、要塞側は何を欲してゐるのか、それを如何なる程度にまで固執しさうか、また如何なる範圍まで我々が讓歩しなければならないか、といふことを知つてくること。

準備を終つて、出かけた。一方、我々は、師團司令部に居殘つて、この罪のない代表と無駄口をきゝながら腹藝だ。

我々の代表の一人、パーヴェル・ベレスネフについてちよつと書いておかねばならない。彼は、暴動前夜、舊惡のために、或ひは新しいのだつたかも知れないが、特別部のために捕縛されようとした。その夜おそく、同盟大會閉會後、十時頃、ベレスネフは師團司令部へ助けを求めて師團長ビェーロフのもとへやつてきた。が、ビェーロフは朝までそのことをほつておいた。ベレスネフは師團司令部の

自分のところへかくまつてやつておいて、翌早朝、個人的に事情をうちあけてマサールスキーに說明する考へだつたのだ。ところが、その朝――この大事件だ！ ベレスネフのことどころぢやない。我々のなかには、ベレスネフは暴徒の首魁であり、彼はたゞみづから直接に司令部の事情を探りにきてゐるので、はつきりとした見きわめがついていざといふ場合になると、我々をやつつけちやへと命令するのだ！ ――と信じてゐるものもあつた。

――ベレスネフを警戒しろ、――と、彼等はいつた、――あいつは明らかに暴徒なんだ。もうとつくの昔に處刑してしまはねばならんやうな惡計をセミレチェンスクいつたいにたくらんでやがるんだ……即時捕縛監禁しろ……

當時、ベレスネフは全セミレチェンスク軍の指揮にあたり、優れたるパルチザン指揮者としてみとめられ、向ふみずな勇氣と鐵のやうな意志をもつた冒險家として知られてゐたのだ。兵卒の間には彼は異常なポピュラリティーをもつてゐたが、司令部では彼が掠奪亂暴狼藉をほしいまゝにするやうな部下を許してゐるためにあまり重んぜられなかつた。ベレスネフは、彼自身別に罪があるやうにはみられないのだが、このことにはいつも不平をいはなかつた、單に「かわいゝ地酒」で氣をまぎらせて、彼一流の方法でその『權威』を保持してゐた。

ベレスネフはビェーロフにはどうしたものか特別な信用があつて妙にとり入つてゐたので、彼に助けを求めてやつてきたのだつた。

我々はパンフィールイッチと相談した、——

——トリックをやつてみるか、効果的かも知れんぜ。第一、要塞側はベレスネフが捕縛されたことを知つて猛り立つてゐる、このまゝではどんなことになるか知れない。そこで、あいつを、ひとつ、利用してみてはどうか？

我々はベレスネフを別室へ呼んで、懇々と次のやうにいつてきかせた、

——ベレスネフ、お前は賢い奴なんだ。無論、お前は、要塞の連中のやつてることがたゞではすまんといふことがわかつてるだらうな。なう、あんなことをやつてどうなるもんか？　何もなりやしない。タシュケントからはもう装甲兵と歩兵がやつてきてる、——今にえらい血戰ぢや　あの連中は何でもない馬鹿らしいことで騒ぎ立てゝるんだ．何でさわいでるんだか、自分でもわかつてやしないんだ。ウェールヌイは邊鄙の方で、山の向うへいつちやへば——とても追ひ付くまいと思つてるんだらうが。……だがちよつと考へて見な、もしこの上しづまらなかつたら、どうなると思ふ。ひどいことになるぞ。ますますたゞではすまんぞ。だが、おれたちは血を流さないですむやうにと兵隊をしまつ

ておいてるんだ。そこで、お前も、ひとつ、このために力添へをしてくれんか。どうも、あそこぢやあ、お前が非常に役に立つやうに思はれるんだがね。……要塞の連中は、お前とは馴染みだし、それにお前はあそこぢやあ何といつても——權威なんだからなあ。今、おれたちは談判のために代表を送るんだが——どうだ、いつしよに行つて見んか。お前も物を言つてくれんか——要塞の連中はおれたちのいふことよりもお前のいふことの方をよけい信用すると思ふんだが。

するとベレスネフは承知した。どういふ根瞻だつたか——知れない。だが、承知した。

我々は考へるところあつて彼に問題をしつかと打ち明けていつた。彼が要塞側へ裏切りしたとしても、その代り、我々の方へは既にタシュケントから援軍がやつてきてゐるといふことが知れる、このことは非常な威赫になるから、或る程度まで彼等の行動を阻止することができるかも知れない。それから、また、我々は無流血で事件を解決したいと思つてゐるといふことをいつてきかせた。このことは特に力を入れていつてきかせた、このことはまた我々自身の行動の基礎的條件なのだ——この條件に從つて我々自身の作戰計畫を立てしめよ。それから——このことは彼一個人にとつて重大なことなのだが——もし我々に力添へしてくれゝば、お前の味方になつてやつて舊惡を宥してもらへるやうに運動してやらうといつた。

かうして、我々はパーヴェル・ベレスネフを手馴つけたのだ。

彼を監視の眼で見、彼に十分の信頼をよせてはゐなかつたやうだが、ともかく事件に參與させることにした。

一方、第二十六聯隊へ宛て〻祕密の書面をしつかりした青年ルイソフにもたせてやつた、——

——ルイソフ、よく言つておくが、——我々は彼に命令した——もしも暴徒がその手紙をみたら——何もかもおしまひなんだ。卽時破裂だ。……暴徒の手につかまつちやならんぜ……その手紙をやつらの手に渡しちやならんぜ……

馬上の人となりながら、手紙をしつかと內ポケットへいれて、ルイソフは微笑んだ、——

——うまくやつてみせるよ。安心してゐなさいよ。もしもこの手紙に手を出しやがつたら、そやつもそれつきりだ！

と、いつて、ピストルをかたく握つてみせた。

——あゝ、よしよし、ルイソフ、もう行つた！　行つた！

馬は土煙りを立てながら馳け出した——ルイソフは通りへ出ていつた。

後になつてわかつたことだが、彼はうまく人つ氣のない横道をとぼつて山へ出てゆき、また、そこ

でも人の通つたことのないやうな小路をえらんで行つたのだつた。さうしたところは彼はお得意だつたのだ、道もない山を通つてゆくのが彼にとつてはいちばん確かな近道だつたのだ。

手紙には聯隊長へ宛て〻今回の事件を說明して、聯隊は如何なる行動をとるべきであるか、また如何にして適宜我々を援助すべきであるかを指示してあつたのだ。聯隊長自身は危險は感じてゐなかつたのだが、その部下は、聯隊長をほうむる位のことは朝飯前といふ程の亂暴者だつたのだ、これまた例のセミレチェンスク軍と同じやうな奴なのだ。……

その頃、要塞側でも第二十六聯隊へ代表を派遣した。

だが、ルイソフは先着して、うまく立ち廻り、聯隊長をしてあらゆる用意をなさしめた。要塞側代表が到着するや、直ちに捕縛禁固した。

要塞側の連中はどうすることもできなかつた、全權委任のことを口實とし、委任狀をふりまわして全聯隊に報告させてくれと要求した。彼等の聯隊へ入ることを許さなかつたのだが、そのさわぎも施條銃をつきつけて冗談でおどしてるんぢやないぞといふところをみせたのでおさまつた。聯隊には暴徒の代表のことは少しも知れないですんだ。

だが、代表はしつ〻こく聯隊のことを氣にかけて、一度でい〻から「全赤衛兵同志諸君」に公開の席

で話をさせてくれと懇願した。このことが我々にとつては最も危險だつたのだ。「依心傳心」だ——全聯隊は我々に贊成しないで、——暴徒の味方となつてしまふにきまつてゐる、同じセミレチェンスクの血を分けた連中だ！

我々の手紙には次のやうなことがあつた。——聯隊はいかなることがあらうともその場にふみこたへなければならない。如何なる形式においても要塞側の連中と兵卒とを會見させてはならない。ウェールヌイ事件を、ソウェート政權打倒へ進む白衛軍暴動の發端であるとして正しい見方のもとに理解させねばならない。それから——暴徒を嚴罰主義で威嚇しながら、聯隊をしてソウェート政權擁護のために銃をとつて立たうといふ決心を固めさせねばならない。……

かうした指令は我々は騎兵第四聯隊へもあたへた。騎銃隊にもつたへた。かうしたあらゆる方面から實際に次のやうな意志表示の報がウェールヌイをおそうた。——

ソウェート政權をゴロツキの手に渡すな！

これは我々にとつては中々の援助であつた。この意志表示は三文の値打もないものなので、明日この町へ第二十六聯隊がやつてきたとしてみろ——十分たてばもう彼等は要塞へ入城してしまふ、二十分たてば——我々を攻擊する、といふことは分りきつてゐたのだが、それでも我々には少からず力に

なつた。

要塞側が次のやうに揚言してゐたのも根據のないことではなかつたのだ、——

——あんな意志表示が何になるんだ、誰がやつたものなんだ？　聯隊自身はきつと何にも知つてやしないんだ、——幹部の連中か、コムミュニストの連中が知つてるだけの話なんだ。……聯隊自身を我々に引渡してみろ——きれいに話をつけてみせるから。

もはや、彼等が聯隊と『きれいに』話をつけて、聯隊を要塞側へ引入れることは既定の事實だ。我々はそれを知つてゐた、だから、我々はその意志表示を廣く利用して、できるだけ各方面へ宣傳したことはしたが、內心大した價値をおいてはゐなかつたのだ。

一方、我々の勢力、なさけない我々の勢力はますます減少してゆくばかりだ。

要塞司令官部下、マサーンチ引率の步哨大隊殘部隊が要塞側へ走つたのは、もう大分前の話だ。最後に同情してといふわけではなく、たゞ、あのやうな大敵に對して極めて小勢の味方として殘ることになるのではないかと心配したのだ。かうした想像のために黨立學校の連中まで要塞入りの相談を初めた。特別部や裁判委員會からもぽつりぽつり脫走者が出る始末だ。我る特別部員の如きは機關銃の雷管をもつて逃げた。

我々の勢力は四離滅裂だ――我々は孤立だ。黨立學校も國際中隊も脫走した。

全部で十五人から二十人位の黨員が殘つたゞけだ。今となつては武裝的對抗は考へるのも滑稽だ。事件解決の道は――我々にはこのことはよく分つてゐた――結局、我々の忍耐力、冷靜なる抵抗、强靱なる神經と無限のエネルギーに在るのだ。

二十人對暴徒五千！　今や、要塞側は五千以上だ。武裝兵千五百。一般住民は馬をつれていつたので、――その騎馬隊が組織されてゐる。

一口にいへば、要塞側は時々刻々擴大强化してる、が、我々は極度に疲弊、極めて小さい一團として殘つてるにすぎぬ、――我々は自分達だけになつてしまつた。

特別部からも重要書類はすべて師團司令部へ移管することにした。銀行からも重要なものはこゝへ移管するといふやうなことは例のこまめなマメリュークの仕事だつた。皆、移管した。

皆、師團司令部へ集つた、狂暴な天災におそはれる小さな島に集るやうだ。

我々の代表は要塞から何の得るところなく歸つてきた。要塞側代表――今や彼等はタシュケントから武裝兵がやつてくること、當ウェールヌイにおける我々の實力、我々の作戰、その他のことを暗示されてその食欲を刺戟された「飢民」だ――も歸つていつた。

要塞側は新代表を要求してきた。今度は代表を指摘してゐるのだ、――師團長、師團軍事會議長、旅團長二人、その他。

今や、いたづらに彼等の要求なら何でも滿してやるといふことを示してばかしゐる場合ではない！しばらく樣子をみてゐるべきだ、さうでないと、我々は全く無力で、何でも即時承諾してしまふといふふうに思はれるおそれがある。それに、師團長だの、旅團長二人だの、といふやうな「有名」な代表が何故必要なのだ。……いや、いや、すでに明らかだ、――我々から軍部巨頭を奪はうといふのだ。かゝる犧牲を拂ふことは斷じてできない。

我々は拒絶した。要塞では會見したくない、司令部へ代表をよこせ、といつた。司令部ではしないと拒絶してきた。そこで、我々は、要塞でもなく、師團司令部でもなく、中立地帶、――即ち、キルギス旅團本部にしようと提議した。要塞側は深重考慮の結果、贊意を表した。午后四時、相方各十名の代表と決定した。交渉の準備をした、材料を蒐集整理した、會見した。

町はもうとつくに沸き立つてゐた。驚かされた町民は、もう夜から、暴動勃發の最初の瞬間に、軍隊が兵舍から要塞へ移動していつたことを知つてゐた、流言飛語の洪水だ、――

――雌伏してたコサツクが蹶起して町を占領したんださうだ。……

——シチェルバコフが支那からやつてきたんで、全市は白軍の手に歸したつて話だ。……

——「當局」は全部處刑されたさうだ。……

——赤衞軍は「コサック」に降服したさうだ。……

思ひついたことをそのまゝしやべり合ふのだ。それが次から次へと知つたこと知らぬことを附加へ輪に輪をかけて吹張されるのだ。噂は雲のやうに町をおそひ、生きた人間の流の中へ雨となつて降りそこによどみ、そこから新しく湧き出で、更に奇態な、まるで似ても似つかぬものとなつて、范濫してゆくのだ。——流言飛語の運命はこんなものなのだ。

官廳でも、まるで仕事は手につかぬらしいのだ——誰も何にもしない、たゞおろおろと物もいへないで廊下にぞろぞろと集まつたり、テーブルのかたわら、部屋の隅つ子、窓の下にひとかたまりになつて何かひそひそとさゝやきあつたり、或ひは男らしく元氣にしやべり散らしたり高笑ひする、——皆それぞれにきくものは悲喜交々だ。

獨裁は公式には布告しなかつた、我々は依然として、或る程度まで我々の無力をさとられないようにと、その一擧一動に自信にみちたところを見せるやうにつとめた。町へは宣傳ビラをまいたので、そこは人心も平穩に歸し、騷擾にまきこまれるやうなことはなかつた。

要塞の方は大へんな騷ぎだ。近づく危險にみづからおびえてあはてゝ武裝鬪爭の準備だ、細身の短刀、厚刄の劍をにはかに磨ぐ、避け難い殺戮の近づく豫感に慄へて最高頂に達してゐる。それは熱病にうかされたものゝ騷ぎだ、絶えざる咆哮と喧噪、おたがひにしわがれた聲で斷片的な、聯絡のとれてない絶望的な命令のかけ合ひだ、猛獸のやうに荒々しい、が、無力な威赫。要塞の空は獸の唸り聲のやうな叛亂の呻きに慄へてゐる。上に立つものがゐないのだ。指導者がゐないのだ。何でもかでもやつつけちやへつ！——要塞に渦卷く群集は自分で自分の問題を解決するのだらう。荒々しい叫喚と狂ほしい喧噪とはこのことを物語つてゐた。

だが、すでに、オルガニゼーションの初光は見えてきた。暴徒は、オルガニゼーションなくして何事もできないといふことを感じてきたのだ。まだ長いあひだ統制はとれないことだらう、問題解決のための集合もたゞむやみにわめき立てさわぎ立てるにすぎないといふやうなこともまだくり返すことだらう、だが、——鐵の如き手が狂氣せる群集をつかみ、訓錬をあたへ、銃劍、鉛の彈丸を運び、進め！　と命令を下す時が來るだらう（それはきつと來ることだらう！）。

すると——無智で柔順な群集はこれからどこへゆくのかも分らないまゝに進んでゆくことだらう。

夜、兵舍で、いざ出發といふ時にさへ、意見はまちまちだつたのだ。或るものは、直ちに師團司令

部へ押し寄せて巨頭全部捕縛、或ひは即時銃殺すべきだと主張した。

他の者は第二十六聯隊が到着するまで自重した方がよい、その代り要塞を手に入れることは非常に有利だと思ふと主張した、——

第一に——そこで武器を手に入れること。

等二に——交戰準備を整へる。

第三に——殘部隊鳩合に努める。

最後に——農村を煽動して、農民大衆を即時獲得すること。

彼等の立場からすれば、勿論第一の者の方が正しかつたわけだ。最初から斷然たる行動をとる方が暴徒にとつては有利だつたのだ。たゞ一つ次のやうなことが問題だつたのだ、——もしも師團司令部に相當の兵力があつたら要塞へ立て籠つたまゝ第二十六聯隊の到着を待つこと、もしも師團司令部に十分な兵力がなかつたとしたら、その場合は——現在の勢力でも容易に成算があるわけなのだから何も新勢力の到着を待つ必要はないのだ。第一の者の方が正しかつたのだ、——即時司令部を突いて幹部全郎を捕縛、場合によつては直ちに銃殺すべきだつたのだ。一刻の猶豫もなく政權を獲得、直ちに總檢擧を開始、獨裁を宣言すべきだつたのだ——ひとくちにいへば、何よりも先づ第一に、自己の勝利

が何であるかを示さなければならなかつたのだ。ところが暴徒——彼等は何をやつたか？　まるで反對のことをやつたのだ、——勝利の示し方も半分の程度だ、それからさきは——我々と交渉だの商議だのと、まるで泥沼の中へひきこまれるやうに、論爭や討議に身をやつしだしたのだ。我々はできるだけ彼等をこの泥沼の中へひつぱりこんだのだ、何故なら現在のコンディションとしてはたゞかうすることにのみ我々の救濟、我々の事件の解決の初光があつたのだ。暴徒はおどし文句をならべたが最後の手段に出ることはしなかつた。特別部、司令部、裁判委員會に——相當の勢力があるといふ豫想は裏切られたのだが、最初、輸送中の武器を掠奪して兵舎から要塞へ移る用意を終へてから——先づ特別部と裁判委員會へ有力な檢察隊を派遣して——その方面からの攻擊にそなへたといふのは無理のないことだつたのだ。

だが、攻擊はなかつた。靜かに、喊聲もあげず、軍歌もうたはず、たゞときどき銃劍がかすかにかちやかちやと音を立てるだけだ——彼等は深い夜の闇をついて續々と要塞へ入つていつた。そこで倉庫を破壞して武器を手に入れた。要塞の番兵は抵抗しようともおもはなかつた——靜かに道をよけて彼等を入城せしめ、後に自分も暴徒に加はつた。

彼等が入城すると——町中をかけづりまわつて馳けこんでくる、要塞の靜かな空氣は破られて、わ

いわいがやがやと大騒ぎだ、深い夜の沈默を破つて罵詈、雜言、馬のいなゝき、叫喚、咆哮。六月の夜は叫び、唸り、喊いた。要塞の騒ぎは刻一刻激しく、叛亂の歌のうねりは刻一刻物凄さを加へてゆく。

要塞の人の渦の中心には——ペトロフとカラワーエフ。

ペトロフは——短軀、肥滿、精悍な青年だ。あまり大きくない圓いいがぐり頭は——筋骨逞ましい重々しい兩肩の中へどつかと根おろしてゐる。掌は——大きなシャベルみたいだ。脚は短かいが頑丈、いかにもかるがると足をはこぶ。全身大地に根をおろしてゐるやうで頑强無比。ずるさうな綠色の細い眼は——やゝ考へ深さうだが、その奥には血に飢えた慘忽な獸性が波打ち、閃いてゐる、第一戰に立つ闘士だ。闘爭の中へ——闘士だ、恐怖を知らぬ戰士だ。仲間——ゴロツキとヨヒドレの中にあつてヤケ酒はあほらず、好きといふ程度だ。

カラワーエフはペトロフといゝ對照だ——ならず者らしい無鐵砲な頭だ、——こいつにかゝつては何にもだいなしだ。彼の好きな小唄が次のやうなものなのも無理はない、——

『何でもかでもやつちまはう——ちつとも惜しくも何ともないなあ』。

まるでこの通りなのだ。戰爭のときなども——至つて勇敢、困つてるのを助ける、命など投げ出し

てかゝる——ちつとも惜しまない。

だが、一方、闘爭的活動のない靜かな生活も好きで、涙なしに投げ出してしまふなどゝいふことはしない、法廷で歎願したやうに助けを求めるのだ、——

——どうぞ、お宥し下すつて。どうぞ、眞人間になります。わるいことはふつつりとやめます。どうぞこゝのところは……

丈低く、アナグマのやうに頑丈だ。がつしりとした幅のある肩。しつかりとしてゐてしかも自由自在、動作のなめらかなこと曲乘りのやうだ。馬へ乘つてもプロフエショナルみたいだ。——鞍をつけた馬は彼においては肉屋における踏臺のやうだ。危げがない。眞黑な硬い頭髮は密林のやうだ狹い額は陰險だ。そり返つた紫色の唇の下からのぞいてみえる獰猛な齒並は——狡さうな物凄い微笑をうかべて氣味わるく光つてゐる。咽喉へ嚙みつき最後の一滴まで血をすゝる形相。吸血鬼だ。唇の上には短い黑い鬚が如何にも惡黨らしくひかつてゐる、唇の下にはまるで牡牛が壁へ頭をつきつけたやうな恰好をして荒つぽい硬いあごひげが胸の方へつき出てゐる。ぎろぎろとした狡るさうな黑い眼には——放縱な生命の歡び、激烈な音律にあはせた勇壯な亂舞——氣ちがひのやうな無鐵砲な剛膽さ、たえず血に飢えた情熱の好戰性。カラワーエフは、いつもいそがしさうなせかせかした話振りだ。人

を馬鹿にしたやうな狡るさうな微笑をまたしてはやる、だからカラワーエフがほんとのことをいつてるのか冗談をいつてるのか、腹にいちもつあるのか、ちつとも分らない。彼はペトロフとかたらつて兵舎の連中のアヂに成功した、この二人があの夜赤衞兵を組織し、施條銃を遺棄し、彈藥をあらため、檢察隊を各方面へ派遣し、かくて要塞へ乘り込んで、この大騷擾の中心となつてゐるのだ。

この大隊へ『コムミュニスト』のチェウーソフが投じて、民兵指揮にあたつた。暴徒は彼が『コムミュニスト』側だつたことは承知の上だつたのだが、こんなコムミュニストは何んでもない、利用してやれ……

チェウーソフは、自分の役に立つこと、民兵の不幸なこと、中央からやつてきた上官のよくないことを語り、彼等に酷使され迫害され「罪なくして苦しみつゝある赤衞兵」のことをしやべり立て、はては兵舎の連中といつしよになつて彼等の悪口をいひ合つた。つまり、彼等の「味方」となつたわけなのだ。しかも「役に立つ」味方だ。

年は三十五から三十八位までのところだ。黄ろいかさかさした顏には冷かな褐色の瞳が鉛のやうに光つてゐる。廣いはげあがつた額の上には——薄い灰色の頭髪。灰色の立派な鬚——またしてはそれを唇のところから掌でなで上げてみる。ゆつくりとした考へ深さうな動作だ、決斷心も鈍い、だが怒

つたとなると——ひどい。學問はさうないが、別に氣にかけてゐない、學問よりも實際の見聞からえた常識で生きてゐる、その方がわかりが早いのだ。チェウーソフは兵舎へやつていつたときも、赤衞兵がどこへゆくかといふことを知ると、もう自分ひとりで——要塞の方へまつしぐらだ。そこへゆくと——すぐ仕事にとりかゝつた。演說、演說、演說、諸種の交渉、相談、說明——うまく立ちまわつて直ぐ指揮官になつてしまつた。

彼が入つたときのドヂャルケント第二十七聯隊附の此の大隊には、全く雜多な人間が集つてゐた——入城した者はかたつぱしから武裝させた、師團司令部附要塞司令官部下、當地駐屯中の第二十五聯隊附大隊の一部、步哨大隊の一部。步哨大隊からの脫走者の中にはウーイチッチとブーキンがゐた二人とも後に相當の役割を演じた。

トルキスタンの炎熱のために乾燥しきつた地方には、「サクスアール」と稱する撚れた上に曲りくねつたせむしのやうな感じの樹がある。

ウーイチッチはその「サクスアール」を思はせる、——ちようどあんなに不細工にひよろ高くて方々がいやにくねくねゆがんだやうになつてるのだ、誰かぐいやといふほどくねくねとひん曲けてはみたが折つてはしまはなかつたといつた格好だ、くねくねと曲り曲つた鐵の棒みたいだ。

赤衞兵用の油じみたつぎだらけのヅボンが、まるで棒へ袋をかぶせたやうな恰好で、ひよろ長い兩脚にもつれついてゐるのだが、二本の紐は、ぷんぷんと悪臭つてくるやうな油じみた眞黑な指をした大きなよごれた足のうらで、まるで二本の尻尾みたいに、ひよろひよろつと這ひ下つてゐるのだ。ルパーシュカはひよろ高い彼には短かい、——やつとへそがかくれてる位だ、兩袖は、これまた細長い痩つぽちの腕の肘のところまでしかない。歩いてるときなど、その細長い兩腕は、まるで蔓か何ぞのやうにもつれ合ふのである。頭は——小鳥の頭みたいだ、——小さくて敏捷でたえず動いてゐる。頭髪は——亞麻色のやうでもあれば赤毛のやうでもある——それが、また、ひどくまばらで、聯隊の鋏でてつとりばやくちよきちよきと引きぬかんばかりに剪つたあとのやうだ。ウーイチッチの顏はそばかすだらけだ、黄いろなかさかさしたくぼんだ頬、鼻は——よく煮た馬鈴薯みたい、汗ばんだよごれた首はこれまた鷺鳥のやうに細長い、——肺病やみらしい。眼はどろんとして死んでゐるやうだ、いつも不愉快さうで、狼みたいなカラワーエフなどのやうに輝くといふことがない——ウーイチッチのはまるで濁つた泥水の中へ沈んでゐるやうだ、無氣力で、ひどいくぼみやうだ、今に眼窩の中へ落ち込んでしまひさうだ。どろんとしてゐてのろまさうだが、そのくせとてつもない剛情と敵意とにあふれてゐて氣味がわるい。

ウーイチッチの相棒に——テグネリャードノフといふのがゐる。二十五になるかならないかといふ若者だ。普通の顏だ、全くの平凡人で、どこといつて變つたところのない男だ。素速い動作、早口な話振り、斷乎としたヂェスチュアー——皆その消え失せぬ青春の力を語つてゐる。若さ——これがテグネリャードノフからうける第一印象だ。彼のエネルギーも若さからきてる、見たところ新鮮な力にみなぎつてゐる、未だ世間の苦勞によつてすりへらされない健康がある。テグネリャードノフとウーイチッチはいゝ相手だ、一方がいろいろと考へて言ひだしたことを一方が實際にやつてのけてゆくのだ。この二人はいつもくつついてゐる。相互扶助だ。

歩哨大隊から拔けてきたやつにブーキンといふのがある。

妖怪。變化（へんげ）。化物。とてつもない巨漢なのだ。それに相當した——でつかい肩。赤毛の尨大なる口ひげ——まるで風車の翼みたいだ。生きたものゝやうにゆらゆらと大きく動いてゐる。これは全くかざりものゝおもちやぢやない、三つ位の子供だつたら平氣で半時間位は乘つけてやるといふ重要なる役目を果すべき鬚なのだ。どこか田舍に、實際、ブーキンにはアリョーシャといふその位の子供があつて、よくその不細工な大きな手にとつてもかわいがつてやつたものなのだが、親父がキッスすると硬いひげがあたるのでそりかへつてひどく泣きわめいた——痩せつぽちで貧血症の女房はひどくびつ

くりして泣かぬばかりになつてゐる、——

——アリョーシュカ、アリョーシュカ、いゝ子だなあ……ほら、おまへをだつこしてやるよ、床の上へおつことしちまつたら——それつきりだだな……うふつ……畜生……

かういつて彼はその赤毛の翼のやうな口ひげをすりつけてかわいがつてやると、アリョーシュカは親父の愛撫の言葉に死ぬほどびつくりしてしまつたのと例の痛さとでますますひどく泣きだすのだ。

ブーキンのそばへ立つてゐるとひどいことになる、——頭をひきつかんで持ち上げつちまふんだ、さあ——ことだ。ばたばたしようものなら、彼の大きなまるい頭、健康なあかちやけた顏の線、木の株のやうな大きな手の動かし方をみてると、かういつてるやうだ、——

——ばたばたしねえ方がいゝぜ。ばたばたするなつたら、いふことときかねえとぶんなぐるぞ、それに——このおれがちよいとひと吹きすりやあ、てめえのわらぢなんぞふつとんぢやふぞ。

だだつぴろいのろまな顏には——丸太みたいな鼻つ柱が頑張つてゐる。その鼻の下には例の尨大なる口ひげが煙草のために黄いばんでゐる、絶えずかいでゐるのだ。齒ときたら——まるで鰐の齒だ、こゝへくるとカラワーエフなんか、——ブーキンとくらべると、まるで狼といたちだ。ブーキンはカラワーエフなんか頭からがしがし食つてしまひさうだ。あんな圖體だもの、何もかも直ぐこなれてし

まふだらう。ブーキンの眼は暗綠色のやうだが、これが時にとつて變化するのだ。いゝ氣持のときは青みがかつた灰色であまつたるい感じだが、ひとたびブーキンがかんかんに怒ると——雲のやうに曇つてきて、暗くいんさんな感じで、血に飢えた野獸のやうな慘忍さがみなぎつてくる。ごつごつしたぶつきら棒な話し振だ。ブーキンのは人間の聲ぢやない、——獸が咆えてるんだ、彼の演說はいつも次のやうなことになつてしまふ、——

——こ……こ……こ……ころしちやふぞ、こ……こ……こんち……ち……ちきしよう奴！……

——ひ……ひ……ひ……ひきつさ……さ……さ……さいちやふぞ、ば……ば……ば……か野郎奴！

ブーキンの話はいつも墓場のにほひがしてる。

要塞側にはアレクサンドル・シュチューキンがゐた。士官出だ。だが、この士官、自稱『愛國主義者』で、——何の役にも立たないくせに、始終、いばつてばかしゐる、——そして何もかも不滿なのだ、要塞の戰友たちも物足らぬのだ、彼には、どこでも何もかもみんなはがゆい程うまく行つてないきやつらうまくやつてゆけないんだな、と思はれるのだ、——

——あゝ、殘念なこつた、このおれに任せりやあな、おれこそ……

ところが誰も彼に任せてくれないのだ、といつて自分でやりこなすことはできず、——たゞうろう

ろしてるだけだ。シュチューキンは小男だ、顔は灰色だが黄いばんでみえる、眼はたえずびつくりしたやうにきょろきょろしてゐる、せかせかしたおちつかない擧動だ、話もしどろもどろだ、少し抜けた感じだ、——ひとくちにいへば、全く普通人なのだ。

後に要塞側の司令官になつたが、彼の兄弟のワーシャ——ワーシャもこんなふうだつた、——後に我々の手にとらはれたとき我々は彼のことをおいぼれだといつた。暴徒側では軍事會議の幹部だつたのだが、つまらない男だ。臆病者で、小市民根性で、しづかな生活を夢想してゐる——要塞で兄弟とおち合つたのだ。

その後、——暴動勃發當時ではなく、——少し後れて現れたのが、——チョールノフ。フェーヂカチョールノフ、要塞では彼のことをかう呼んでゐた。チョールノフ(黒ん坊)は墨のやうに色黒だつた眞黒なのだ、顔も、髪も、眉も、口ひげも、剃つたあごひげの跡も。年は——まだ三十そこそこ。歩いてるんぢやない、走つてるのだ、走つてるんでもない、圓い彈丸のあるマリみたいに轉がつてるんだ。彼は、以前、師團附屬特別部にゐて、特別委員會委員だと威張つてゐたが、いろいろ忌まはしい事をやるのでその特別部から惱まされてゐた。今や、自由の身となつて復讐の準備だ——一路特別部へ、復讐のやり方も——チョールノフ式だ！　フェーヂカは要塞の『コムミサール』だつた。特にえら

ばれて、特別部と裁判委員會の攻撃專問だ。後に、銃殺を宣告されたとき、あまつたれた小娘のやうにおいおいと泣きながら、助けを求めて祈り、よろよろとして歩けもしなかつた。ゴロツキ肌のフェーヂカは——要塞でも他の連中といつしよになつてわいわい罵り合つた。大いにあばれた。大『ふざけ』をやらかすにはもつてこいの男だ。

この他に指導者ともいふべきものはまだゐたのだが、今は彼等にはふれない、——出てきたときにいふことにしよう。今こゝに述べたのは——第一線に立つた首魁だ。それに最も色彩の鮮明な連中だこれは——指導者だ、だが指導者といふのは不適當だ——張本人とでもいふべきものだ。かういつた方が正確だ。指導者には——大見識がなくてはならん、指導者には——大計畫がなくてはならん、彼は何をなしてゐるのか、何をなすべきであるか、何をすることになるだらうかを、知つてゐなくてはならん。彼は未來を見透すことができなくてはならん。

だが、この連中は單なる張本人だつたのだ。彼等は、明日になれば彼等がゐなくても當然勃發すべき筈のものだつたことを、今日やらかしたといふだけのことなのだ。彼等は、たゞ、暴徒のほんとうの氣持をより鮮明にかつより狂暴に反映してゐたゞけのことなのだ——この意味において一般的興味があるのだ。そして、彼等はたゞ暴動をおこしただけのことなのだ。蜂起して、破壞する——彼等の

仕事はたゞこれだけのことなのだ。それ以上の思想もなければ、試錬もなければ、智識もないのだ、道は暗く明らかでない。彼等は、何のために蜂起したかは知つてゐたのだが、——それをどう處理し組織し、新しく創造すべきかは全く知らなかつたのだ。誰か他の者、もつとしつかりした——シチェルバコフとかアンネンコフとかゞ彼等を正しく指導したとしたらどうだつたらう。だが、この暴動は、指導者がなかつたといふこと、自分勝手に暴れだしたといふこと、その混亂のうちに——何ものにも干渉保護されることを好まず、自由に振舞ひたがつてゐた富農階級一般の興味を反映してゐたといふことに、その特色があつたのだ。

この張本人どもはたゞ止むをえず先に立つたといふだけのことなのだ、誰かゞ先に立たなければならないではないか、みんなが後にばかし立つてゐるといふわけにはゆくまい。そこで、赤衛兵のうちで、『富農系』だつたのが——おゝ、どんなに好んで彼等が彼等に追隨したことだらう。一方頑强な百姓は？　彼等は一瞬にしてすべてを識別し嗅ぎつけた、——馬を要塞へつれてゆき、マグサやパンを運んでゆき、みづから施條銃を手にしたのは當然のことだ、——村々を徵發してゆくものもあれば彼等とゝもに、こゝに、要塞に居殘つたものもあつた。

一晝夜のうちに要塞へ集まつたもの……五千！　大した勢力だ。同じ憤怒と同じ反抗に燃えて——

同じ欲求だ。

ペトロフとカラワーエフが暴徒を率ゐて要塞へはひつたとき——すでに何か確回たる行動計畫を立てなければならないことは明らかだつた。彼等が武器をかこんでわいわいさわいだり、走りまわつたり、要塞やその附近を監視したり、『いざ鎌倉といふ場合』どうしたらいゝかと考へたり、……もつと良い場所を考慮したり、最後の手段について相談したり準備したりしてゐるうちに、——要塞では大會が開かれた、その大會で直ちに本部を設置しなければならないといふ問題がもち上つた、——

どういふ本部だ——一時的のものか、永久的のものか？　どういふ名稱にしたらいゝか？　誰を任命したものか？　それはどういふ仕事をするべきものか？　目下町に殘存してゐる當局はどう處分したらいゝか？

大騒ぎだ、——おきまりの大騒ぎだ。チェウーソフの司令で——順々に演說だ。ウーイチッチ、ブーキン、シチューキン、その他。直ちに永久的のものを設置してはならない、一時的のものでなければならない、といふことで議論沸騰。

後に——いま臨時に地方會議を召集して、その後に——永久的のものに。

名稱は……本部の名稱は？　おゝ、こゝでまた無數の提議、——

革命的本部（レヴォリユツイオンヌイ・シユタツブ）……革命本部（シユタツブ・レヴォリユーツイイ）……山鷲隊本部……自由平等委員會……一般革命會議……革命戰時委員會（ボエヴォーイ・コミテイエート・レヴォリユーツイイ）……

喧噪をきわめた後、選定、——

『戰時革命委員會（ボエヴォーイ・レヴォリユツイオンヌイ・コミテイエート）』、略稱、——

——戰革委員會（ボエ・レフ・コム）。

だが、大多數のものは、——

『戰時會議（ボエヴォーイ・ソヴエート）』、略稱——ボエ・ソヴエート、といつた。最初の大會で可決確立した、——

——戰革委員會（ボエ・レフ・コム）。

といふ名稱を、いつかその後の大會で變更したのかどうかは我々には明らかでないが、ともかく、かういふふうに呼んでゐた。

チェウーソフが——委員長。これはすでに公表ずみのものだ、だが、これより先、小委員會が設置されてウーイチツチが委員長に選擧されたといふことだが、それは全く短期間内の臨時的のもので、大したものではなかつたらしい。

要塞側司令官もシチューキンがやるまではスココーフとかいふものがやつてゐたといふことだが、

暴徒が鎭壓される日までの本當の司令官は——アレクサンドル・シチューキンだつた。

戰革委員會にはウーイチツチ、ブーキン、ペトロフ、カラワーエフが選出された。この他にも數人のものが選出された。何をなすべきか——少しも知らない。大會後、戰革委員會は小さな部屋で開會され、種々討議した、——

目下、そもそも、何をなすべきであるか？　かうして、こゝまではやつてきたものゝ、さて、これから先、どうなるのだ？

先づ第一に、當地へ向け行軍中の第二十六、及び第四聯隊との聯絡を計ること。傳令を組織し、文書を手渡して、幾度となく——さあ、いゝか、いゝか、をくり返した。

それから——歩哨を各方面へ新しく派遣、または應援のため增派すること。

要塞軍を檢閲して、戰鬪準備をさせること。

軍事會議側の實勢力を推定すること。

各町村と聯絡をとること。

ウェールヌイ地方の交通を遮斷すること。

各種命令を公布すること。

ワシーリヤがシュチューキンの祕書となつて、雜多な提議を整理して調書を作成することになつた。その調書によつて——委託されてゐるものから實行を要求するのだ。

機械は活動しだした。……だが、彼等のところでは官署といふものがいつも輕視されてゐた、種々の指令の署名などもこんなふうに考へられてゐるのだ、——一人の委員長がゐる、その祕書がゐる、祕書のうしろには誰か來合せた者が何か說明してゐる、そして二人の者が署名する、だがもし一度に六人から八人位もがするのだつたら、その文書はすでにその少からざる重味に對しても重大な意義をもつてくるのだ。

要塞が暴徒の手に占領されたといふことが一般住民に知れわたると、各種機關は直ちに傳令、代表等をこゝへ送つてきた、——事件はいつたいどういふことなのだといふことを知り、かつは勝利者の前に平身低頭して高き手のもとに蹶起する決心をつたへて慈悲を乞ふためなのだ。例へば、健康者よりも早く——病弱者や不具者失業者代表がかけつけた、——

——かういふわけなんでごぜえまして……今日まで全くソウェート當局の壓迫ばかしかうむつてをりまするので、——商賣もさせてくれてなきや、養つてもくれねえんでごぜえまして——彈壓一本槍なんでごぜえます。で、かういふわけで、これからは——おいらあみんな且那方の味方に入れてもれ

えますだよ、やれといふことだつたら——おいらも鐵砲もつて……

戰革委員會は新加盟者を片つぱしから認めていつたので、田舍からやつてきた大きな百姓の荷車のもとに身をよせて要塞內へ移住してくるものもぽつぽつ出てきた。

それから、ウェールヌイ×××からも傳令がとんできた。

——我々は、いはゞ民族解放の戰士なんです、然るに我々は牢獄の中に閉ぢこめられてるんです——いつたい、どうしたことなんです？　コムミサールもあそこにはいろんなのがゐますが——何にもしないでゐて、金銀を懷ろにしやがるんです、だがそこでは茶碗のかけら一つとつてもいけないつてんですからね、——今すぐ×××へ——ち、ち、ち、畜生奴。……それから——あらゆる×力を振やがるんです、——顏といはず、橫つ腹といはず、どこでも、勝手に鞭で——夜といはず、晝といはず打ちつゞけなんです。……ち、ち、ち、畜生奴が!!

チェウーソフの灰色の眼が濃い捷毛のもとできらきらと光つた。憎惡のためにぶるぶる慄えた。

——今に、みてろ、畜生、どどん……どん……どん!!

戰線における聯隊幹部がよくやるやうな調子で、×××宛の指令を走り書きして、その傳令へ手渡した、——

ウェールヌイ×××宛

軍事革命會議は現××を虐待せざることを命ず、若し會議の承認なくして一名たりとも射殺さるゝが如きことあらば、嚴重に處罰さるべし。

議　長　チェウーソフ。
議長書記　（署　名）。

一九二〇年六月十二日

要　塞。

軍事會議はその後協議をつゞけて、不審な者はすべて容赦なく捕縛拘留しなければならないと決定した。どこへも脱走させてはならない。そこで、チェウーソフは、カザンスコボゴロードスコエ村落へしつかりした者を使ひとして文書をもつてやらした。その村落は、タシュケントへゆくにはどうしても通らねばならないところなのだ。

臨時カザンスコボゴロードスコエ民兵軍事委員長宛

ウェールヌイ軍事革命會議は當會議署名の證明書を所持せずしてタシュケント方面に赴かんとする者に對して全部その通過を嚴禁し、直ちに捕縛拘留、一件書類を當會議宛發送すべきことを命ず。

軍事革命會議長　チェウーソフ。
祕書　ゴルロフ。

一九二〇年六月十二日

我々の最初の代表がこゝへかけつけたときも、どうしたらいゝのか、何から話したらいゝのか、少しも分つてはゐなかつた。しばらくしてから決心したのだつた、——

——びくびくするこたあねえ、投獄しちやえ！

そこで投獄してしまつた。だが、あとになつてまた考へ直した。我々の代表から何か釣れるかも知

れないぞ、何か要塞側に有利なことをかぎだすことができるかも知れないぞ、と考へた。

極祕中に會見した。

その結果、軍事會議へ、師團司令部へその代表を派遣するといふことになつたのだ、――それが後に例の無言劇を演じものを言ふとなれば次のやうなおきまり文句をならべてばかしゐた連中なわけなのだ、――

――我々は全權を委任されてをりませんので。……我々はたゞ司令部側を鎭撫するために。……

それは代表ではなくて、偵察だつたのだ。

その後は、各種會見に際しても、一段と大膽な形式をとるやうになつた、要塞の出入りもひつきりなしだ。

事件突發の當初は、我々は、たゞ、要塞が暴徒の手に落ちてゐるといふことを知つてゐたゞけで、――もつぱら我々の勢力を鳩合し、各機關個別にでなく、全體が一團となつてあたることに急だつたまだ我々に反旗をひるがへしてゐない連中をして決然と立たしめなければならなかつのだ、――だが我々が立たしめることはむづかしく、おそらく我々に反抗して立つことだらう。そこで、我々に有望な情勢において解決しようとした、――たとへわづかでも我々が有望でさへあれば、直ちに――動員

活動開始!!

市黨部には我々は全く望みをつないではゐなかつたが、或る種の援助は期待してゐないでもなかつた。そこで、最初、地方委員會の名のもとに指令を發して(註10)黨委員會が直ちに黨員を召集して、武裝、全員軍事會議へ集合するやうに命じた。こつちから出かけていつて話しをしてゐるやうなひまはない、刻々新しい仕事に着手してゆかなければならない、刻々迫つてくる要塞側からの襲擊を豫期して、その攻擊を如何にして擊退すべきかを――至急考慮しなければならない。

(註10) この指令には地方委員會委員ウエルメニーチェフが署名した。

地方委員會の指令は向うで受取られたのだが、我々の方へやつてくるものとは考へられもしなかつた。反對に、暴徒との聯絡がとれると、直ちに、彼等はその代表を向うへ送つて、――例の戰革委員會へさへも代表を列席させるといふ始末だ。十三日早朝、全黨機關はその旗の下に要塞へ『入城』したそこでは歡迎演說會が開かれた。この青年たちは、後に、全部法廷へ立たせられ、その裏切りの故に嚴罰に附せられた。我々はこんな地方中隊に少しも期待してはゐなかつた、最大限の期待は、――それは『黨員』の受動性、臆病、事件に中立でゐてくれることである。

ところが、結果は全くその反對だつた。早くも四人の『黨代表者』が暴徒側の戰革委員會へ列席して

セミレチェンスク地方ソウェート當局の運命に關する決議に參與してゐたのだつた。彼等が如何に種々の『論證』をもつて飾り立て自己辯解をしようとも、――次のことは明白なのだ。

彼等は暴徒側だつた――我々には反對だつた。

地方委員會議長ドジャルボロフはまるで子供じみた電報を中央へ宛てゝ打つたりしたほどだつた。

當地へ援軍を派遣する必要なし……當地は平穩無事なり……如何なる暴動も勃發せず、……その他、――この種のものだ。

そして、それが、すでに要塞は暴徒の手に歸し、武器は掠奪され、『會議召集まで』の戰革委員會成立の旨がこの地方へ公布されて、從つて、ソウェート當局の實權は著しく低下してからのことだつたのだ。我々は大體の事情はわかつてたので、『黨機關』代表者なるものゝ報告は全然價値のないものだといふことを中央へ知らせてやつた。すでに十二時、暴動勃發後數時間を經たばかしの頃、要塞へは『黨員』なるものが少なからず集合してゐた、『軍事會議へ對する要求討議』の際には、――黨員たるペチョンキンなるものがこの會議の議長をやつてゐる。要塞側は十二個條の要求を決議した。この十二個條なるものを我々は後にキルギス旅團本部における會見で討議したのだ。この會見では、我々と要塞側の他に、『黨代表者』なるものが列席した。――調停者としてといふんだが、何をいつてやがるんだ、

まるで怨み言を述べに來たやうなものだつた、――特別部の即時武裝解除を要求したり、我々の一言一句にことごとく猛然としてつゝかゝつてきた。

キルギス旅團本部での會見は正四時に開かれた。相方ともかつきりに到着――道はどちらも近い。思ひ出す――あの小さな癈屋、半ばたほれかゝつたぐらぐらの門、低い天井、むさくるしい部屋、油じみた窓ガラス。よごれたぐじやぐじやの壁紙が破けてぶらさがつてゐるむきだしの壁、机は――長いからつぽのもの、まるで死人がのつけてあるやう。だが、机の周圍には腰掛がならべてある、その腰掛といふのがびつこで、何年も拭いたことのない埃だらけの床の上でぐらついてきいきい音を立てる。我々は一時にどやどやとその小さな部屋にはひつていつたので、直ぐぎつしりとつまつていき苦しくなつた。窓は少し開けた、全部あけることはならん、――この會見は『極祕』のものぢやないか、通りには市民がうろついてゐる。番兵をおいた――ドーアのところと、家の周圍と。だが熱しておもはず大聲を出すことがあるので――どんな番兵だつてそのときの我々の爭論、怒聲を戸外へもらさせないやうにすることは不可能だつた。要するに、我々は殆んど密閉された小さないき苦しい部屋の中に、まるで喫煙室の中みたいに煙草のけむりがもうもうとたちこめてゐる中にすはつてゐたのだ。おたがひに額越しににらめ合ひながら、――相手の心を見拔いて、――何のつもりでやつてきてるの

か、といふことを知らうとした。

いろいろ言ひたいことと定約したいことがあるだらうが、それはともかく實際に――この會見から何を期待してゐるだらうか？　誰が首席全權としてきまつてるだらうか？　あのペチョンキンみづからだらうか？　それとも、――あそこに、苦虫をつぶしたやうなしかめつ面をしてしきりにうろうろしまわつてるのがあるが、あれだらうか。……あれだつたら、こいつ、仕様のない面をしてやがるぞ、――卑屈な、それでゐて貧嫌な殘忍な面相だ。血に飢えた綠色の眼を神經質にきよろつかせて、何かないかと探してるやうだ。唇には性のよくない毒々しい微笑をたゝへてゐる。この種の肉慾的な淫蕩なだらりとした唇は性格の下劣さを物語つてゐるものだ。これは誰か？　ウィーリェーツキーだ。彼がいちばんはしやぎまわつてゐる。みたところ、幹部の一人らしい。

それから、あそこにゐる――はにかみ屋の小男は――まるで別人種のやうだ。……彼の擧動にもどこか他の者と調和しないやうなところがあり、物の言ひ方にもどこか控え目な内氣なところがある。これはフォミェンコ。

窓にこしかけて腕を組み、じつと冷靜な眼付きでみなのものをみまわしてゐるのは？　がつしりと兩腕を組み合せて、どんなことがあつても斷じて解かないといつた恰好だ。顏付きは……おとなし

く受働的だ。こいつは危險ぢやない。これはプロツェンコ

それと並んで窓にこしかけてじつと我々の方をみつめてゐるのは――これはいかにも眞面目で自信をもつてるらしく、馬鹿にならん。彼はこゝへはひつてくると何かぽつりぽつりしやべりだしたが、そのいふことは簡單だが筋道がとほつてゐて、何をしなければならないかを知つてゐる證據だ。こんなのは危險かも知れない。殊によると――あのいや味たつぷりのウィリェーツキーなどよりはもつと危險かも知れない。これは――ニェウロートフ。これはよし注意してゐて言ふことを重んじてやらねばならぬ。

その他の連中は？　まあ、似たり寄つたりだ。

我々は誰れ彼れの別なくだんだん少しづつ言葉をかはしだした、だが多くはどつちも味方同志で。しきりにおこる私語、――これから初まる會議の下相談だ。

開會しなければならん――もはや何の躊躇がいらう。

我々の方も人數では負けなかつた。私の外に――ポズドヌイシェフ、ビェーロフ、ボチャーロフ、ペレスネフ、パーヴロフとスサーニン（これが首席全權）、アボーリン、パツインコ、ムラトフ。これで、あとに殘つてゐるのはもう五六人しかない。そのうち、或るものは全然こゝへはやつてこないで

いろいろの急務にたづさはつてをり、また、他の或るものは、今度の會見がどんな工合に進捗してゐるかをみとゞけて、どこか他のところへ出かけた方がより有効だと思つて、その場を切り上げていつた。この會見をやりながら――次のやうな意味でアヂらうといふことになつた、――

『……こゝに集まつてる我々の利益といひ目的といひ、――まるで同一のものに思はれるんだが、どうだね。何でもこまかなことまで一致しなけりやならん筈なのだ。……我々はともに闘士であり……革命家なのだ。……我々の見解の相違はさう大したものぢやないぢやないか。だが、我々は、常に、一致することができる筈なんだ、何故なら、――我々共通のスローガンは、――『すべての××を勞働階級へ！』、等、等なのだからね。

かういふ意味の短かい演説をした。その目的は唯一つ、――彼等の敵意をやはらげようとすることなのだ。心理的に弱點のあるものを、少しでも、我々の方へ傾けさせようといふのだつた。初めから敵視してかゝることを避けて、できるだけ我々と融和させようといふのだ。……

それから議長選擧に移つた。

その結果、私が議長、ニキーチン（ポズドヌイシェフ）が――祕書となつた。これだけでも一種の勝利だ。

――では何を議題としようかね？

――あの十二個條を討議しようぢやないか、――ウイリエーツキーがいつた、――我々の要求は全部あげてあるんだ。……この他に何をやらうつてんだね。……

十二個條は聲明された。採決、――討議に全員異議なし。我々はこつちからは何も提議しなかつたどつちにしたつて同じことぢやないか、――この問題を議題としてやつていつた方が好都合のやうだ。

會議が初まつた、蜂の巣をつゝいたやうなさわぎだ、――この問題に關聯して、火のやうな反抗、憎悪にみちた叫び聲、威赫、ふるへる憤怒、拳固で机をたゝいて、――喧噪。

この喧噪は四時間もつゞいた。我々は努めて氣を靜め、問題の角立つたところはなるべくまるめてかゝるやうにした、――この場合荒立てることは全く我々の不利だ。無理押ししてもどうせだめだと知れてるやうなところは努めて讓歩するやうにした。だが、我々は實に多くのものを戰ひ取つた換言すれば、彼等の提議はかんぷなきまでにこづきまはされて見る影もないものになつてしまふのだ、我々の攻撃にあつてすつかり作り變へられてしまふのだ。たゞ、足もとのふらふらしてる提議を試みるだけで、直ちに我々の容赦ない攻撃の火を浴びて、ぐうの音もでない程にやつつけられてしまつて

次のやうな問ひに答へなければならないやうな破目に落入るのであつた、——

——諸君は革命家なのか、革命家でないのか？

——勿論、革命家です。

——諸君はいつたい勞働階級の權力の味方なのか、敵なのか？

——おゝ、勿論、味方です。——

——ふうん、ぢやあかうなつてくるわけだな……

かうして我々はこまかい論理の網で問題をからめていつた。この網にかゝつては暴徒の連中はどうすることもできないで、不本意ながらもその提議を我々の要求通りに變更することに贊成しなければならないやうになるのだつた。何故なら、彼等は……『革命家であり……人民の權利のために……勞働階級の權力のために……ソウェート政權のために闘爭してゐる』のだつたから。……

彼等はもうとつくの昔に我々を投獄してゐなければならない筈だつたのだ、——彼等の觀點からすれば、さうなるべきものだつたのだ。ところが、こゝで、ぐづぐづ交渉などするといふことになつた。しかも『合法的ソウェート陣』において。これはすでに彼等の敗北だつたのだ、何故ならこゝでは到底對等に太刀打ちできる筈のものではなかつたのだ、——いちか、ばちなのだ。ソウェート當局を承認

しないのなら、——そんならその擁獲者を捕縛、投獄、射殺せよ、若しソウート當局を承認するのなら、——我々『ソウェート當局』者の觀點からは直ちに粉碎され終るやうな誤謬だらけの無理はこれを放棄しなければならぬ筈だ。我々はいつも各問題について要塞側代表を論理的迷宮へ落し入れては彼等の行動の矛盾を摘發した。すると彼等は急に退却して、一も二もなく讓歩するか、或ひは斷然撤回に及んで——そんな筈はなかつたんだ、何か考へちがひをしてたんだ。などと逃げ文句を並べた。

怪我の——功名だ。

かうした根底のない暴動は——如何に暴動を起すべきでないかを學ぶ絶好の機會だ。

要塞側代表は腹を立てゝしまつてしきりに暴言をはいた。だが、そんなことは何にもならない、結局無駄だ。

だが、一つ我々の困つたことがある。——かうして討議して記錄するのは……それは結構なことだが、あの要塞勢全部がこゝでしやべつたことに承服するかどうか？　おゝ、否、——あゝ、望み少なし。あの戰革委員會と稱するものからしてが、第一、單なる名譽職にすぎないもので、萬事要塞大會で決するといふことではないか。……かうなると、我々の決議が要塞大會で『萬場一致』可決採用されるといふ望みがどこにあるのだ！　おそらく、全部空文だ。……だが、ともかくも、なすべきこ

とはなさねばならん。そして、我々は、熱心に、執拗にはこんでいつた。

第一條。——

脫走者、並びにセミレチェンスク存在の白系士官に關する件。

この項は大して手間どらなかつた、——まづ滑らかにはこんだ。種々の問題に關してそれぞれの『說明者』がゐた、尤も後になつて、ひどく興奮してくると、各自競つて我先きにと發言を求めて、束になつて吠え立てた。

——……あの士官連はどういふわけで自由にしてあるんです？——彼等はわめき立てた。——ソウェート當局はあんな士官を勤務させるべきものではないです。コサツクの士官殿を兵站部で働かせて、それで、我々は貴殿方に給與をつかはさう、生活は保障してつかはさう、……なんてのが——ソウェート當局のやるべきことなのですか？　全部卽時投獄せよ——これが要塞側の要求なんです、もし投獄しないときは我々自身でやります、きやつといつしよにこゝにゐられる諸君も全部投獄します……我慢ばかししてられない、何もかも我々自身で諸君の手をかりないでやつてのけます。もしも、その士官連を釋放するために教官でもやつて來ようものなら、——それこそどうにも我慢できない結果になるんですよ。……

——君たちは、何をいつてるんだね、——我々は大膽に切り込んでいつた、——何も問題はありやしないぢやないかね、——あの士官連は君たちにとつても、また我々にとつても決して同志ぢやないぢやないかね。

——いや、ちがふ、君たちにとつては同志ぢやないかね、だつて……

——いや、さうぢやないんだよ。……問題はそんなところにあるんぢやないよ。

——欺されてやしないぞ！——ウイリエーツキーが急に毒つきだした。——君たちの兄弟だか兄弟でないかためしてみようぢやないか。……議論の餘地なんかありやしないんだ、——もし君たちにとつて同志でないつてのなら——直ちに投獄——結局、あんな犬ころ野郎は射殺してしまふがいゝぢやないか……

一見、これは非常に革命的だ。彼等の本音を知らないで、その言ふことだけきいてをれば、如何にも我々の敵の擁護者たる士官連に對する明瞭な階級的憎惡があるやうに考へられるかも知れない！だが、問題はそんなところにあるのぢやないんだ——この問題の影に要塞側首領達が身をかくしてゐるだけの話なのだ。こんな問題は他にも二三あつたのだ、だが、主要なことは全くこんなことにあるのぢやないのだ、主要なことは——パン專賣、ソウェート絕對××、特別部、裁判委員會、その他のこ

とだつたのだ。――尤も純粋の富農系ばかしではなく、廣汎なる範圍にわたる赤衛兵たちの中にもこの士官に對する憎惡は――實際にあることはあつたのだが、そんなことだけからあんな暴動などといふ大事件がもち上つたなどといふことは勿論ない。

――あんな奴を自由にしておくなんて、――要塞側はわめき立てた、――いつたい、どうしたわけなんだね、え？

――だが、我々はあの士官連を白軍全體といつしよにコパルで捕縛したものぢやないかね、このことを君たちは忘れないでくれ給へ。そしてその引渡の際――議定書の諸條件に署名して、決して嚴罰には處しない旨をソウェートの言葉として誓つたのだ、……それなのに、いま、君たちのいふことをきいて裏切るなんてことは？　だが、そんなことをどうしてする必要があるんだね？　我々はすでにその一部分はタシュケントへ護送してしまつたぢやないかね、殘部は除々に護送してゆくつもりなんだよ。……それに、あの士官は、農業家となつて土地委員會で働いてるんだ、そして君たち農民の事業を後援してるわけなんだ。……今日直ぐあれを免官するとして、明日から誰を代理とするんだね？　近々中央から黨の役人がやつてくる筈なんだ、そのときにはそれと引替に、士官の殘部全部をタシュケントへ追放することにしよう。……

――その、黨の御役人といふのはよろしいが……そのときまではどうしてくれるんだね。……要塞側は即時免官を要求してるんだが！

――だが、全部一度にといふわけにはゆかんよ、――我々は仕事をぶつこはしてしまふなんてわけにはゆかんからね。こゝしばらく少しの間でいゝから形勢を觀望させてくれないかね。いや、……いや、ぢやあ、かういふことにさせてくれんかね、――君たちには、おそらく、特にひどい士官連、――つまり白軍で特に猛烈に活躍した連中の名前がはつきりわかつてることゝおもふが。……その名前を認めて要塞側からとゞけて來るといふことにしてくれ給へ、すると、我々はその名簿によつて、その連中は即時護送する、その他の連中は――仕事をぶつこはさない範圍で、除々に、かたづけてゆくことにする……といふことにしちやあ、どうだね？

折衝、折衝、――討議終了。

師團附屬軍事委員會はすでに責任ある指令を發して、守備隊側代表によつて提出さるべき名簿の示す全士官を取急ぎタシュケントへ護送し、更にその他の者全部に關しては、候補者確定次第その軍事行政官職を免官せしむべきことを期す。

第一條はこゝに決着。第二は、――

戰利品武器の利用及び配給　一般住民への供給可能の件

一般住民を武裝させようなどと、——彼等の目的がどこにあるかに注意せよ！　我々は、最近、嚴罰主義の下に一般住民からの各種武器引渡しの嚴命をこの地方へ公布したばかしではないか。

全くその反對なのだ。

——何故一般住民が日常武裝してゐなければならないかといふと、——ニェヴロートフが確信ありげな調子でもの靜かにいつた。——百姓がもし敵に出會つたやうな場合にはどうしても旋條銃がないといけないからな。

——その敵といふのは何だね？

——何だつて敵全體さね、——コサックも油斷はできないし、それにまたキルギス人もね。……

——だが、キルギス人にもちつとも武器はありやしないぢやないかね、——武器は全部我々の方へ引渡されなけりやならんのだ。……

——キルギス人だと？　キルギス人ていつたい何だい？　ウイリエーツキーが急にどなりだした。

——貴樣はおれをキルギス人とおんなじに視てやがるんだな？　ちえつ、貴樣は——このおれを何だとおもつてやがるんだい？　おれは六年間も軍隊に勤めてきたんだぜ、血の出るおもひで勤めてきた

んだぜ、そのおれをキルギス人などとおんなじに視ようてんだね？　なあに、どんなことがあつたつてそんなことをさせてたまるもんか。……この前は士官へ身賣りしやがつて、こんどはキリギス人へ身賣りしようてんだらう、きやつらを武裝させておいてこのおいらにや武裝は許すめえつてんだらうかうしてもいけねえ、あゝしてもいけねえ、手も足も出ねえやうにしようつてんだらう、勝手にしやがれおいらはおいらで勝手にやる、貴樣らの世話には死んでもならねえやい……

——ウイリエーツキー、貴樣のいつてることたあちがつてるぞ、——フォミェンコが口を出した、——今はキルギス人のこたあ問題ぢやないぢやないか、今は全體にわたつて武裝解除をしようてんぢやないか。……

ニェヴロートフは敵意にみちてフォミェンコをにらみつけながら、急いでさへぎつた、——

——何をいつてるんだ、そんなこたあ誰もたづねてやしないんだよ。要塞側の要求するところはだ師團司令部には多數の武器がある筈だから、それを一般住民にわけてほしいつていふんだ。……我々はそれを分捕つたんだから——我々に引渡されるべき筈のものだつていふんだよ。……

——キルギス人へやれつてんぢやないんだぜ、——ウイリエーツキーが憎々しげに口をはさんだ。

——わしのとこには武器といつたつてちつともないよ、——イワン・パンフイールイッチ（ビェーロ

フ）がはつきりといつた。――大して在庫品はありやしないよ。全く誤傳だよ。だが現在程度の在庫武器は仕事をはこんでゆく上に絶對に必要なんだ、このわしが師團長をやつてる間は、――あの武器を持ち出すことは絶對に許さん……

ビェーロフのこの斷然たる態度は二樣の反響を呼びおこす可能があつたわけだ、一つは――暴徒側の激昂をかつて最後の手段に出でさせるかも知れぬこと、いま一つは――これとは全く反對に、これ以上の反駁を制止することができるかも知れぬことだ。結果は、我々の方に有利になつてきた。

――武器がない？　ちやあ我々の方で點檢したらどうする？　そしてみつかつたらどうする？――

ニェヴロートフが嘲笑した。

――もしみつかつたら、そりやあ、諸君のものさ、――パンフィールイッチは、微笑ひもしないで、眞顏で答へた。だが、このことだけはよくおぼえて〻くれ給へ、――わしはこれまでに一部隊を武裝させておいたからな、――それまでに武裝してたのは、みんなこゝへやつてきたわけなんだから。……それで、點檢すべき何ものもないのに、點檢しようにも點檢のしようがないぢやないか？――

彼はちよつと默りこんでた後でかう附加へていつた。

どうせ探したつて何にもみつからないことはわかつてるのだが、ともかくそれに關する委員會を設

置してはどうかと提議した。彼等はやむをえず贊成した。決議事項、――

若干在庫武器に關しては、師團長は該武器をもつて一部隊武裝の方針を採れるも、同志ニェヴロートフ、ハリトフ、プロツェンコ三名より成る委員會を設置することに決定せり、委員會はこの問題に關しトルキスタン第三師團長との交渉を委任せられたるものとす。

決議事項にあたつては、彼等があくまで頑强に主張する部分は適時修正を加へていつた。このことは彼等の激昂を靜めることになつたし、更に、彼等自身の主張が肯定されたやうな印象をあたへることになりさへした。

だが、さうしたことで我々の失ふところがどれだけあらう？

第三條、――

赤衞兵の軍裝完備の件。

この問題は全く事務的なもので侮辱的なものではなさゝうだが、――實際には、彼等はこの問題に關して、我々は全く强盜同然で自分ばかし完全な軍裝をして赤衞兵はまるはだかにしておく、赤衞兵を種子に私腹を肥やしてゐる、赤衞兵はまきあげられる一方だ、いはゞこのために今度の暴動も惹起されたのだ、と主張してゐるのだ。――

我々は更に進んで、我々を如何に待遇すべきかを示すだらう！

我々はあらゆる否難攻撃を浴びながらも、强奪したなどといふことは絶對にない、もしあつたら——嚴罰に處する旨をちかつた。我々は中央からの指令に調印したのだ、『この中央からの指令には絶對服從しなければならぬ』といふことを要塞側をして承認せしめた。……もしひとたび中央を承認しないといふことになつたら、諸君は如何にしてソウヱート當局の擁護者だと言ふことができるか？

第三決議事項、——

軍事會議は赤衞兵軍裝至急完備に關し非常手段を採ること、尙それに當つては均等に支給さるゝやう配給關係諸機關を監視すること、但し上司及び同志を滿足せしめる意味において——中央より達したる現在の指令絶對支持、違反者告發を條件とすること。……

次の第四條はこれと類似したもの、——

赤衞兵の食事改善の件。

こゝでも、また、お定まりの泥棒よばはりだ、『君たちは、おそらく、ソーセージをくつてることだらうが、おれたちにはパンもくれやしない……きつと搾るものと搾られるものがあるに相違ない、みんな寄つてたかつて赤衞兵のものを盜んでるに相違ない』といふのだ。……

こゝでも少からず惡口をたゝかれたがかなりの結果だ。——

現供給關係諸機關、及び食糧配給機關は、赤衞兵の食物改善、殊に陸軍病院の賄改善のために出來るだけ敏速にあらゆる方法を講じて、最も決定的にして(?)革命的なる改善をなすこと、第三師團附屬軍事會議はその實施狀態を監視すること。政治部委員は經濟統制會議援助をその職務の一部とすること、かゝる機關なき地方においては速かに組織すること。

討議事項は全部で十二個條だ。彼等は、かうしてつみのない『法律』問題に沒頭していつた、まるで今度の暴動を惹起させた根本問題はわすれてしまつたやうだ。殘餘の問題は前二個條と同種のもので——一種の飾りだ、眼をくらませようといふのだ。

第五條はもうつけたりだ、——

豫審または公判、並びに禁錮中の赤衞兵の全事件をその陳述書に從つて調査せしむる件。

この問題はごらんの通り全く別種の問題だ。

陳述書に名前をつらねてゐない連中が果してゐるだらうか？　首魁連は眞つ先きに載つてゐる。裁判委員會と特別部とに睨まれてゐないもの、かつて御世話になつたことのないものが——果してこゝにゐるだらうか？　ペトロフ、カラワーエフ、ウーイチッチ、ブーキン、ウイリェーツキー……全

部、亂暴をはたらいたおかげで……

こんなわけでこの問題は多分に『個人的』な色彩をおびてゐるのだ、——特に注意して討議せねばならん。

——おいらあ、——ウイリエーツキーはいつた、——貴様らの事件に對してはちつともくちばしを入れることができんのだ、おいらあこれからいま捕縛されてゐる連中を要塞大會の席へひつぱつていつて、赤衛兵自身でいろいろ調査しようてんだ、——有罪か無罪かね。……それがすんだら直ぐ放免だ。……いま直ぐ要塞へつれてゆくつもりだ。……

——いや、それは、君、ならんぞ、——我々が口を出した、——そんなこたあできんぞ、そんなもなあ裁判とは受取れんからね。え、いつたい、五千といふ群集が一ぺんに或る事件の調査にとりかゝるなんてことがどこにあるかね？　たゞ騒ぐだけだよ——それつきりのこつたよ。……

——貴様らの知つたこつちやあねえ、——要塞側の誰かゞどなりつけた、——おいらあおいらでちやんと裁判のやり方ぐれえは心得てらあね、何も貴様らに教へてもらふこたあねえや。……

——だがね、よくきゝ給へ、守備隊なるものが罪人を裁判するといふことは——全く無意味なことだよ。……誰にそんな全權を委任されたんだね、誰にそんな權利をあたへられたんだね？　ねえ、君

たちは、裁判機關といふものはたえず一定の場所で一定の人に選定されてゐるものでなければならんといふことを、自分でもよく分つてゐないんぢやないかね。……今日は守備隊が裁判する、明日は——臨時市民大會がやる、そのおつぎは農村、とくるかも知れない——彼等も裁判をやつてみたいかも知れないからね。……ところで、君、こんなことをやつてそれが裁判といへるかね？　畜生に笑はれるよ。そして、また、君たちにしてもさ、誰がいつたいそんな假裁判なんてものに出頭するものかね？……

——何が假だ、我々自身の……國民裁判ともいふべきもんだ、——執拗な反對だ。——それは我々自身のだ、君らの裁判委員會、——あれはいつたい我々に何をしてくれたかね？　銃殺する一方だ、我々の兄弟を銃殺する一方ぢやないかね……

——さうだ、銃殺してるよ、たえず銃殺してるよ、——我々は相手へのしかゝつていつた、——だが、その銃殺してるのは、君たちのいふやうに、「兄弟」をやつつけてるんぢやないよ、我々の敵をやつつけてるんだよ——ブルヂオア、白軍兵士、ゴロツキなどだ。……ところが、君たちは、それを『兄弟』だつていふんだが、恥づかしくはないかね！何だつてあんな連中が君たちには兄弟なんかね?!!

そりやあ、あれだよ、尤も——裏切者やゴロツキの中にも、我々の兄弟、勞働者や農民、キルギス人

コサック、そんなのがゐることもある——そりやあ、否定しやしないよ、——だがそんなこたあどつちにしてもおんなしこつちやないか？　とにかくだ、そんな裏切者やゴロツキは、君たちにしたところで、憐れんでやつたり、銃殺しないでほつといたりするかね？

要塞側はすつかり困つてしまつた。靜まつた。

我々はつゞけた、——

——また捕縛されてゐるもの〻中には、そりやあ、いろんなのがゐるよ。中には全く偶然に捕縛されたといふやうなのがゐるかも如れん、大いに有り得ることだ。

——それに無罪なのが……

——さうだ、無罪なのも、——我々は贊成していつた。——だが、それ以外は——有罪の奴だ。ところでだ、がその無罪なのと有罪なのを、ふるひ分ける者がなくちやあならん、——要塞にゐる者がみんないつしよになつて寄つてたかつてそれをやるといふわけにはいかん。何かその專問の機關を選定しなきやあならん。そのために選定されたものが、——例の特別部と裁判委員會といふものなんだ……

——何だと、裁判委員會なんてた〻きつぶしちやへ……——また反對だ。——あんなとこにゐるや

くざ野郎は絞めつ殺しちやへ……銃殺したことしきやあ知らねえ……

——君、君、我々は何を論爭してるんだ？　あの機關はどんなことがあつてもつぶれるなんてこたあないぞ。……ひとたび中央に承認された以上は、どんなことしたつて君たちにた〻きつぶされるなんてこたあないぞ、それに我々が君たちと〻もにその中央の決定に從ふ者を決議したのはたつたこの間のことぢやあないか。……た〻きつぶすなんてこたあできないが、たゞ改造することはできるんだ……新しい委員を追加するなんてえこともできるわけなんだ。……そして共に……

——いや、おれたちの、ひとくちにいへばだ——おれたちの裁判委員會を要塞に設置しようてんだ……

——いや、いや、——我々は斷乎として應じない、——自分勝手の裁判委員會ぢやあない、現在ある奴を改造すりやいいのだ……

——一年は待たせるぜ、こ……こ……こん……ち……ち……ちき生奴……

——いや、一年なんてこたあない、そんなにやあかゝらないよ。……だが、無闇に手つ取り早くできるとも——そりやあ、保證できんがね。……だが、ともかく、うんと急いでやるよ、急ぐやうに命令するよ。……

遂に、決定。——

特別部及び革命裁判委員會は至急赤衛兵に關する諸事件を調査すること、更にその調査にあたつては法定期間内に完了すべく努力すること。

第六條、——

事務澁滯及び形式主義排斥の件

これは、全く眞面目なソウヱート的問題だ！　ボリシェヴィキーにしてこの『事務澁滯及び形式主義』には反對しないものがあらうか？　要するに愉快な進言なわけなのだ。

ところが、それを討議しだすと——たまげたものぢやないか、こんなことになるのだ、——

——役所なんかへゆくこたあねえ。……ひとことも物なんかいふこたあねえ。……どこもかしこも形式一點張なんだ。ところでおいらあ自分の仕事にとりかゝらなきやあならねえんだぞ。春だぜ。おいらあ畑の手入れをしなきやあならねえんだ、ところが、どつこい、軍隊は手離なさねえときてる——

——お許しが出ねえ。……こりや何だい——これが秩序つていふもんですかい？　ところで、畑は荒れ放題。……おいらあもうコサックをやつつけちまつたのに、何んだつて、こん畜生め、てめえらはおいらを手離さねえんだい？……

『形式主義』排斥といふのは、結局、かういふことなのだ、——

——軍隊に歸休をあたへよ！

『一般的』決議。——

事務澁滯及び形式主義が我が共和國の惡弊なることは相方とも認む。黨委員會、勞働組合その他責任ある官吏はこの惡弊に落入らざるやう注意すべし、尙、違反者は告訴せらるべし。

第七。

或る種の官廳へ出入する際に要する許可證の件。

これは、一見、別に何も不穩な條件ではなさゝうにみえる。それに問題自體が第二義的だ。だが、彼等は、このへんではもう論爭も何が何やらわからぬほど混線してきてゐるのでむやみやたらに惡罵を放つたりデマをやつたりし易くなつてゐたので、大いに活氣づいて露骨に毒つきだした。——

——赤衛兵の野郎、貴樣なんかあどこへいつてもいかん、——司令部へゆくつてのなら——許可證をもらへ、裁判委員會へも——許可證。……何だつてあんなものが入るんだ、てめえらはどうかしてるぜ。……おいらがどこへゆかうたつて……

——許可證なしにはどこへでもいつてはいかんてのは、君、……全く何でもないこつちやないか。

……君たちが戰線にゐるとき――君たちは誰でも、本部へはひつてゆけるではないか、そこでは司令官が戰鬪命令を用意してゐる。……その命令に君たちの生命がかゝつてるんだ。……何もかもそこがもとなんだ。……それなのに、ひとたび、許可證なしに誰でも勝手にはひつてもよいことになつたら――どういふことで白軍の奴がはひつて來ぬとも限らんぢやないか？　そしてその命令を盗むなんてことがないとも限らんぢやないか、あん？　君たちは、どう考へるね、そんなことがあるとは思へんかね？

――そんなこたあちつともある『とはおもへない』よ、――ウィリェーツキーが毒ついた、――白軍の野郎なんてすぐわかるこつちやねえか。……

――いや、中々わかるもんぢやないよ。……全く氣のつかぬやうな恰好をしてやつてくるからな。……それでもう何もかもおぢやんだ。……これは全く油斷のならぬ恐ろしいことだから官廳出入の件は斷然嚴重に取締らなけりやならん。――どなたもお出入り御勝手なんてこたあ……斷じてできん、どんなことがあつてもできん、――第一、我々の身も危ない。勿論、許可證なしに出入自由なところもあるが、たとへば衛生局や社會保險局……

――それもてめえらだけの、……

――さうぢやない、さうぢやない、ちよつと待つてくれ……

――てめらは何時でもその手だ、さうぢやない、さうぢやない、――要塞側がさへぎつた。――何か事件さへあると――てめえらはいつでも、『さうぢやない、さうぢやない』つてやがる、『さうぢやない』どころぢやない、『どうにかしなきやならねえ』つてときによ。……

折衝、折衝、――結局、罪のない決議、――

或る種の官廳、司令部、裁判委員會、その他に對しては許可證絶對入用なることを望む。

但し、不必要なる官廳に對しては許可證廢止のこと。

第八條と第十條とはいつしよに討議することに決定。

革命裁判委員會が被告取調べに際して適用しつゝある脅迫形式は許容されるべきか？

ウェールヌイ地方以外如何なる處においても存在し能はざる如き特別部または革命裁判委員會の諸機關の言語に絶せる言動及び苛酷なる判決に關する件。

特別部におけるが如き性質の刑事は根絶せしむべきこと。

かうした最も不逞な性質をおびてゐる問題について、急に、『黨委員長』――ペチョンキンが立つて說明しだした。『惡魔の如き』我々の刑事、裁判委員會の綱紀紊亂を攻擊した後で、次のやうにきめつ

けていつた、——

——特別部や裁判委員會を武裝解除せよといふ要塞側の言ひ分は全く正しい。……武裝解除してしまつて——どつかへ追つぱらつちまへ！……

『黨員』がこんなことをいつてるのだからその他の連中は推して知るべしだ。

この問題は大へんな騒ぎだつた。ウイリエーツキーがいちばん頑張つたやうだ。

——裁判だと？　あれが國民的な裁判だつてのか？　へん、あんなのがソウェートの政權つてのか、地下室へぶちこんどいてピストルをこめかみへ附きつけて、白狀しねえか、この野邸、犬ころ奴白狀しねえとぶちころしちまふぞ？　つてのが？

——何だと、そんなことがどこであつたか、言つてみ給へ。

彼をさへぎつてわめき立てた。

——到るところだ！　——ウイリエーツキーは昂然と。——到るところでおいらの兄弟はおどしつけられたり强問にあつたりしてるさ。……訊問といふことは、てめえらにいはずと、ピストルをこめかみへ附きつけさへすりや、それでいゝつてのかい、あん？　そんなことをやるのが訊問つてことかいあんなろくでもねえ訊問官こそやつつけちまはなきやならねえのに、そんな亂暴者奴が却つて赤衛兵

を苦しめるなんて……誰がどんなことをされたか、今にみんなに知れ渡ることなんだ。……

要塞側は大騒ぎだ、またしては景氣附けの野次をとばして、ウイリエーツキーにけしかける、ウイリエーツキーはさうでなくともいゝ加減上せあがつてしまつて、まるで無中でわけのわからない罵詈暴言を浴びせかけてゐたのだ。ますます頑强に誰か見えない敵を威嚇してるのだ。——

——こんな訊問は何もかもおいらで變更つちまはう……

——だが、何時、どこで、誰がそんな訊問のやり方をしたつていふのかね？

——そ、そのためにどこだなんてこたあ、——ウイリエーツキーは答辯を回避した、おいらあ知つてるさ、どこだなんて……みんな知つてるさ。……

——だがね、こゝで何も我々と言ひ爭ふことはないわけなんだよ、——我々は怒鳴り屋をなだめていつた、——さういふ訊問をやつたやうな場合には我々がまつさきにさういふ不心得者を革命裁判へ引渡してゐるぢやないかね、え？　だからさ、その名前をいつてみ給へ、……言つてくれ給へ。……

ところが誰も名前をあげるものがない、その代りに他のことを、刑事のことをがやがやいひだした

——

——赤衛兵は擊たうにも鐵砲も何も持つてやしねえ、ところが裁判委員會にはうんとこさかくして

やがつておいらの兄弟をぶち殺してばかしゐやがる。……赤衛兵の奴等はどこへもいつてはならないぞ、靜かに、刑事が巡回するためにだつてやがる。……それだけぢやあねえ、一般住民のならず者まで武器をもつてやがる。……どいつもこいつもみんな武器をもつてやがる、それでゐて、このおいらあ戰線で擊たうにもろくに鐵砲も持つてねえときてる。……××だの、×××だの、あんな連中は今にも直ぐ追放しなきやあいけねえ、ちよつとの間も我慢できねえ、そしてその武器を赤衛兵へ引渡せつてんだ、要塞へ……

こゝでも『黨員』のペチョンキンが口を出して、特別部と委員會の武裝解除を要求した。形勢嶮惡。『支持』を豫感して、要塞側はますますいきり立つて、自已の要求を斷乎と主張した、あらゆる罪惡を數へ立てゝ我々を否難し威嚇してくるのだ。我々はまた我々で自已のアヂ的才能を百パーセントに發揮させて、『革命家の良心と理性』とへ呼びかけた、そしていちいち要塞側の提議を顚覆させて、つひにかなりの結論に到着した。

だが、またしてはいろんなとりとめもないことを申出た。——

——特別部と裁判委員會の奴を即時檢束しろ。

——特別部長と裁判委員長は——要塞側の裁判へ廻せ。

——この會見を打ち切つて、こゝからみんなでそこへ押しかけて、みつけ次第武器はみんな要塞へ持つてつてちまはうぢやねえか。……

全部この種のものだ。だんだんひどいことになつてくる。この條の決議、——

同志ウイリエーツキー及びベレドコフの參加せる特別武器問題調査委員會は、——その調査方法として革命裁判委員會の仕事と聯絡をとり、ソウエート政權を汚辱せる破廉恥漢の姓名を報告すること。

かうしたひどい問題に對してこの決議は——全くひろい物だ。我々は、更に自信を得て、勢ひづき次の第九條へとまつしぐらに。——

憲法に依據する代表的ソウエート權力機關をセミレチエンスク諸地方に至急樹立すべきこと。

いつたい、こゝでは、問題の本質はどこにあるのだ？　勿論、——『憲法に依據する』などといふところにあるのではない。……この言葉はたゞソウエート振るために附加へられてるのだ。——この地方の諸機關はいづれも最も忠實に『憲法に依據』して作られてるのに、我々に突掛つてくるといふのはどうしたわけか？

事の本質はかうなのだ。

セミレチェンスク地方は、絶えず、戰禍におびやかされて、戰時狀態だ。戰線附近または戰亂地方においてはどこでも行はれてゐるやうに、代表的ソウェート機關ではなく、革命委員會が設置されてゐるのだ。整理にあたつては、勿論、——代表的ソウェート機關の組織は我々にとつて當面の仕事だ それが、實際に、憲法に從つて自然の秩序として實現されるのももうさう遠くはない筈なのだ。だがその代表的機關を設置する前に、まづ、その下準備をしなければならないのだ。我々は、まづ、農民コサック、土民から富農及び投機業者層をふるひ分けなければならないのだ。

これは、殊に、セミレチェンスクの如き未開地方では全く大事業なのだ。しかるに、こゝで、我々にこの下準備を完了させる期間をあたへないで、今たゞちに、急に、『憲法に依據する』代表的機關を設置しようといふのだ。政權にありつけるかも知れないと想つてゐるのだ。

富農階級は法律的權利を獲得しようと熱望してるのだ。我々がこの問題に對して猛然たる抗爭を開始した所以だ。——

——この要求事項は、即時に、少くとも一週間以內に實現するといふことは斷じてできん。……それに——中央の承認も得なけれりやならん。だが、このことなくとも、この地方會議は非常に注目せられてるのだ、諸君の要求はむしろ遲かつた位だ。……

——人民を苦しめる一方だ、——要塞側はこれに答へて。——てめえらにやつて貰ふ義理なんかありやしねえんだ。百姓は自分自身でやつてかうつてのに、てめえら勝手にいろんなならず者をよこしやがつて、——あんな野郎が何の役に立つでえ? 自由つてもなあみんな欲しいんだぜ、百姓だつて自由が入るぜ、それなのに百姓にや息をつぐひまもくれねえぢやあねえか、たゞこきつかふ一方だい、誰だつて欲しくねえもんがあるかい、そんなのにほんとうの政府つてもなあねえんだからな。……もう、この上は、おいらあおとなしく待つてるなんてこたあしねえぞ——おいらあおいらで政府を作つてみせるぞ。……

——いや、さういふことはどうしてもできないんだよ、君。——我々は說明してきかせる。——もうとつくの昔に代表的地方委員會が創設されて仕事をやつてるぢやないか。……今度は、何だ? もう直ぐなのだ——何もそんなに騷ぎ立てるこたあないぢやないかね。……

折衝。かなり骨折つて次の決議。

二三週間のうちに諸種地方會議が召集され、代表機關設置の件を討議するに付き、その諸會議はトルキスタン中央執行委員會と種々交涉すること。

第十一條。——

銃殺廢止の件。

簡單明瞭。——

一般に銃殺廢止、——誰がどんなことをしても！

反抗、侮蔑、威赫、否難、——狂ほしい憤怒の呪ひ、——

——よくもそろつてならず者だ。……裁判委員會にかくれてやがる。……銃殺ばかししやがつて……儲けてやがる……おいらあ血ばかし流してる。……裁判委員會を根こそぎたゝきつぶせ。

だが、この問題の——我々の解釋は、——

——勞働者農民の犯罪に對する刑罰は輕くするのがほんとうだ。……そりやわかつてる。だが、白軍兵士の場合は、これを危險のまゝ、そのまゝに捨ておいたら、度重つて我々の善良な同志は倒れてしまふやうなことになるかも知れない、それにどこの村もみんな無殘な燒野原になつてしまふかも知れない、——それなのにまだやつこさんたちを容してやらにやならんといふのかね？

これには、絶體絶命、ぐうの音もでない。

次のやうに可決確定、——

革命裁判委員會、特別部、及び非常委員會は、反革命家は嚴罰に處しつゝも、勞働者農民

の判決言渡しに當つては特別の注意を拂ふこと。

そして、つひに、最後の第十二條、——

リエブシンスク地方及びその避難民救濟事業に對して斷乎たる方針を樹立すべし、また同樣に綱紀紊亂その極に達せる同地方特別部代表を召喚すべし。

これは、もう、まるでたわごとだ。——

彼等はリエブシンスク地方救濟の實際については何一つ言はない、そして、たゞ、その飢饉地方において掠奪、暴行をほしいまゝにするといふ特別部の代表のことばかし懸命にしやべり立てるのだ。

——一つでもいゝから事實をあげてくれたまへ、——我々は賴んだ、——此の眼で見たといふ事實があれば、そんな無賴漢は我々が進んで銃殺の重刑に處してしまふから……

ところが、事實といつては一つもないのだ、たゞ他のことを無意味にがなり立てる一方なのだ——

——コサックの奴があばれやがつて——おいらあひどい目にあつちやつた！　そのコサックの奴をやつつけつちまつたら——またぞろもういつぺんひどい目にあへつてやがる！……これが正氣の沙汰かい？　おいらの家の者は——まるで我鬼だあな。てめえらにいはせると、何も大食したがつてもねめえてやがる、何をいつてやがるんだい、こゝぢやあともかくちつとは食にありつけるが、あの我鬼

どもぁ——食はうにも食ふもんがねえぢやねえか、畜生……

——いや、そんなこたあない筈だよ、そんなこたあない筈だよ、君、——我々は説明した、——飢饉地方ではもうとつくに我々の專問委員會が活動を開始してる筈だ。……

——何だい、その委員會つてなあ……

——さういはないで、君、ちよつと待つてくれたまへ……

——何を待つんだい？　そんな委員會なんてえものに何か御利益があるつてのかね？

——御利益？　あるさ。——我々がすでにその地方へ引渡したパンは相當の糧に上つてるよ、君たちはたゞ知らないだけなんだよ、或ひは知らうとしないだけなんだよ。……それにあの道だ——水つ氣のない熱砂だ、魔の道だ、あれを君たちは知らないのかね、……食はさうにも食はすものがない、そのために我々の一隊の馬は飢え死にしちやつたんだぜ、とてもたまらなかつたんだな。……そこで、我々は駱駝を手に入れて——今ではその駱駝に運搬させてるんだよ。……これも君たちは知らないのかね？　ねえ、君、否難攻撃しようとすることがあつたら、まづ、そのことを十分に理解してかゝらなきや駄目だよ。……この地方ぢや、にわかにやらうつたつて實際が出來ないんだからね。……

——ところが、このおいらあ、いま、にわかにやつてもらはねえと氣がすまねえ！

——今、直ぐ、至急にあの地方へパンをもつてつてやらなきや駄目だ、そちらの配給部にあるのを全部配附することにしようぢやねえか、おいらで持つてつてちまはうぢやねえか……

このことには反對する理由もなかつたので、次のやうな罪のない簡單な決議に賛成した、——

地方軍事革命委員會、及び社會保險局は、近く、疲弊せるコバル及びリェプシンスク地方における食糧配給を重視すべし、同様に同地方より當市へ來れる避難民の生活を保障すべし。

……

近々のうちに保障する！

言ふは易いが、我々はすでに、もう幾週間ものあひだ、この仕事に全力をつくしてるのだが、中々それができないのだ。

この地方で——近い内に！

ぢやあ、よし！　かうしたほんとうに眞面目な仕事については少しも變更する必要はない。

全十二個條討議終了。

——では。諸君、我々がこゝで討議した結果を要塞側へつたへてくれ給へ、また、特に、この上何か不滿なことがあつたら、さうした紛爭は全部解決しなきやならない、そして急遽要塞を解散、それ

ぞれ兵舎へ引上げなきやならない、そして今我々が協定したところに從つて友好的な協同事業を開始しなきやならないのだ。……

議定書へ署名し給へ。

――だが、尙、この協定事項は全部必ず實行する旨を誓約してくれ給へ、――ニェウロートフが主唱した。――こゝへ、その議定書の末尾へ追記してくれ給へ。

同僚は彼を支持してさわぎ立てた。

しばらくして彼が指定した、我々は追記した、――

『第三師團附屬軍事會議は以上全事項實行の旨革命家の僞らざる言葉を以て誓約す。』

そしてその下に署名。――我々と要塞側。我々は熱誠をもつて進んで署名した。かつ何等含むところがあつたわけではない、この決議によつていくらかでもセミレチェンスク地方に利益をもたらし得るなら――我々はよろこんでその實現を期し、この事業に參與する用意をもつてゐるものだ。

この『僞らざる言葉』といふ字句は我々にとつて如何なる意味のものか？　勿論、これに盲從しなければならないといふことはない。たゞ一時の便法だ――それ以上のものではないのだ。

もしその實行によつて當地方の秩序を亂すやうなことがあつたら――何もそれを偶像視して絶對支

持しなければならないといふことはなからう？

會見は終つた。別れた。だが、勿論、我々はこれで何もかも片がついたものとはおもはなかつた。あの代表と議決と――全體としての要塞とは、全く別物なのだ。果してあの代表のいふことを眞面目にきくかどうか。あの代表は――全く第二義的のものなのだ。要塞側には一人として眞の統率者なるものはなかつたのだ。

こゝへやつて來たときと同じやうな深い不安をいだいて、別れていつた。

我々がキルギス旅團本部で暴徒側と會見してゐる間に、マメリュークは、『自由の家』における『大會』で、その出席者にどうしても我々と手をたづさへてゆかなければならないといふことを熱心に說いたのだつたが、セミレチェンスク『黨員』及び一般大衆は反對意見を持して動かなかつた。

★

シェガブートヂノフは、終日、要塞へ捕縛監禁されてゐた。戰革委員會に、彼を利用して『仕事をさせよう』といふ意見をいだくものがあつた。實行することになつた。

――おいらといつしよに仕事をやらないかね？

――もし君らがソウェート當局に反抗するのでなければ、そりやあ、いつしよに仕事をやつてもいゝよ。……

――どうして反抗なんかするもんかね――おいらこそソウェート當局ぢやないかね。――

シェガブートヂノフは戰革委員會へ加入した。しばらくして、彼は、アギドゥールリンに司令部の方へひと走りいつて、どういふわけでおれが戰革委員會へ加入してどんなことをやつてるかといふことを報告してくれ、とさゝやいた。――

回教徒赤衛兵を自己の周圍に集合團結せしめようとしてゐること。出來るだけ廣汎なる部分と抗爭すること。直ちに司令部へあらゆる事情を報告して、危險を警告すること。

我々は、アギドゥールリンを通じて、彼のさうした仕事に贊成の旨を告げた。戰革委員會は、直ちに、シェガブートヂノフを委員長書記長に任命した。彼はその地位にあつて非常に多くのことを我々に對してしてくれることができた筈だつた、だが、彼は政略家としては極めて不適任で、危險を犯して飛び越えてゆくべき境界を知らなかつた。彼は、無條件に、衷心から我々の利益のために戰革委員會に加入したのだつたが、同時に、彼は、あつといふ間もなく、恐るべき深みへはひりこんでゐたのだ――要塞令第一號に自署したのだ。彼の名はかうした指令のもとに亂用されてしまつた。

要塞令第一號とは、次の如きものなのだ、――

要塞令第一號

臨時セミレチェンスク地方軍事革命會議。

一九二〇年六月十二日　ウェールヌイ。

第一章

ソウェート政權、即ち勞働者農民、一般貧民、赤衛兵の政權擁護者の生活改善のため、人種的差別撤廢のもとにおける當地方一般勞働大衆の生活狀態改善のため、シベリヤ戰線における捕虜として我々のもとに來れる士官にしてソウェート諸官廳の責任ある職務に任命せられる者に關聯して當地方に惹起せられたる特殊情勢の解決のため、而して勞働大衆と赤衛軍一部との衝突を未然に防止するために、今六月十二日午后六時、ウェールヌイ守備隊赤衛軍

諸部隊の代表者により臨時地方軍事革命會議成立せり、その議員席次次の如し、臨時地方軍革會議長同志チェウーソフ、地方軍革會議書記長同志シェガブートヂノフ、諸議員同志クリーゼンコ、シュクーチン、プラソローフ、ウーイチッチ、本會議は本令發布日時より地方ソウェート非常大會召集日まで全權執行するものとす。

第二章

ソウェート文武兩諸官廳は、本令發布と同時に、臨時地方軍事會議の全指令に絶對服從すべきものとす。本會議に絶對に服從せざる諸官廳に對しては非常手段に訴へることあるべし。

第三章

ソウェート諸官廳は今十三日附十二時までにアンネンコフの下に勤務せる士官をその責任ある職務より全部免官處分に處すべし、尙、本令は即時實行すべし。

署名。

革軍會議長　チェウーソフ。
書記長　シェガブートヂノフ。
議員　クリーゼンコ、
シュクーチン、
プラソローフ、
ウーイチッチ。

これは十二日夕刻作成されたのだが、翌朝に至つてようやく發布された。

★

暴動第一日は終つた。要塞はひきつゞきざわついてゐる。誰も眠らない。ざわめきのうちに明けはなれたその日は、また、ざわめきのうちに暮れてゆくのだ。赤衛兵たちはかくしてあつた酒樽を引きづり出して、シェガブートヂノフとサラーエフが配置しておいた警備兵をだまして、大いにあふり、

果ては、醉ひつぶれて街の方へくりだしていつた、歌をうたふやら、脅かすやら、大へんな勢ひだ。……醉ひどれの斥候が放たれた、——喊聲をあげ、荒荒しく、凶兆に、物凄いばかりだ。市民はとつくに身をかくしてしまつた。窓はかたく閉ざして、全市は死んだやう、醉漢の亂暴狼藉をおそれてひつそりとしてゐる。我々の警備兵の全部が辻々に立つてゐた。——黨立學校の青年隊だ。暴徒の一隊はこの警備兵にさわがれるのがこわかつたのだ、——まだ彼等は特別部と裁判委員會に相當の兵力がかくされてゐるものと信じてゐるのだ。……暴動第一日は終つた。夜はどうなる、明日はどうなる?

要塞には、監房の中のやうな、——鐵窓のもと、うす暗い部屋の中で、その夜、戰時革命委員會が開かれた、——チェウーソフ、シェガブートヂノフ、シチューキン兄弟、ウーイチッチ、ブーキン、その他。種々協議した、——要塞側の兵力、司令部側の兵力、實戰上の勝味があるかどうか、武器が手に入るかどうか。……

深夜——酒に醉つたペトロフとカラワーエフ、その他大勢、どやどやとなだれこんできた。——

——こゝぢやあ何をやつてんだい、あひもかはらず協議中か? そいで實際の仕事は何にもしやがらねえ! 敵はあのまゝほうつておく氣か……えゝ、畜生、何だとおもつてやがるんだい!!

細目に開いてゐるドーアから次から次へと押し入つてきて——小さな部屋はたちまちいつぱいだ。

窓のもとにはざわめく大群集、鐵窓からもれるこの罵り聲をきいて、共鳴、興奮、醉ひどれの親分にけしかけてゐる。

カラワーエフが演說を初めてる。神經質なえぐるやうな聲でがなり立てゝゐる、拳固を振りまわして激烈な演說の調子をとつてゐる。

——何をぺちやくちや相談ばかししてやがるんだ……こん畜生奴、ほら吹き野郎! おれはペトロフといつしよになつて三月もこの暴動の準備をしたんだぞ、ところが、てめえらは何をやつてる? ぺちやくちやしやべつてるばかしで、實際の仕事はちつともしやがらねえ。もう——三月なんだぜ! 馬小屋や、兵舍の影に、まるで泥棒か何かみたいに、逃げかくれしたんだぜ。……とても嚴重な監視なんだ。……味力はちつともねえ。……スパイにかこまれてる。……ところが、うまく、ブーキンとウーイチッチが援けてくれて、步哨大隊が味方になつてくれて、……今では、もう、第二聯隊も、第二十五聯隊も我々の手に落ちてるんだ、第二十六聯隊へも代表を派遣した。今だ、今こそ活動を開始すべきときなんだぞ、ぺちやくちや相談なんぞしてられるときぢやねえんだぞ、——てめえらのやることつたら、無駄口をきくより他にねえんだからな! ウズウン・アガーチュ、カスケレーナ、タルガール、その他到るところの兄弟がみんな——おいらの味方なんだぞ、用意してるんだぞ。……この

機を逸したらもう駄目だ、ぐずぐずしてるときぢやあねえ、直ちに特別部を占領して、やつらがおいらを——二年間も血の流れるおもひでこきつかはれた赤衛兵をおつぱらつてた方面へ、やつらをおつぱらはなきやならねえんだ。『クムルシュカ』（註11）はもう逃げちまひやがつた、あとの奴を逃がさぬやうに直ぐ捕縛しなきやあならねえんだ、速くやらなきやあならねえ、でないともう遅い。……

赤衛兵の群は興奮、カラワーエフに共鳴してどなり立てた、——

（註11）裁判委員長イー・エス・コンドウルーシュキン、當時要務を帶びて地方巡視中。

——何をやつてやがるんだい。……全くだ。……やつちまはなきやならねえ、ぐずぐずするねい……

この叫び聲で空氣は白熱した、事態は切迫した。

——それつ、——群集の中から誰か叫んだ、——そこにスパイがゐるぞつ!!!! 何だつてそこへおいてくんだい、こつちへ引きづり出せつ、やつつけちまへつ……

誰も名前はいはなかつたが、誰のことをいつてるのか直ぐわかつた。群集は身慄ひをし、齒をきしらせた、——電氣に打たれたやうだ。一瞬にして——萬事休すだ。

ペトロフは獸のやうに躍りかゝつた、シェガブートヂノフの脊中をいやといふほど銃床でなぐりつ

けた。シェガブートヂノフはきやつといつたきりで、うち倒れた、——

——貴様は何だ?

もう一瞬で、たつた一瞬の沈默の後に、また新しい一撃だ——興奮した群集は躍りかゝつて血祭りに上げたかも知れない。

だが、チェウーソフが叫んだ、——

——おい、どうしたんだい、ペトロフ、ほつとけ、ほつとけ。……シェガブートヂノフは——こつちの味方なんだぜ、我々といつしよに仕事をやつてるんだよ。

ペトロフは何が何やらわからなくなつて、靜かにあとしざりした、同時に群集もやはらいだ、彈力を失つたゼンマイのやうだ。……

——おい、怒らないでくれよ、おれはそのう……

シェガブートヂノフは彼には一言もこたへないで、たゞ痛む脊中をじつと動かすやうにしながら、紫色のかわいた唇をひん曲げてゐた。

ペトロフはまのわるい沈默を破つて、激越な調子で叫び立てた、——

カラワーエフのいふことは同感だ、全くほんとうのことだ。……ずつとまへからおいらは用意にか

ゝつてたんだ。苦心したゞけ、——そのことはよくわかつてるつもりだ……ところで……それは、そのう……いちばん大事なことは——急いでやらなきやならんてことなんだ。……大急ぎでとりかゝらなきやならんのだ！

すると、また、カラワーエフの熱辯だ。——

——おれはペトロフといつしよに電信線切斷敢行とでかけたんだ。……でかけると、司令部側の斥候の野郎にひつつかまつたんだ。……やつらは拘留しようとしやがつたから、おいらは許可證をつきつけてやつた。……すると、無事放免ときやがつた。……何でもなかつたよ。……

カラワーエフは狡るさうな眼付きで周圍の連中をみまわしながら笑つてみせた。

——ほんとうなんだよ、——彼はつゞけた、——切斷されちやつたんだよ、『やつら』もう誰とも電信で話しするこたあできねえんだよ。きやつら一人ものがさねえやうに、急いでやりさへすりやあいゝんだよ。……

そしてカラワーエフは賛成を求めるやうに狡るい眼付きであたりをみまわした。

——カラワーエフはほんとうのことをいつてるんだ、——ブーキンがわめき立てた、——急いでやらなきやあならねえんだ、だつて——赤衛兵はやつつけちやはうつていつてるんだから。……

——もう出かけようつていつてるんだよ、——ねぢん棒のウーイチッチが口を出した。——もう、いま直ぐ、司令部の方へつつかゝつてゆかうつていつてるんだよ。

チェウーソフは立派なひげをもつたい振つてひねり上げてから、さも自信ありげにいつた、——

——さうだ、もうやつてもいゝよ。戰時會議は用意できてる……

シェガブートヂノフはじつと默つてゐた。銃床で一撃をくらつてからは、こゝでひとことでも餘計なことをいはうものなら、彼の『地位』はたちまち失墜してしまふだらうし、それに、カラワーエフやペトロフなどのいふことを信ずるやうには——誰も信じてはくれまい。だが、今は非常時だ、——彼等はもう最後の決心をしてしまつたんだ、——要塞側はもう出發に賛成して用意にとりかゝるてんだ。……きやつらは決心したんだ。……これで司令部が壞滅したら——どうなるんだ？　きやつらに反對するのは今だ、今だ！

——諸君！——シェガブートヂノフは開き直つた。——君たちは司令部へ向つて出かけられるといふことだが、わしは君たちに注告したいことがあるんだ。……

——まだ何かぐづぐづやつてるぞ？

群集の中からわめき立てる。

——わしが注告したいつていふのは、——彼はつゞけた、——先づ最初に交渉した方がいゝつていふことなんだよ、——急におしかけちやいかん、先づ交渉してみなきやいかん、だつて向うは——やつぱり憲法上の當局なんだから。……

——おいらの方が當局だい、——憎々しげな叫びだ、——今となつて向ふに憲法上の何があるとはおもへん。……

——そりやあ戰爭といふもんだ、また戰爭がおつぱじまるわけなんだよ、——シェガブートデノフはさへぎつた。——何故つて、君たちが司令部へおしかけると、司令部の方では特別部や裁判委員會から全勢力を集めて君たちに向つてくるからなんだ。——向ふには機關銃があるんだぜ、君たちも知つてる筈だが……

またざわつきだした。チェウーソフがまづぐらつき出した。——

——おれにもさう思へるんだが。……おれにも、その、どうも、……先づ交渉をやつた方がいゝやうに思へるんだがね。

——無論、やつてみなきやいかん、——ワシーリー・シチューキンが彼を支持した。

ほかにまだ四五人の者が支持した。どんな方法で、また何時、司令部の方へ代表を送るか、討議し

だした。だが、それよりも先、——電話をかけた。

ペトロフとカラワーエフは氣味わるく默りこんでしまつて、その討議に加はらなかつた。ウーイチツチとブーキンがめくばせして、外へ出てしまつた。彼等がゐなくては代表のことも全くおじやんなので、居合せるものもみんな次から次へと出ていつた。殘つたのはチェウーソフとシチューキン・ワシーリーにシェガブートデノフだけだつた。……夜の三時だつた。……疲れ果てゝ床の上にころんでまどろみかけたところへ、また、ドーアがあいて、どやどやとはひつてきた。

——今、新戰時會議が成立したんだ、——誰にいふともなくペトロフは大聲で報告した。それからチェウーソフの方を向いて、——いま、赤衞兵が新においらを選擧したんだぞ、——おれが議長で、それから、チィョールノフ、ブーキン……

——ところでおいらの方はいつてえどうなるんだい？——チェウーソフはおどろいてしまつた。

——おいらこそ大會で選擧されたんぢやあねえか。……

——いや……それでおれは司令官の役をおほせつかつたんだ、——チェウーソフのいふことに耳をかさないで、ペトロフはつゞけていつた、——それからブーキンが副官で、チィョールノフがコムミサールなんだ。もう、今となつては一刻の猶豫もならん、今直ぐとりかゝらなきやならねえんだ——

——諸君、シェガブートヂノフが彼等に向つて、——君たちはこのわしを信じてはくれまいが、だが、ともかく、このわしは、新戰時會議成立のためには、また新たに全要塞大會を開催しなきやならんと考へるんだが。……だが、今は、實際上、ペトロフ君が軍事上のことはやつてゆかなきやあならないんだから、會議の方はわしら自身でやつてゆくことにしようぢやないかね。……

ペトロフは反對しなかつた。彼には、何か新しい考へが浮んできたのらしい。——

——うん、よし。だが、第一番に——おれが司令官だといふ要塞令を出してくれ、——急に彼はひつそりとした戰革委員會へ向つていつた。

——きまりきつたことだ、——シェガブートヂノフは確認した。

——第二に——司令部は直ぐおれに……

——それもいつしよにやらう、——シェガブートヂノフは答へた。

——司令部はちよつと待つてもいゝが、要塞令は今直ぐ……

要塞令はとり急ぎ作成された。それは次の如きものだ。——

× × ×

要塞令第三號（註12）

臨時セミレチェンスク地方軍事革命戰時會議

一九二〇年六月十三日　午前五時

第一章

同志ペトロフをセミレチェンスク地方軍司令官に任命す。同副官、同志ブーキン。前者は直ちに職務執行にとりかゝるべし。

第二章

同志チイヨールノフをセミレチェンスク地方軍司令官附軍事政治部委員長に任命す、直ちに職務執行にとりかゝるべし。

臨時セミレチェンスク地方
軍革戰會議長　チェウーソフ。
同書　記長　ベー・シェガブートヂノフ。
議　員　シュクーチン。
　　カラワーエフ。
　　プラソローフ。
　　ウーイチッチ。
要塞司令官　シチューキン。

ペトロフとカラワーエフ、それにつゞいて他のものもみんな出てゆかうとした。

――きやつらみなこつちへ呼ばなきやいけねえ。

ウーイチッチがいつた。

――誰を？

――師團司令部の奴さ。何をやらうつてのか、みな吐かしちやふんだ。

そしてウーイチッチは口をひん曲げてうす氣味わるい微笑をもらした――言つたことゝはまるで別なことを考へてるのらしい。だが、この考へにはみんな賛成した。電話で師團司令部を呼び出した。ビェーロフ、その他を即時要塞へ派遣するやう提議した。

――野郎、こわがつて來ねえぞ、――カラワーエフがわめいた。

――いや、來るよ、呼んだ方がいゝよ、――チェウーソフがわらひながら答へた。

（註12）要塞令第二號は保存されてゐない。それに、何時どういふ理由で作成されたのかも――不明である。

★

我々はみんな師團司令部で徹夜した。タシュケントへ電信をかけて、いろいろとニュースを報告した。夜のうちに、二度も、要塞からアギドゥールリンがかけつけてきて、最初、シェガブートヂノフが少しのことで殺されるところだつたといふこと、次には――要塞側がいよいよ出發しようとしてゐるといふことを、興奮しながら話してかへつた。我々の偵察隊は三十分毎に各方面から司令部へ報告にかへつてくる、醉ひどれの要塞側の斥候がどこをかけづりまわつてゐるか、誰を袋叩きにしたか、どこで亂暴をはたらいてゐるか、無斷で家宅捜索をやつてゐるかなど。……我々は刻々成行を注視して

ゐた。すると、要塞側から電話だ、——

——即時、ビェーロフを要塞へ派遣されたい。

午前三時だ。我々は熟慮に熟慮をかさねた末——パンフイールイッチに、行くな！……といつた、——

——朝まで待つことにしよう、それまでは行くなよ。

朝、再び電話。——

派遣しろ！　要塞側の要求だ！

——おれはゆかう、——ビェーロフがいひ出した。——バヴルーシュカをつれてゆかう、このベレスネフとゆかふ、さもないと、きやつらおれたちがこわがつてると思ふからな。……

この時はもう事態もかはつてゐた、朝の七時だ。

夜の三時、酔漢相手では危険は尚更だ。

今は夜も明けはなれて、酔ひどれの暴漢よりはこなしよい。

ビェーロフとゝもにボチャロフ、クラヴチューク、パーツインコ。出發にあたつて我々から註文ぜめだ。

——パーヴェル、——ビェーロフはベレスネフに言ひ付けた。——貴様は要塞で、いゝか、餘計なことをいふんぢやないぞ。我々の現有勢力をいつちまつちやいかんぞ、もし問ふたら——三十倍位にうそつかんといかんぞ、いゝか。……

——よろしい。いはれなくても分つてますよ。

それからは默つたまゝだ。ベレスネフはビェーロフを尊敬してゐた、そして彼は自分を中央や特別部から『かばつてくれる』ことができると信じてゐたのだ。

要塞へついた。

城門では、さうざうしい同志に擁せられて、カラワーエフが出迎へた。——

——馬から下りろい、武器をわたしちやへ、——彼は一行に向つていつた。

——カラワーエフ、貴様そんなことをいふのはよせ、——ビェーロフは斷乎としていつた。——問題は我々のもつてる四挺のピストルにあるんぢやないぢやないか、我々はともかく要塞側の招待によつて……代表としてやつてきたものぢやないかね、その代表をつかまへてそんな眞似をするのはよせ。

——いや、そりやあ君らのことを思つていつてることなんだよ、君、——カラワーエフは狡るい微笑をうかべながら弁明した。——君らに注意したまでのことなんだよ。知つてるかね、大衆は非常に硬

化してるんで、ねえ、君、知つてるかね、殺つつけちやえ！……つていひかねないところなんだよ。つまり、君らを、やつつけようてんで。……熱狂のあまり君らが狙撃されるかも知れないんでね。……

暴徒の群は一行をひしひしと取り圍んでしまつた。どうすることもできない。それなのに火蓋を切ることは不利だといふ——何故だ？　一行はじつと默つたまゝピストルを取り出してつきつけた。

群集は默つたまゝ遠のいた。カラワーエフは皆のものに聞えよがしに大聲でビェーロフを詰問した、

——

——ビェ！ロフ君、そりや何の眞似だ、君らのよくいふ白色テロぢやないか、あん？　氣を附けたまへ……

そしてカラワーエフは片手であたりを拂ふやうにした、——

『えへつ、何ててえした獲物ぢやねえか！』

とでもいひたさうだ。

ビェーロフは默つてゐた。すると、カラワーエフは更に鋭く、大きな聲で。——

——ビェーロフ、そりや白色テロの眞似ぢやないか、あん？

靜かに斷乎としてビェーロフは答へた、——

——分らないよ、君、分らないよ——早合點するもんぢやないよ。——更に斷乎として附け加へていつた、——ぢやあ、これから我々を戰革委員會へつれてつてくれ、あそこぢやあ待つてるだらう——

——何のために我々を呼んだんだ！

カラワーエフはパンフィールイッチのこのもの靜かな斷乎とした調子に打たれてすつかり度を失つてしまつて、何をいつていゝのか分らなかつた、だが、ビェーロフが靜まつた群集の中を悠々としておしわけて向うへ行つてゐるのをみると、急に思ひだしたやうに急ぎ足で彼のあとを、……追ひついて戰革委員會へ案内した。

戰革委員會の部屋は人でいつぱいだ。委員は全部こゝへ集つてゐる。彼等は司令部から代表がくるのを、今か今かと待ちかねてゐた。机の中央にチェウーソフが泰然として控へてゐる。ビェーロフが同僚を從へてはひつてくると——チェウーソフは彼に向つて、——

——やあ、君を待ちかねてたところなんだ。師團の主人公としてやつてこられたわけなんだね？

——おれは主人公なんていふんぢやないよ、師團長だよ、——ビェーロフはチェウーソフの言葉を訂正した。

——そりやあ同じこつたよ、——チェウーソフはたじたじだ。

——それぢやあ、——ビェーロフがいつた、——どういふわけで諸君は我々を呼んだんだね？

赤衛兵たちはじつと首を伸ばすやうにして、眞面目に聽き入つてゐた。他の連中はひやかすやうにいつた、——

——別に、そのう……別に、どうといふわけはないさ。……ともかくこの連中が手にはひつたんで……

——君らに詰問したいことがあるんだが、——チェウーソフが說明しだした。——例へばだ、我々は、司令部へ代表を送つた、君らも送つてよこした。……そして全く友好的關係が結ばれた。……我々は君らも流血の慘を避けようとしてるものと信じてたんだよ。いゝかね。……ところがだ、君らはその後も司令部から方々へ步哨を立たせたり、要塞の方へ向けて機關銃を据え付けたりしてるのは、あれは、いつたい、どういふわけなのだね？

——そりやあ、うそだよ、——ビェーロフは斷言した。——要塞の方へ向つて機關銃を据え付けたなんてこたあ斷じてないよ。うそだよ、それから方々へ步哨を立てゝるつてことだが——そりやあ諸君の方でもやつてるこつちやないかね。——かういふ事態になつてくれば、我々としても自分の本部は守らなきやあならないからね。……

——うふつ……さういふわけなら……それはいゝさ、——チェウーソフは自慢のやはらかい口ひげをひねつた。

彼はどつかと椅子にこしをおろして悠然とかまへてゐる、この不意の新しい役目に得意になつてるらしいのだ。彼は、このとき、自分は單なる訊問者ではなくて、高等法官だ位には心得てゐたらしい——そのポーズといひ、眼付きといひ、大まかな言葉付きといひ、誇大妄想的なもつたい振りが目につきすぎるのだ。

——ふん、よろしい。……ところで……あれはどういふわけだな、——ビェーロフの方をにらみつけて彼はつゞけた、——二三日前に武器を車に積んでたのは、あれはどういふわけだな、……おまけにそれを他でもない、バリハーシュ湖の方へはこんでつたのは、あれはどういふわけだな？

——キルギス人の野郎を武裝させようつてんだ！——誰か壁の方からわめき立てた。

——そりやあ何だい、まるでうそだよ、たわごとだよ。——ビェーロフはチェウーソフの方をきつとみつめながら、——どつから、いつたい、さういふことが知れたんだね？

——自分で見たんだよ。

——その自分で見たつてのは何だね？

——車に積んでたところをさ、……そのう……あれだよ……

——よし、そいぢやあ、君……——といつてパンフィールイッチは兩手をひろげた。——わしは公言する、——急に彼は聲を張り上げた、——最近武器を車に積みこんだりバリハーシュ方面へ運搬したりしたなどといふことは絶對にないといふことを、こゝに公言する。そりやあ……そりやあ全く流言といふものだよ。

急にカラワーエフがテーブルをたゝいた、——

——きやつらのいふことなんかきいてるこたあねえやい。いゝ加減のことばかしぬかしやがつて。……何でい。おいらあこれから直ぐ司令部へ押しかけてつて何もかもこゝへ持つてきてしまへばそれでいゝぢやねえか。……

——よせ、よせ、カラワーエフ、——チェウーソフがとめた、——よせつたら、そんなことをいふのはよせ。

カラワーエフもかうどなりつけられては流石に默つてしまつた。

——カラワーエフ、ちよつと待て、ところで君、——彼はビェーロフの方へ向つていつた、——君はもう一つ答へてくれんかね、——君の方には、特別部と裁判委員會とに機關銃はいくつあるかね

——さうだね、わしなんかにどつからそんなことが知れるもんかね、きやつら少しもわしのいふこたあきかないんだからね、——ビェーロフは嚙んではきだすやうにいつた。——きやつらに問ふてくれ給へ、何のためにこゝに本部があるんだね……

ちえつ、何をぬかしやがるんでえ、——また誰かゞどなりつけた、——何もかもうそ八百でえ。やつつけつちまへ……

——どうだい、——ブーキンが金切聲で、——こやつらと話なんかするのはよしちやつて、ビェーロフと、それからいつしよにやつてきた奴を、ひとつ、獨房へ放りこんぢまつたら、どうだい……

彼はさつと椅子から立ち上つて、パンフィールイッチのところへ歩いていつて、肩をひきつかんでどなりつけた、——

——おい、獨房へやつてゆかんか、そこへはいつてろい、仕事はおいらばかりでかたづけつちやふからな。

ビェーロフは憤然としてブーキンの手をつきのけて、叫んだ。——

——何だと？　おどかしたつて駄目だぞつ！　わしらを捕縛してみたり……銃殺してみたりしたところで、いゝか——そんなことのために革命がぐらつくなんてこたあ斷じてないんだぞ。……それに

そんなことをすると貴様らのためにもならんぞ。……さうなると事件はもう流血の慘なしに解決するなんて見込みはない、——特別部、裁判委員會、師團司令部の幹部は——決して貴様らをたゞではおかないからな。……わかつたか、——戰爭になるぞ、血をみねば片づかんぞ！　貴様ら自身が代表を送つてきて流血反對の旨を提議したんぢやないか！……

一同しいんとなつて彼の激烈な演說に聽き入つた。

——わしはかうしたらどうかと思つてるんだ、——ビェーロフはつゞけた、——いつしよに司令部へいつてタシュケントへ電信をかけて、總司令官を呼びだしてみて、もし總司令官が武裝解除の命令を下したら——さういふことにしよう。……さうすると血をみないですむことになるからね。おい、どうだ——ゆかないか、さうやつてみないか。……

この言葉は異常な印象をあたへた。ビェーロフについですぐベレスネフが——

——このおれが——このパーヴェル・ベレスネフが保證するよ。おれはとつくの昔からビェーロフをよく知つてるんだが。この人はいゝ人だよ。この人にかぎつてうそは決していはないから。その人がかういつてるんだ。この人は本當の革命家なんだ——この人のいふことをきかなけりやあいけないよ。……

つゝ立つて、ふいに大聲で話すと、急にだまりこんで、こしをかけ、大きな兩手で頭をかゝへた。

地方革命委員長メルリンがこの場にゐあはせた。

——皆さん、このわしのぼろ靴をみて下され！——さういつて彼は底の破れた靴をあげてみせた。——だから、どうぞひどいめにはあはせないで下され。長いあひだこのセミレチェンスクで働いてゐるこのわしを信じて下され、このビェーロフといふ人はとつくの昔からよく知つてるがほんとうにいゝ人なんだよ。……どうか、どうか、皆さん……

メルリンは何だかわけのわからないことをならべたてた、だが、このときにはもうその場の空氣がすつかりかはつてゐた、——最初のうちの激怒の跡もなかつた。ビェーロフといつしよに戰時會議の代表者が師團司令部へでかけていつて個人的に中央との交渉に參加するといふことに贊成した。

チェウーソフとカラワーエフが選出された。

だがこのためにどうといふことはなかつた、たゞ、ボチャーロフとクラヴチュークが人質として要塞に殘つた。パーツィンコはビェーロフといつしよに歸つてきた、それについてチェウーソフ、——カラワーエフは三十名の騎馬隊をつれて途中を守らせた。そして師團司令部へのりつけると、カラワーエフとチェウーソフは——擊たれるかも知れないと——ビェーロフを先きに歩かせて、おづおづと

あたりをみまはしながら、後からついていつた、廣場へはひつていつたときは生きた氣はしなかつた電信機のところへ近よつていつた。師團司令部へ居殘つてゐた我々もいつしよだ。

戰線革命會議を呼びだした。

★

その日、十三日早朝、市黨機關が委員會附近へ集合した。黨員の手には軍事會議へ出頭せよといふ地方委員會の指令が渡つてゐたのだ。だが、彼等はそのことはちつとも考へようとはしなかつた——黨旗を押し立てゝまつすぐに要塞へとなだれこんだ。そこでは、ようこそとばかり、鳴物入りで歡迎した。黨員代表は、戰時會議の贊成を經て、暴徒といつしよになつて働いた。要塞側は或る意味で自分を『革命的』だと感じてゐた。また、實際、どんなに革命的になつてきたことだつたか！

まるで共產黨員と同じやうな調子で、『共產黨員を追放せよ』と絕叫することもできるし、食糧給與委員を銃殺することもできるし、特別部や裁判委員會の武裝解除を要求することもできるし、全文武諸官廳を廢止して、要塞側反革命的政府樹立を宣言することもできるし、——これらは全く共產黨員と同じやり口ではないか！

そこで市黨機關を迎へたときも要塞側は非常に得意だつた、——

——おいらの仲間だ、——要塞側の判斷はまちがつてゐなかつた。

入城のときに祝賀演說までやつて、——交歡した。歡迎會の席上、黨からはキルポが登壇するの『大いなる光榮』を有した。

鄭重な公式聲明書の交換までした。要塞側が、——

市黨委員會へ

臨時軍事革命會議は黨員四名を本會議幹部へ加入せしめんことを提議す。

臨時軍革會議長代理

議員　エフ・シュクーチン

議員　クリーゼンコ

議員　ブラソロフ

カラワーエフ

と、書いたのに對して、市黨委員會は、——

市黨委員會はこゝに臨時軍革會議へ同志メニコフ、デムチェンコ、キブロ、ドウブリーツキーを參與せしむべきことを聲明す。

九名署名

ひとくちにいへば、當然の『形式』一切を遵守したわけなのだ。當幹部の一人ドウブリーツキーは非常に熱心で、早くも仕事にとりかゝつた、とりいそぎ戰時會議へ出席して、地圖へ向つて、暴徒たちといつしよになつて特別部襲擊の策戰をこらした。それももつともなことだ、こいつはまだやつと十九になつたばかしの青年だつたのだ。その後、裁判にふせられたとき、彼は自分の誤謬と罪過とを認めたが、あひかはらず少なからずわるいことをしでかした、——そしてこのことにばかりでなく、その他のことでも、同じやうな辱づべきいまはしいことをやつてゐたのだつた。ひとくちにいへば、要塞側は市『共產黨員』と接觸を保つたのだと感じてゐたのだが、更にすゝんで彼等を叱咤しだした。例へば、『自由の家』で開催されたもつとも尊重すべき大會へ要塞側は次のやうなかなりはつきりし

た……通牒を發した。

通　牒

臨時セミレチェンスク地方軍事革命會議は、『自由の家』にて開催せられたる全機關聯合大會に對して、その代表を赤衞軍に關する諸問題解決のために正午前八時までに要塞へ派遣せしむるやう通告するの義務ありと信ず。もし本會議へ出頭せざる場合は、臨時セミレチェンスク地方革命戰時會議を首班とするソウェート當局に服從せざるものとして相當處罰せらるべし。

一九二〇年六月十三日、午前六時、　要　塞。

臨時セミレチェンスク地方軍事革命戰時會議長　（署　名）

同書記長　（署　名）

祕　書　（署　名）

ウェールヌイ地方『黨員』全部はだまつて從ふより外なかつた、要塞側の壓迫が一時に加へられてき

たのだ。市黨委員長がタシュケントの地方黨委員會へ宛てて、無事平穩なり、援助の必要なし、と打電したのも無理のない話だつた。

實際、何のためにどういふ援助を要求したものだつたらうか？　彼等は全く混亂に落入つてしまつて、まるで釜の中の魚のやうな氣がしてゐたのだ。

いま、要塞で、チェウーソフがビェーロフへ向つて不當な訊問を試みてゐるときにも——彼等黨員代表はさうした訊問反對の聲をあげようとも思はないで、如何にも同感してゐるやうな樣子で暴徒といつしよにこしかけてビェーロフの答辯をわらひながらきいてゐた。

たゞメーニコが自分の『ぼろ靴』を種に口を出しただけだつた、それも何だか涙つぽく、クリスチャン的にお願ひをしただけの話しだ。

人質になつたクヴァルチェークとボチャーロフは——早速投獄されてしまつた。黨の同志が投獄されるのに、『黨の代表者』は囚徒に有利なことは一言もいはないで、そつぽを向いてせゝらわらつてゐた。自分らのかまつたことぢやないのだ、——『黨員』は朱に交らないのだ！

直通電信をかけるとき、チェウーソフとカラワーエフに、デムチェンコ、メニコフ、ドウブリーツキーの三人が立合つた。タシュケントは出た。

これより先、昨日キルギス旅團本部における會見が終るとすぐ、我々は十二個條の決議事項について中央へ報告した。そして警告した、——

決議することは決議したが、この決議そのものには三文の値打もあらうとは信ぜられない、何故なら要塞側代表と要塞全體の意向が一致してゐるとはおもはれないから、各代表を——要塞にとつては——下らないものだと輕視してゐるかも知れない。

いま、師團司令部では、電信をうつ前に、まづ、我々は暴徒側とゝもに、中央へ報告する『共通的意見』をまとめる會議を開かうと提議した。會議の空氣はいつもの通りだ、暴徒側はいつものたわ言だ。ともかく或る程度の『了解』に達した。電信をうつことになつた。そのときの會話の記錄は完全に保管されてゐない。その他の會話もきれぎれにしか殘つてゐない。(註13)　それによると、明らかに、我々一同が電信をうちにゆく前に、誰か我々の同志の一人がタシュケントと次のやうな會話をとりかはしてゐるのだ、——

(註13)　それに文字がかさなり合つてゐたり、半分しか書けてなかつたりする。

——ノウィーツキーを呼んで下さい、至急！

——こちらはノウィーツキーだ、トルキスタン中央執行委員會委員——イブラギーモフ、同執行委

員長――ビセロフ、他のものは今はゐない……

――こちらは全權を委任された祕書です。……事態はますます急を告げてゐます。自稱戰時會議なるものが彼等によつて擁立された司令官に軍事上の全權を讓渡せよといふ最後通牒的な要求をしてゐるのです。――責任ある役人を捕縛しようとしてゐます。……暴徒はウェールヌイへ通ずるあらゆる要路へ歩哨を出してゐます。……事態は實に切迫してゐます、酒をたくさん手に入れてゐます、悲しむべき最後が近づいてゐるものといへます。……我々はこゝで縛に就くのを待つてゐるべきか、逸早く山の方へ避難すべきか、いづれかを知らして下さい。……

我々はこんなことを交渉しろなどと命令したおぼえはない、殊に『縛に就くを待つべきか、山へ避難すべきか』などいふ愚劣極まる質問を成す筈がない。

タシュケントなどでそんなことがわかるわけのものぢやない。如何なる瞬間までこゝに居すわるべきで何時避難するのが有利であるかなどいふことは、我々自身にこそよく分る筈だ。だが、そのときは何しろ興奮の渦の中にゐたので、殆んど誰彼の區別なく電信へ出て無責任な會話を交したのだつた。我々はそのことは初めのうちは知らなかつたのだ。電信技手の愚痴で初めて分つたやうなわけなのだ

――へとへとですよ、――みんな打つんですからね。……

――みんなつてどういふわけ？　――我々は驚いてとうた。

――いや、さうなんですよ、――出ました、出ました、――どうぞ。

尤も、物好きなのがゐて、またしてはいろいろなことをタシュケントから聞いてくるといふことはあつた、――

――何か變つたことがあるかね、どんな樣子かね？

そんなときには側に居合せたものが勝手に返答するのだつた。何もかもいつぺんに見透すことはできるものぢやない。

この『山へ避難する』といふ交渉はこれだけで思ひ切つてはゐない。まだ次のやうな斷片が保存されてゐる、――

――こちらには革命軍事會議員――クイブイシエフとイブラヂ〳〵モフ、トルキスタン中央執行委員長――ビセロフ、委員會議長――リュビーモフ、同志フルンゼは今直ぐやつてくる……

――赤衞軍司令官候補としてビェーロフを固執されたい、ウェールヌイから誰かゞタシュケントへ忠告してゐるのだ、――それからさつきの問題(卽ち、山へ避難すること)に答へてほしいのです。